
そして時は廻る

砂那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして時は廻る

【Zコード】

Z35550

【作者名】

砂那

【あらすじ】

異世界トリップファンタジー。

普通の会社員だった二十歳の里香子は、運命の女性、王の花嫁として異世界に召還された。

けれど手違いで王都から離れた場所についてしまい、親切な人に助けられて近くの村で働いていた。

そして、自分の運命も知らずに別の相手と恋に落ちてしまつ。彼女を愛する一人の男。

ひとりは理想を掲げ、それを実現させるべく戦う高潔な王。

もうひとつは、虜げられている仲間を守る為に戦う盗賊。
そして里香子に秘められていた、この世界との関係は。

序章 銀髪の魔導師

湿った石畳の廊下に、カツン、カツンと足音が響いていく。

術衣を纏つたひとりの青年が、暗い地下道を足早に歩いていた。闇の中でも鮮やかな、朱色のローブ。その合間からこぼれ落ちるのは、銀色に煌めく髪。

視界を覆う暗闇の中。洞窟を掘り進めたかのような荒い造りの壁には、地下水が天井から滴り落ちている。ぽつん、ぽつんと時折、彼の足音に混じって聞こえる水音。独特的湿った空気。その中を彼は躊躇いのない足取りで進んでいく。その手元に灯りはない。けれど彼の歩みにきつちりと合わせて、その周囲だけが明るく照らされている。身に纏っている衣装が示すように、彼は魔導師なのだろう。長い石畳の廊下の奥には、木製の小さな扉があつた。背の高い者ならば屈まなければ潜れないだろう。扉には魔方陣のような物が刻まれ、淡く紫色に光っている。魔法によつて施錠されているようだ。彼はその魔方陣に手を掲げて小さく解呪の言葉を呴く。言葉は魔方陣に吸い込まれ、扉はまるで溶けるように消滅した。その後に現れたのは白い霧のような靄。

銀髪の魔導師は何の躊躇いも残さずにその中へと入つていく。彼がその中に消えた後には、また何の変哲もない木の扉が出現した。紫色の魔方陣もまた甦る。

その扉の向こうは魔力のない者にとつては、ただの岩壁でしかない。白い霧のようなものさえ見えないだろう。けれどその扉を正しく解除した魔導師が通れば、別の空間へと繋がる扉となる。

それはあの暗い地道からは想像も出来ないほど広い部屋へと繋がっていた。四方を本棚で囲まれ、古びた本が上から下まで整然と並んでいる。中央には大きめの机があり、そこにも数冊の本が、こちらは無造作に積み重ねられていた。

この部屋には窓も入り口の扉もない。

他者の侵入を防ぐために入り口を別の場所に作り、魔力で道を繋げているのだろう。

彼はその部屋の中央まで進むと、目深に被つていた術衣のローブを外す。長い銀髪がさらりと流れた。白い肌に、深い緑色の瞳。整った容貌だが、その表情は晴れやかではなかった。何か重大な秘密を背負っているかのような、憂いを帯びた表情。

慎重に、机の上に一枚の古びた紙を広げる。そこには複雑な魔法文字が書き込まれていた。

何度も頭の中で繰り返してきた呪文を辿るように、彼はその翡翠色の瞳を閉じる。緊張しているのか、机に置かれていた掌が震えている。

どのくらいの時間が経過したのだろう。彼は瞳を閉じたまま、心を惑わせる迷いが消えるまで、そのまま佇んでいた。外界から隔離されたこの部屋では、太陽の沈む様子もわからない。やがて彼は、覚悟を決めたかのように瞳を開き、両手を前に掲げた。

「必ず」

必ず成功させる。彼はそう言いたかったのだろうか。

だが魔導師の発する言葉には、強い意志が宿っていた。もう迷いは微塵も感じさせない。高まる魔力。慎重に、次元の扉を構築していく。

異世界へと通じる扉を開く。それが彼の使命だった。

この魔法を構築したのは、彼の父だった。偉大なる魔導師であつた父が、成し遂げられなかつたこと。それを達成させるには、まだ力不足なのは自覚していた。けれど、もう猶予はない。だからこそ、絶対に成功させなければならない。

魔力はまるで吸い取られるように、この扉へと引き込まれていく。けれどまだ足りない。まだ安定していない。

(……失敗する訳にはいかないんだ)

唇を固く噛み締め、すべての魔力を出し尽くそうと意識を集中させる。まるで命までも吸い取られていくような極限の中、ようやく

掴んだ確かな手応え。異次元への扉が構築されていく。

たくさんの人間。何十億もの命の気配を感じる。その中からたつたひとりを探し出さなければならない。慎重に気配を探っていく。

固く閉じた瞳。彼の白い額に、汗が滲んでいる。

探しているのは、ひとりの女性。

この国にとって、国王にとって、そして自分自身にとっても特別な存在である女性だ。

何度も途切れそうになる意識を必死に繋ぎ止め。持てる魔力をすべて出し尽くし。そしてとうとう、運命の娘を見つけ出す。

その足元に魔方陣を構築し、次元を越える扉を作り出した。そして彼女が確かにこの世界へと移動するのを感じた。あとは、きっと吉報を心待ちにしているだろう、王の元へと彼女を移動させるだけだ。

あと少し。だが気力も魔力も、そこまでが限界だった。途切れそうになる意識を必死に繋ぎ合わせようとするが、限界を超えた身体は急激に闇に沈んでいった。

「……、……」

何故父は、これを実行しなかったのだろう。

魔力も体力も自分よりも勝っていた父ならば、自分よりも成功率は確実に高かつただろう。

それなのに、何故。

意識を手放す瞬間に感じたのは、途中までとはいえた目標を達成したのだという満足感ではなく。何故か、取り返しのつかないことをしてしまったかのような、罪悪感だった。

1・1 異世界の朝

今まで二十年の人生の中で、鳥の騒りで目が覚めたことなどあつただろうか。

窓から差し込む太陽の光。

眩しいその光を感じながらゆっくりと瞳を開けて、窓の外を見る。朝を司る、少し冷たいけれど清々しい空氣。

とても爽やかな朝だった。

「……や、爽やかすぎる」

窓辺にあるベッドに転がつたまま眩いたのは、ひとりのまだ若い女性。

小柄で、肩までの黒髪が寝癖でやや乱れている。目を奪われる程の美女ではないが、やや幼く見える顔立ちはとても可愛らしい。しばらく目を閉じて何度も寝返りをしていたが、やがて覚悟を決めたかのようにえいっ、とかけ声をかけて起き上がる。

木造の小さな家だつた。窓が大きく、光が存分に差し込む明るい室内。ひとつしかない部屋に、ベッドと机と棚が置いてある。質素だが部屋の中はとても綺麗に整頓してあつた。

窓を開けて早朝の新鮮な空気を取り入れると、冷たい風が室内に入つてくる。太陽が明るく照らしていても、その風はもう秋の気配を帯びていた。窓の外に見えるのは、綺麗に色付いた深い森。太陽の位置からすると、そんなに寝坊をした訳でもなさそうだ。

「さて、と。今日は誰のお手伝いをすればいいのかな」

寝癖のついた髪を丁寧に櫛で梳いてきつちりと纏め、着替えをする。浅黄色のスカートに全身を隠すゆつたりとした淡い色のローブ。フードをすっぽりと被ると、顔どころか性別さえわからなくなるだろ。かなり怪しい姿だと思うが、この家を貸してくれた恩人の言葉だから従わなければならないだろう。

「これを着ないと外に出たら駄目って言われてるんだもの。仕方な

いよね

この世界では、黒は不吉な色だから。

そう言われたことを思い出し、ふと身支度をしていた手を止めて、窓硝子に映った自分の姿を見つめる。

黒髪に、茶っぽい色の瞳。生まれた場所ではこれが当たり前だった。ほとんどの人がそうだった。けれどこの村では黒髪の者はひとりもない。

(ここには、何処なんだろう。私、どうしてここに来たんだろう……)

それは今まで何度も繰り返してきた疑問だった。

彼女の名前は中島里香子。

春に就職したばかりの、普通に暮らしていた新社会人だった。何度も繰り返してきた朝のように、あの日も都心から少し離れたアパートで目を覚まし、大急ぎで駅までの道を走っていた。

「ち、遅刻しちゃう。今度遅刻したらもう駄目かもお」

息が苦しい。朝食も取らずに全力疾走をするのはつらかったが、五分後に発車してしまった電車に乗らなければ、もう間に合わない。今度遅刻したら何を言われるかと、必死だった。そのせいで前方不注意だったのかもしれない。けれどなんの警告もなく道の真ん中に穴が開いていたなどと、他の誰も予想していないに違いない。

(まさかマンホールの蓋が開いていたなんて。しかも朝の、あんな時間に……)

通勤ラッシュの時間帯で、周囲にも多くの人が居た筈だった。それなのに、自分が落ちてしまった。悲鳴を上げ、暗いトンネルにも似た狭い穴の中を落ちていく。不思議な浮遊感。命の危険が迫った時、一瞬の出来事もまるでスローモーションのように感じる場合があるという。今がまさにその状況なのかもしれない。

(私、死ぬのかな？ 通勤途中で、マンホールに落ちて死ぬつてなんて間抜けな。今までの人生がまるで走馬燈のようになってしまった、走馬燈つてどんなのだつけ？)

うーん、と頭をひねって考えてみるが、わからない。

(帰つたらインターネットで調べてみるかな。つて、私死ぬんだつけ。疑問を残したまま死ぬってなんかもやもやするね。もしかして、地縛霊になっちゃつたりして)

夜な夜な、マンホールの蓋から顔を出して、走馬燈つて何だっけ、などと聞く幽霊にはなりたくない。

だが、いくら思案していくも決定的な時間は訪れなかつた。

「……いくらなんでも長すぎない？」

まさか都会のど真ん中に、こんな深い穴がある筈がない。けれどもう空は見えず、どのくらい落ちていたのかもわからない。

いつのまにか、気を失つていたらしい。気が付けば見知らぬ森の中で倒れていた。そこを助けてくれたのが、この小屋も貸してくれた恩人の老夫婦だった。

(まさかこんな見知らぬ世界に来ちゃうなんてね……)

けれど戸惑つたのは最初だけだつた。見知らぬ世界だというのに、何故かとても懐かしい感じがしている。それにここは、とても綺麗な世界だつた。緑豊かな美しい光景。勤勉で優しい人たち。

住まわせて貰つている家は恩人達がいる村からは少し離れていて、森の入り口に一軒だけある小さな山小屋だつた。

最初の日は照明のない夜のあまりの暗さに、その静けさに恐怖を覚えた。毛布を被つたまま朝まで眠れない日もあつた。けれど今はすっかりと慣れてしまい、鳥の囀りで目が覚める生活つて素晴らしい、とすら思つてゐる。

「でもまさかこの年になつて、不思議な国に迷い込んでしまうとはね……」

どうせなら、まだ夢を見ていられる若い頃に来てみたかった、と溜息を付く。

大人になつてしまつた今、たぶん無断欠勤になつてしまつた会社や、明日振込みをする筈だつた家賃が少し心配だ。

「でも帰れる方法も今のところ見つかつてないし。しばらくはここ

で頑張るしかないもんね」

長所は前向きな所。そして短所は、深く考えない所だった。

きつちりと身支度を終え、森の近くにある小屋から近くにある農村へと向かう。

毎日誰かの手伝いをして、食べ物や生活に必要な物を分けて貰っていた。貨幣のない生活にも随分早く慣れたものだ。

村に入ると、まず恩人の老夫婦の家へ行く。まず最初の仕事は水汲みだつた。川までは少し距離がある。ふたりとも高齢なので、かなり重労働だらう。

近くの綺麗な川へ向かい、木の桶に水を入れて、こぼさないように気を付けながら何回か往復する。川は底が見えるくらい透明で、朝陽に反射してきらきらと煌めいていた。水辺独特の冷たい澄んだ空氣。小さな川魚が水音に驚いて素早く岩の影に隠れていく。

里香子は陽気な気分になつて、小さく唄を歌いながら往復し、家中にある水瓶をいっぱいにした。

「うん。これでいいね。後は何すればいいのかな?」

すると、パンを焼く良い香りが漂ってきた。きっと老婦人が朝食の支度をしているのだろう。

(この世界のパンって少し固いけど、小麦の香りが良くてとつても美味しいのよね)

柔らかいパンに慣れていた最初の頃は固くて食べられない、と思つたが、今となつては元の世界のパンは物足りないと思うかもしれない。

「おはようございます。他に何か手伝うことがありますか?」

挨拶をして台所に入る。里香子よりも更に背の低い、小柄な老婦が振り向いた。

「おはよう。庭に行つてリコーンを探つてくれないかい?」

元々は猟師だつたという老夫は厳しい顔をしていて、年を感じさせない強靭な体つきをしていたが、彼女はとても優しく温厚な人柄だつた。素性の知れない自分にも、とても優しくしてくれる。

「わかりました。すぐに探つてきますね」
リローンと聞いてにっこりと笑いながら、里香子はすぐに外に出る。

（やつたあ。リローンのスープだ。あれってすっごく美味しいのよね）

リローンとは、元の世界のとうもろこしに似た植物だ。向こうでは夏に収穫するが、こっちの世界のリローンは秋に実る。味もとうもろこしによく似ていて、スープを作るとまるでローンスープだつた。老婦の作るそのスープは、素材の甘さがとてもよく出でていて、本当に美味しかった。

一人暮らしだつたが料理は好きで、休日には色々な料理を作つたりしていた。この世界でも見たことのない食材を見るたびに、その調理法などを聞いて勉強をしている。

焼きたてのパンに、美味しいスープ。美しい自然に綺麗な空気。
そして善良で優しい村の人たち。

（ずっと、この世界にいるのもいいかな）

ふと、そんな考えがよぎる。

この世界に来てから、何度夜を過ごしただろう。けれど帰る方法は検討もつかなかつた。どうやってここに来たのかもわからない。それにもしかしたら、向こうの世界ではもうマンホールに落ちて死んでいるのかもしれないのだ。

ここならば引っ越し資金も土地の購入代もかからない。両親はすでに亡く、兄弟もいない。気になる程の親しい友も、恋人もいない。そう思つと、結構寂しい人生だつたのかもしれない。

背よりも高いリローンの畑を歩きながら、溜息をつく。二十年間の人生。ただ義務のように淡々と、周囲の人たちと足並みを揃えて暮らしてきた今までの人生よりも、こうして好きな料理を学びなが

ら、自然豊かな森で暮らす方が幸せなのかもしれない。

「あ、これ美味しそう」

溜息を付きながらも、見事に実を付けた房を選び出して、採ろうとしたその時。

「……ん？」

村の中心で何やら悲鳴のような声が聞こえた。何だろう、と背伸びをしてそちらの方向を見る。それはこんなに平和でのどかな村には似つかわしくない声。いつたい何があつたのだろう。

「どうかしたのかな？」

様子を探るかのように、耳を澄ませてみる。そうするともう一度。今度ははつきりとした悲鳴が聞こえた。

「大変！」

何か事故でもあつたのかもしれない。里香子は、思わず採りたてのリコーンをその場に置いて走り出した。

この世界の草は、秋になると金色に染まる。

それは秋になると木の葉が紅に染まるように、この世界では自然なことだった。

金色に染まり、太陽の光に反射してキラキラと煌めく草原の中を、里香子は走っていく。リコーンの畠は森の近くにあつたから、村の中心までは少し遠い。息を切らしながら駆けつけた。そして、慌てて村の中央に駆け込んだ里香子が、目にしたのは。

村に乱入している複数の男達。目的は、食糧なのだろう。収穫されたばかりの、外に並べられていた野菜を、押し入った男達が無造作に袋に詰め込んでいる。彼等はすべて黒髪で、それぞれ腕や手の甲、頬などの場所に不思議な紋様の入れ墨をしていた。

(黒髪だわ・・・・・)

思わず足を止めたのは、この世界では今まで一度も見かけることのなかつた馴染み深い色を見たからだ。瞳の色は様々で、茶色や青、緑などもいる。だがこの村に住む人たちが皆、背が高く色も白いの

に比べて肌も黄色っぽく、身体つきもそんなにがっちらりとしてない。

けれど親近感を覚えたのは、ほんのわずかな時間だけだった。どう好意的に見ても、野菜を回収しに来た業者には見えない。

「泥棒！」

どれもみな、この村の人たちが一生懸命に育てた貴重な食糧だ。とつさにその場にあつた外用の簾を手に、大声で叫んだ。

「人の物を盗むなんて、最低なんだから！」

相手は複数の男たち。にも関わらず強気で叫んだのは、声を聞きつけて村人が集まつてくるだらうと予想したからだ。けれどそれに反し、響き渡るのは里香子の声のみ。

「……」

村には、決して少なくない人数の村人がいる。それに皆、里香子よりもずっと早起きなのだ。

それなのに。

（な、なんで誰も出てこないの……）

泥棒と叫んでも誰も出てこないということは、相応の理由があるのかもしれない。例えば、相手にしたくないほど、残忍な盜賊たちだつたとしたら。複数の男たちの前に、ひとりで飛び出した自分の軽率さを後悔するが、もう遅い。

「勇ましいな」

まだ若い男の声が、背後から響く。振り向く暇もなく腕を取られ、簾が地面にからんと転がった。村の外を警戒していたらしいその男は、里香子の腕を引いたまま仲間の元へと歩き出した。

「警備団が来ると厄介だ。急げ」

男たちは無言でその言葉に頷き、手の動きを早めていく。この状況から察するに、一番若く見える彼がリーダーなのだろうか。

「は、離してよ」

何とかその手から逃れようと、彼の進行方向に逆らつて力を入れるが、一見細身に見える彼は、里香子の力ではよろめくこともない。

それでも必死に抵抗を続けていたが。

「あっ」

暴れた拍子にフードが外れ、纏めていた黒髪が解けて流れた。見られてはいけない。そう言われ続けていた里香子は慌ててフードを被り直そうとするが、腕を掴んでいた彼がそれを押し止める。

「お前、その髪。本物か？」

驚愕に彩られた声。先程までの雑な扱いとは違い、そっと髪に触れた腕に戸惑いを感じ、思わず顔を上げる。

そして里香子が目にしたのは、まるで紫水晶のように透明で美しい瞳だった。その瞳に魅入られ、里香子は抵抗することも忘れてしまう。

(……綺麗)

宝石のような煌めきに気を取られて、その時はどうして彼がそんなにも驚いているのか、と疑問に思つこともなかつた。

「その黒髪に肌の色。この国の女じゃないな。フォスターの血を引いているのか？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる。

フォスターって？ と聞き返すと、彼はほんの少し、その宝石のような瞳を細めた。

「その髪と肌をしていながら、フォスターを知らない？ この村で生まれ育つたのか？」

「……私は」

何と答えたらいのだろう。里香子は首を傾げる。さすがに初対面の男、しかも盗賊の頭らしき男にすべてを正直に話すのは躊躇わされた。

「話したくなればそれでいい」

その里香子の戸惑いを彼はどう解釋したのだろうか。掴んでいた里香子の腕を、解放した。

「何処で生まれたのだとしても、その髪を持つ以上、お前は同胞だ。危害を加えたりはしない」

同胞。そう告げた彼の声の優しい響きと穏やかな視線に驚いた。

「だがこの国の人間にとつて、黒髪を持つ者は忌むべき者。どういつた経路でこの村に住んでいるのかはわからないが、このままだとお前も、匿つている者も危険だ」

彼は手を差し伸べた。その時になつて初めて、里香子は瞳以外の彼の姿を見る。

里香子よりも頭ひとつ分くらい、高い背。肩まで伸びた黒髪。その漆黒の髪が無造作にかかつて、右の肩には、不思議な紋様が刻

まれている。細身で着てている物も質素だが、腰に下げている剣は見事な細工をしていた。そしてそれが飾りではないことは、彼の精悍な雰囲気を見ればわかる。

「俺たちと一緒に来い。共に生きる同胞は、俺が必ず守る」力強い言葉だった。

きつとその手を取れば、言葉通りに彼は必ず守ってくれるのだろう。

「でも」

里香子は荒らされた村に視線を走らせる。

「あなたたちは盗賊じゃないの？ 私、犯罪者にはなれないわ」

「……生きる為だ」

犯罪者という言葉に彼が怒り出すかもしれないと言つてしまつた後に里香子は後悔して身を固くした。

けれども返つてきたのは、深い悲しみに満ちた声だった。

「フォスターとは、今はもう存在しない国の名前だ。戦争に敗れて国を亡くし、住む場所も失った。迫害され、作物も実らない土地に追いやられ、フォスターだというだけで仕事にも就けない。山にはまだ幼い子どもたちがいる。俺は、どんな手段を使ってもあの子たちを守らなければならないんだ」

見れば、男たちはみんな瘦せていてあまり健康的には見えなかつた。

「ごめん、なさい」

祈るように両手を組み合わせ、里香子は俯く。

生きる為。

その重い言葉に、それしか告げることが出来なかつた。

犯罪が良いことだとは思えない。

だが彼のその言葉には、何をしてでも子どもたちを守るといつ深い覚悟が見て取れたから、もうそれ以上何も言えなくて。

それに何処から来たかもわからない自分を受け入れてくれた、この村に迷惑は掛けられない。

里香子はそつと差し出されている彼の手を握った。

「行くぞ」

彼は里香子の手を握り締めたまま、周囲の男たちに声を掛ける。彼らはその指示で一斉に走り出した。里香子も手を引かれたままそれ繼續く。

（おじいちゃん、おばあちゃん。リコーン届けられなくてごめんなさい）

少しずつ遠ざかる村。森に近い離れの家。きっともう一度戻ることはないだろう。

あの一人に助けられなければ、どうやって生きていけばいいかわからなかつた。もしかしたら不吉な黒髪だということで誰にも助け貰えず、もう野垂れ死にしていたかもしれない。命の恩人と、こんなに簡単に別れてしまつて良いのだろうか、と思つ。

けれど、自分の存在のせいで迷惑をかけてしまう可能性があるのだと聞かされてしまえば、もう居座ることは出来なかつた。

離れてしまう。感謝を告げることも出来ずに。でも、忘れない。この見知らぬ異世界に飛ばされても何とか生きてこれたのは、この村の人人が自分を受け入れてくれたお陰なのだから。

荷物を持つた男たちは、離れた場所に待機していた幌馬車に次々と乗り込んでいく。手を取られたまま、里香子もそれに乗り込んだ。馬車の中はかなり広いが、それでも多くの男たちと荷物が乗り込んだせいで、隣同士密着してしまつほど狭い。

（……うう）

しかも馬車が動き出すと、周囲の男たちの視線がいっせいに集まってきた。その気まずさに、里香子は俯く。

「お前、名前は？」

すぐ隣にいるのは、里香子を連れて來た紫色の瞳をした男。馬車の揺れる度に触れ合う腕をしながら、尋ねられるまま名前を口にした。

「里香子、か。珍しい名前だな。いくつだ？」

「二十歳よ」

そう答えると、周囲にざわめきが広がった。里香子は溜息をつく。年齢を告げて驚かれるのは初めてではない。

染めていない真っ直ぐな黒髪。瘦せていて、女性らしいボリュームにやや欠ける。大きな瞳は黒田がちで、高校生に間違えられることも多かった。

（な、何よ。どうせ子どもっぽい外見だけどさ……）

確かにコンビニでお酒買おうとして、身分証の提示を求められたこともあった。年齢を確認した店員の申し訳なさそうな態度は、かえつて居心地を悪くする。

「二十歳、だと？」

だがその言葉に田を見開き、そう呟いた彼の驚きは普通ではない気がした。

「わ、私が二十歳だと何か問題があるの？」

おそるおそる、そう尋ねて見る。だが返答はない。思案している彼の表情からは僅かに苦悶すら感じられる。良くない事を聞いてしまった。そんな罪悪感が胸に芽生え、里香子は返事を諦めて口を閉ざした。

「おい、シュカ」

だがその気まずい沈黙を打ち壊すよつた、大きな声が馬車の中に響く。

「不安にさせてどうするんだ。それじゃなくても無理矢理拉致してきたようなものなんだ」

紫の瞳をしている青年の隣に座っていた大柄な男が、里香子を見て安心させるように笑顔を向けた。

「ちょっと特異な環境でね。成人している女性は、もうひとりもないと思っていてから驚いただけだ。君は何も悪くない。俺たちの家に着いたら、ちゃんと全部説明するよ。俺たちの状況も、そして何故、連れてこられたのかも。だから心配しなくていい」

短く刈った黒髪に、日焼けした浅黒い肌。背は、彼がシュカと呼んだ紫の瞳の青年と同じくらいだが、身体の厚みはその倍もあるだろつ。逞しい身体をしているが、その茶色の瞳に宿る光と口調はとても優しかった。

「はい。ありがとうございます」

その優しさに安堵して、ようやく笑みを浮かべることが出来た。

不安が少しだけ解消する。

「俺はルーパリー。里香子って呼んでもいいか?」

「もちろん」

気さくな彼の態度に好感を覚えながらも、視線はまだ険しい顔をして黙り込んでいるシュカへと向かってしまう。何がそんなに彼を悩ませているのだろう。

「きやつ」

考え方をしてしまつたせいか。馬車ががくんと揺れ、バランスを崩す。

「危ない。ここからはちょっと道が悪くなるから、気をつけで

肩を支えてくれたのはルーパリーだった。

「うん……」

揺れて危ないから、と肩に置かれたままの手がとても気になつた。男性とこんなに近くで触れ合つたことなど一度もなかつたから。けれど彼に他意はない。揺れると危ないからと、親切から言つてくれているのだから。それに揺ればだんだん酷くなつてきている。

「ところで」

肩を抱いたまま、ルーパリーは話し掛けってきた。

「里香子は料理とか裁縫とか、得意か？」

「うん。一人暮らしは長かつたからね。料理ならちよつと自信があるよ」

そう答えると、周りの男達から歓声が上がつた。

今まで無関心だった彼らの反応に少し驚きながらも、少し疎外感が和らいだ気がして安堵する。

「そいつは随分と助かる。女は子供ばかりでな。大所帯だから大変だらうけど、頼むよ」

それからどのくらい走つていただろう。馬車はゆっくりと速度を落とし、やがて止まつた。

「ここからは歩いて行く。少し険しい山道だから、気をつけて」ルーパリーはそう言うと、辺りに散乱した荷物を集めている。見ると、周囲の男たちも担げるだけの荷物を背負つていた。里香子も、傍にあつた袋をひとつ手に取つた。

男たちは次々に荷台から降りていく。時計がないので正確な時間はわからないが、村を出てから一時間程経つだらうか。ルーパリーに手を取られて馬車の外に出る。少し冷たい空気が里香子の黒い髪を靡かせた。

馬車が止まつたのは、深い森の中だつた。生い茂つた木々は太陽の光を遮り、まるで夕方のように薄暗い。

（こ、ここを登つていいくの……？）

田の前にあるのは、山道とこづよつはほとんび崖のような斜面。里香子の身体ほどもある瓶が「じるじる」と転がっている。それに山頂まで届こうかという距離だ。

呆然と上を見上げていると、背後から声を掛けられた。

「大丈夫か？ 荷物は俺が持つよ」

ひとりの男が、里香子が持っていた荷物を引き受けてくれる。

「あ、ありがとう」

「俺の後ろから来るといいよ」

また別の男が、歩きやすい道を教えてくれる。

「抱いていいってやろうつか？」 里香子は軽そうだ

「いや、手を貸そう。掴まれよ」

「え、ええ。あ、ありがとう……」

たくさんの中たちが親切してくれた。今までこんなに異性に親切にされたこと経験はまったくはない。嬉しさよりも戸惑いを感じて、里香子は助けを求めるようにルーパリーを見上げた。

「お前たち、ちゃんと自分の荷物を持って。働かないヤツは追い出すぞ！」 里香子は、俺と行こう

彼の一喝で、男たちは散つていった。彼はこの中でもリーダー格らしい。

「すまないな、里香子。女は子どもばかりって言つただろう？
若い女が珍しいんだよ」

「はあ……」

それが本当ならば、若い女は何処へ消えたのだろう。女がいなければ子供もない。それに男ばかりがあんなに大勢いる筈がない。けれどそれを聞くのは躊躇われた。ほんの少しの会話で、もう彼らの生活が列して幸福なものではないと知ってしまったから。彼らの話を聞いても、どうしようもない悲しみに、胸を搔きむしられるだけだろう。

それにどんな事情があったとしても、もうあの村には戻れない。彼らと生きるしかないと、里香子はシユカの手を取ったときからも

う覚悟を決めていた。

(せめて、喜んで貰えるように美味しいご飯を作りつつ……)

1・5 若き君主の苦悩

三年前に即位したばかりの若き王、カインサー・ロード・セリドリーは、目の前の貴族の報告に、眉をひそめた。短い金色の髪。肌の色は白いが、軟弱な感じはしない。若さを感じさせない威厳を身に纏っているからだ。顔形も整っていて、まるで血の通っていない彫刻のような冷たい印象を受ける。蒼い瞳は、目の前に跪く男に向かっていた。

謁見の間である。

二十人くらいは入れるだろう大きさの、広い部屋だった。床は白く美しく磨き上げられ、真ん中には豪華な刺繡が施された緋色の絨毯が敷いてある。

部屋の四隅に建てられた柱には、見事な彫刻。

窓がないのはきっと警護の関係だろう。そして入り口には、五人の衛兵が微動だにせず立っている。最奥には重々しい緋色のカーテンが下がり、その前には金で作られた豪奢な椅子。

カインサーは、その玉座に座っていた。

「……見つけられなかつたといふのか。我が国最高の魔導師が、間違いなく召還に成功したと言つてゐるのに、それらしき者はいなかつたと帰つてきたのか」

口調を荒くして叱咤するが、その貴族はただ形式的に頭を下げるだけだ。

(……どうせろくに探さなかつたに違いない)

カインサーはそう思つたが、顔色も変えずに彼を下がらせた。

彼は決して愚王ではない。むしろ国内を良くしようと考へ、色々と改革を進めていた。だがそれが変化を嫌う古くからの貴族たちには受け入れられず、反感を買つていた。王といえど、思うがままには動けない。それがこの国の今の状況だつた。

「イドを呼べ」

彼が完全に姿を消した後に、衛兵にそう命じる。

ほどなく、高価なローブを纏った魔導師が王の前に進み出て、頭を垂れた。彼もまた若い。背を覆う銀髪はひとつに束ねられている。顔や背格好は王によく似ていたが、緑色の瞳は彼ほど鋭い光を放つてはいない。少し体調が良くないのか、肩で息をしていた。

カインサーは、手を振つて人払いをする。誰もいなくなると銀髪の魔導師はすっと立ち上がった。

「イド。調子はどうだ？　まだ魔力が戻っていないのではないのか？」

先程の貴族には欠片も見せなかつた、柔らかい声で気遣う。

「少し大きい魔法を使つたからね。でも、大丈夫だ。すぐに回復する」

イドと呼ばれた魔導師は、親しげに笑みを浮かべるが、その顔色は白い。

「……すまない。お前がそうまでして召還してくれたのに、見つけられなかつた」

「いや、俺の力不足だ。転移の魔法さえ成功していればこんなことには……」

孤高の王が、自らの王国の中で心を許せるのはただひとり。血の繋がりがあり、この国の中でも最強とも言える力を持つ魔導師、イドだけだ。彼がいれば、他に味方など必要なかつた。何よりも力が欲しかつた。

自らの利益ばかりを守り、改革を拒絶する貴族たち。

まだ若い王と侮り、国境付近で不審な行動を繰り返す隣国。彼らを黙らせることの出来る力が、欲しかつた。

そんな時に亡き父である前王の隠された日記を見つけたのは、果たして偶然だつたのだろうか。そこに記されていた、顔も知らぬ母の遺言。そこには、願つてやまなかつた力、すべてを従える力を得る方法が書かれていたのだ。

ひとりの女性を得たからといって、そんな力が本当に手に入るの

だろうか。そんな疑問は、他国が呪術師を使ってまでそれを妨害したという記述を見つけた途端に霧散した。それに亡き母は優れた魔導師であり、予言的中率もかなり高かつたと父は書き遺している。相談したのは、もちろんイドひとりにだつた。だが彼はすぐに、彼の父が遺したという魔法書を持つてきた。彼はすっと父の遺したその魔法を研究していたのだ。それには、異世界からその運命の女性を探し出す方法が記されていたのである。

これは本当に偶然なのだろうか。

亡き父が、母が、導いてくれたのではないだろうか。
すぐにカインサーは、イドと一人だけでその計画を実行に移した。そしてその女性を見つけ出し、召還にも無事成功したのである。だがイドは優れた魔力を持つているが、生来頑健ではない。

命を削る程の大きな魔法に、身体の方が耐えられなかつたらしい。その女性をカインサーの元に転移させる前に力尽きてしまつたのだ。成功しなかつたとはいえ、もう異世界から探し出すのではなく、この国にいる筈の彼女を探し出すだけ。それはそう難しくないと思つていた。だが。

二人の計画を何処かで聞きつけた貴族の協力という名目の妨害に遭い、未だにその女性を探し出すことが出来ないので。さすがにこれ以上日数が経過してしまつと、探し出すのは困難になつてしまふかもしぬれない。相手は動かぬ物ではなく、生きている人間なのだから。

「ドリカを呼んで、探索させよう。貴族たちでは信用出来ない。お前はしばらく休んで体調を元に戻してくれ。無理をさせてすまなかつた」

ドリカは近衛騎士のひとりであり、カインサーが信頼している男だ。王命は絶対、という生真面目な男である。きっと彼ならば徹底的に調べ上げるだろう。

「わかった。ならば少し、休ませて貰う。……カインサー」「何だ？」

何故父は、この魔法を実行しなかったのだろう。

あの魔法を実行したその時から、この疑問が頭から離れない。

父の魔力ならば自分よりも確実に成功させたに違いないのだ。それをしなかつたのには、何か理由があつたのではないか。この召還を実行すると決めた時から感じる、意味のない不安。それを打ち明けるべきかどうか。

「いや。……何でもない」

イドは結局何も言えずに退出した。形にもなつてい無い想いをどうやって伝えたらいいのだろう。それに、もう魔法は実行された。見つからないだけで、運命の女性は今確実にこの国に存在しているのだ。今更何を言おうというのか。

王の間を出て、長い王宮の廊下を歩く。

磨き上げられた床はまるで鏡のように、その影を映していた。廊下には大きな窓がある。その窓枠は美しい装飾が施されていて、大切な芸術品を飾っている額縁のようだ。ほんの少し開いていた窓からふわりと風が吹き、イドの銀の髪を揺らした。

1・6 アクシテント

結構体力には自信があるつもりだった。

学生の頃は陸上部だったし、今までだつて毎日駅までの道のり一キロを早足で歩いている。

けれど彼らの言う山道といつもののは、想像以上に困難な道のりだった。

整備された道がないのは想像していたが、獸道のようなものすらない。切り立った斜面。ほとんど崖とも思える道を岩に手を掛けて体を持ち上げて登つていくしかない。

それでも、もうここまで来たらついて行くしかない。里香子は息を切らしながらも必死に登つっていた。

「……大丈夫か？」

そんな様子を見て、ルーパリーが手を貸してくれる。

「うん。大丈夫。ちょっと手とか足とか腰とか痛いけど……」

茶色の瞳が心配そうに見ている。周囲の男達も、手を止めて声を掛けてくれた。

「ほんとに大丈夫よ。ありがとう」

そんな彼らに、里香子は礼を言ってにこりと微笑んだ。本当に彼らはこまめに気遣い、声をかけてくれる。

「……」

感謝を示しながら、背後を振り返った。

最初に里香子を連れてきた張本人であるシユカは、最後尾にいた。背後を気にしながら登つっている彼は、手に抜き身の剣を持つている。

剥き出しの刃が陽の光にきらりと反射して、その冷たい光に背筋がぞくりとするのを感じた。あれは、脅しや見せかけだけの武器ではない。彼の手に、その身に馴染んでいる雰囲気。幾度となく、その剣を振るってきたのだろう。

彼の瞳もまた、今は冷徹な光を浮かべている。冷たい紫色の瞳。
温かさを感じさせない鉱石のように。

危険な男だ。わかっている。

それなのにどうして、こんなに彼が気になるのだろう。

「里香子、気をつけろ。足元が」

不意に声を掛けられて、はっと正面を見る。気が緩んでしまった。手が滑ったのだ。踏み止まりと慌てて足に力を入れる。が、その足元が崩れた。

「きやああつ」

落ちる。

この世界に来てしまった時のような、ふわりとした浮遊感。斜面はもう半分くらいまで登つてきていた。岩だらけの斜面を転がり落ちるのは、どれくらい痛いだろう。打ち所が悪ければ、怪我ではすまないかもしねり。

（こっちでも落ちて死ぬなんて、嫌だあ……）

痛みを覚悟して、瞳を固く閉じる。けれどその瞬間はなかなか訪れない。痛みの代わりに温かい腕が、しっかりと里香子の背を支えてくれた。

「あ、あれ？」

誰かが落ちる里香子を抱き止めてくれた。だが、あの急な斜面を転がり落ちようとしていた里香子の勢いはかなりのものだったのだろう。支えきれない。

（や、やっぱり落ちる！）

助けてくれようとした人まで巻き込んで、里香子は転がり落ちていった。

「チツ」

すぐ耳元で、舌打ちの声。

けれどそれだけで、里香子には自分を抱きかかえてくれている人が誰なのかわかつてしまつた。

（……助けてくれたの？）

疑問はすぐに悲鳴に飲み込まれていく。

こんな大きな岩だらけの斜面を転がり落ちれば、ただではすまない。

里香子を抱えたシユカは体を捻つて方向転換をした。

咄嗟の判断だったのだろう。

二人は岩に叩き付けられるのだけは逃れたが、代わりに泥だらけの斜面を滑り落ちていった。

崖崩れの跡なのだろう。あちこちに倒木が倒れ、岩地のような大きさではないが、転がっている石も見える。濡れている土は滑りやすく、踏み止まろうとしてもどんどん滑り落ちていく。恩人の老婦人から借りた、ふわりとした浅黄色のスカートがたちまち泥に塗れる。倒木に捕まるうと手を伸ばすが、里香子の力では落ちるスピードに負けてしまい、手に擦り傷を負うばかりだ。どうしよう、と考える間もなくどんどんと景色が遠のいていく。

「……あ」

ふいに、落下が止まった。

里香子を片手に抱えていたシユカが、上手く倒木に捕まつたようだ。

彼は自分と里香子の体重を片手で支え、体勢を整える。里香子を左腕に抱えたまま、倒木と岩の間に身を潜めた。

「大丈夫か？」

庇つてくれていたのだから当然、里香子はしっかりとシユカの腕に抱かれている。

「う、うん。ごめんなさい。私のせいです……」

その状態に、突然恥ずかしさを感じてしまう。事故とはいえ、男の人にはこんなにもしつかりと抱かれた事は今まで一度もなかつた。けれどこんな不安定な体勢では、身じろぎするのも危険だ。見ると、ここはまだ斜面の中腹。運良く倒木と岩の間に身を置いているだけなのだ。こんなにぬかるんだ泥では、上に登るのも困難だろう。

「助けてくれて、ありがとう……」

「助けるって言つたか、お前が俺に向かつて落ちてきたんだ
な、なんてこと。

里香子は今度こそ恥ずかしさに俯く。彼は巻き添えになつたのだ。

「ここから登れるか?」

恥ずかしくてどうしようもなくとも、今は彼から離れる事は出来
ない。里香子は斜面を見上げる。

「ごめんなさい。無理かもしけな……」

泥だらけの斜面。手は擦り傷だらけだし、靴もなくなつていた。
登つてもまた落ちるだけだろう。

シユカは、上を見上げ、下を見て、それから最後に里香子を見た。
その視線。表情は、やはり冷たい。余計な荷物を背負い込んでしま
つたと思っているのだろうか。ここに打ち捨てられても仕方ないの
かもしぬないと、里香子は覚悟をした。迷惑をかけてしまつている
のだから。

「少し遠回りになるが、登るより降りた方がよさやつだ。歩けるか
?」

けれど里香子の決意とは裏腹に、シユカは捨てていく氣はなさそ
うだ。

1・7 フォスターの少女

その言葉に安堵して、頷く。優しさや気遣いもない声だったが、何故か安堵感が心に広がる。

そしてそろそろと右足を踏み出し、地面につけた。だが体重をかけようとした瞬間、足首に激痛が走る。

「いたつ……」

捻挫したのだろう。痛みにバランスを崩し、また転がりそうになる。間一髪、シユカが支えてくれた。

「無理なら無理と言え。そんなに転がるのが好きなのか」「特別好きって訳じや……。まあ、あの浮遊感はちょっと癖になりそうだけど」

元の世界に戻れたらバンジージャンプをしてみようか。ふとそんな考えが浮かぶ。けれど、帰り道なんてあるのだろうか。まだそんなに日数は経っていない。それなのにもう、あの世界はこんなにも遠い。まるで忘れかけた夢のようだ。

「お前……。変なヤツだな」

里香子の返答に、彼は呆れたように笑った。ほんの少しだけ、彼の冷たい印象が薄れる。もしかしたらそんなに年が離れていないのかもしれない。

いくつなのだろう。里香子は、気付かれないようこそっと彼を見上げた。冷たく無機質な、だからこそ宝石のような透き通った瞳。けれどこの人が、自分を連れてきたのだ。必ず守る。そう言って。そう、守ると言つてくれたのだ。ここに捨てていくなど、彼は思つてもいらないに違いない。あの真摯な瞳は、彼の言葉が決して嘘や「ごまかしななどではないと語つていたではないか。

ふと、空を見上げた。なんだか暗くなってきたようだ。ぼつり、と天から水が滴る。

「あ、雨が……」

さつきまで、目が痛くなる程の青い空だった。けれど、山の天気は変わりやすいというのは本当のようだ。急に温度も低くなった。里香子は、寒さを感じて自分の肩を両腕で抱く。背中に触れている、彼の体温がとても温かかった。

その温もりに縋るように頬を寄せた。寒い。それに、頭がぼうっとして急に目の前が暗くなつたような気がする。雨の音だけが、消えることなく響いていた。

(寒い。寒いけど、熱い……)

突然、訳のわからない異世界へと連れてこられて。慣れない環境で、ひとりで必死に頑張っていた。それに加えて、今日は色々な事がありすぎて。里香子はすっかり疲れ切っていたのだ。

「おい、大丈夫か？」

「里香子？」

彼の声が聞こえてくる。

(だめ。また迷惑をかけちゃう……)

そう思つても、途切れていく意識を繋ぎ止める事は出来なかつた。

「…あれ？」
「…あれ？」

どのくらい経つたのだろう。

里香子には、瞳を閉じたのはほんの数瞬にしか思えなかつた。けれど、目を開けたらすっかり周囲は暗くなつていた。

(ここ、何処?)

ふわりと体を包む暖かい空気。見上げると、木造りの天井がある。建物の中らしい。

「あ、目が覚めたのね」

軽やかな声。振り返ると、ひとりの少女の満面の笑みが目に入つた。

(黒い髪……)

長い黒髪をひとつに編み上げ、シンプルな白い服を着たその少女

は、里香子に近寄ってきた。少し体を起こし、周囲を見回す。里香子が住んでいたあのログハウスのように、何もない部屋。その窓際に置かれた固い木のベッドの上に寝かされていたらしい。両手の擦り傷と足首にも治療が施されている。

「あの、ここは？」

寝かされていたベッドの前に、看病用の椅子が置いてある。黒髪の少女はにこにこと人懐っこい笑みを浮かべながら、そこに座つた。「ここはフォスターの隠れ村よ。だから大丈夫。もう心配ないからね」

里香子を安心させようとしたのだろう。大丈夫、ともう一度繰り返し、少女は微笑む。とても可愛らしい少女だ。瘦せていて小柄だが、里香子とそう年が違わないように見える。

（年は高校生くらいかな？ 若い子、いるじゃないの）

もつと小さい子どもばかりだと思っていた。

「私、どうやってここに来たの？」

斜面の下で意識を失った筈だった、と思い出す。

「お兄ちゃんが連れて來たの。怪我をしてて、熱もあつたから心配だつたけど、下がつたみたいで安心したわ。……ここ、あんまり薬がないから」

お兄ちゃん。それが言葉通りだとすれば、この少女はシユカの妹だ。よく見ると、彼のように透き通つた色ではないが、少女も紫っぽい色の瞳をしている。

「あ、自己紹介もしてなかつたね。私はミリィー。フォスター族のリーダー、シユカの妹よ。よろしくね」

ミリィーと名乗つた少女は、親しげに笑みを浮かべた。

「こちらこそ。私は里香子。手当してくれたのよね。ありがとう」「ううん。あの岩場から落ちたんでしよう？ 大変だつたね。ルーパリーが真つ青な顔をして駆け込んできたから驚いたわ」

ルーパリー。確かあの茶色の瞳をした大男だ。山道でも何かと気遣つてくれていた。後でお礼を言った方がいいだろう。

「……若い女の子がいなって聞いたんだけど、ちゃんといるのはね」

「……多分年下だと思うが、気の合いそうな可愛らしい子がいた事に安堵した。けれど、ミリィーは寂しそうに笑う。

「……他には誰もいないのよ。同世代の子はみんな、殺されてしまった。私ひとりだけなの」

「……」

殺された。なんとなく想像はしていたものの、そうはっきり聞くとやはり衝撃的だった。

「だから、あなたが来てくれてとっても嬉しい。ここに住むんでしょ?」

憂い顔になつた里香子を慰めるかのように、明るい声だった。

「ええ。もし、いいなら」

「もちろんよ!」

ミリィーは嬉しさのあまり立ち上がつた。これほど歓迎されると思つてもみなかつた里香子も、つられて笑みを浮かべる。

「ここがあなたの部屋になるわ。あとでルーパリーに、扉に鍵をつけて貰うといいかかもしれない。私は大丈夫だけど、ここはほとんど男ばかりだから。もちろん、乱暴な人はいないよ。でもその方が安心でしょう?」

それから何色が好きかとか、服のサイズ、そして好きな花など、ミリィーは無邪気に尋ねてくる。こんな風に年の近い女の子と色々と話したのは本当に久しぶりだつた。思いがけず、楽しいひととき。部屋がすっかり暗くなり、ランプに火を点した後に、ミリィーは名残惜しそうに立ち上がつた。

「……そろそろ夕飯の支度をしなきゃ。『めんなさい』。あんまり楽しくて、つい長居しちやつた」

「私も手伝うよ」

そう申し出たが、怪我をしているから休んでいてと言われ、それに甘える事にした。確かに立つのはまだ少し無理かもしれない。

「今日は里香子さんが来てくれた日だから、頑張って作るね」

そう言つて笑顔で部屋を出て行つたミリィーだつたが。

数十分後。里香子は料理が得意だと言つた時の、彼らの歓声の意味を知るのだった。

姿はあんなに可愛らしく、手料理が得意そうに見えたミリィーだつたが、出てきた料理は豪快そのものだった。

魚の丸焼き。焼き魚ではない。丸焼きだ。茹でた野菜と肉。本当に茹でただけ。しかもかなりの大きさ。スープは少し塩辛い。パンは、固くて頸の運動に適しているだろう。

だが、それでも男たちは文句も言わず、黙々と食べている。里香子は、ここに来る前に迎えに来てくれたルーパリーに頼んで、建物の中を一周して貰つた。

深い森の中だった。

道もないような場所に、大きな木の間に隠れるようにして一階建ての建物がある。建物はそんなに小さくはない。けれど三十人程いるフォスターが全員住んでいるから、それなりの大きさはある。里香子は学生の頃、林間学校で行つた自然の家を思い出した。古い木造の建物で、隙間風が入り、床はぎしそうと鳴つていた。そんな感じの建物だ。

食事は一階の広めの部屋で、全員で食べるようだ。けれど、これだけの男達に対して少し量が少ないように感じる。

(……こんな場所だもんね)

自分達で充分に食糧を調達出来るのなら、きっと盗んだりはしないだろう。その少ない食事を、自分にも分けて貰える事に感謝しなければ、と石のように固いパンを手に取つた所で、ふと気が付く。彼がいない。

意識を手放した自分を、ここまで連れてきたのも彼だろう。女ひとりの体重とはいえ、あの悪路だ。容易ではなかつただろう。(お礼を言わなきや。あと、お詫びも)

そう思い、田の前にてにこにこと茹でた野菜を食べているミリィーに尋ねる。

「ミリィーさん。お兄さんは？」

「……お兄ちゃんは見廻りをしてると思う」

その時のミリィーの瞳が少し翳つていたのに、里香子は気付かなかつた。それなら仕方がない、と頷いた。

それから、里香子が動けるようになるまでは五日くらいかかった。

あの村で過ごしていた頃は、毎日早朝に起きて畠仕事をして、夜遅くまで村の人たちの手伝いをしていた。それなのにここに来てからは、毎日寝てばかり。歩くと治りが遅くなる、と言つて、食事に行くにもルーパリーが抱きかかえてくれる。寝ていては暇だらう、とミリィーも針仕事を持ってきて話し相手になつてくれるし、男たちも暇を見つけては訪ねて来てくれた。だからこの部屋は、お見舞いで貰つた花だらけ。花といつても、店で売っているような豪華で美しい花ではない。道端に生えているような、小さな花だ。

（でも、嬉しいな……）

小さな可愛い花は、素朴で愛らしい。部屋中に咲き乱れている花を見ると、心が安らいだ。

しかも部屋の窓の下には、小さな花畠がある。貰つた花が枯れてしまつと嘆いていた里香子の為に、ルーパリーが植えてくれたのだ。白い可憐な花。

（こんなに私、大事にされていいのかな？）

両親が生きていた時でさえ、こんなにも大切に守られていたことはなかつた。みんなとても優しくて、部屋に鍵などいらなかつたと思つくらいだ。

けれどひとりだけ、一度も里香子を訪れない者がいた。

シユカだ。

最初はここにいないのかと思った。食事の時も会わない。だが夕方頃になると、外を歩く彼を見かける時がある。自分は彼に歓迎されていないのだろうか、とも考えたが、ここに連れて來たのは彼なのだ。

（別に会いに来て欲しい訳じゃないけど。ただ、これだけみんな来てくれてるのにないと気になる、って言うか……）

歓迎していない訳ではないのだろう。けれど、気に掛けてくれるのでもない。彼にとって自分は、どうでもいい存在なのだろうか。そう思うととても悲しくなる。たくさんの綺麗な花を見ても、癒されない心の影のようだ。

自分の心を偽つても仕方がない。

里香子は溜息をつく。彼に会いたいのだ。そして気に掛けて欲しいのだ。

大切してくれた彼らの中の誰でもなく、シユカに。

どうしてこんな感情が沸き起つたのだろう。恋ならばきっと、華やかで胸が躍るようなもの。心に刺さった棘のような。こんな苦しい感情が恋である筈がない。そう何度も胸の内で繰り返した。それに自分は彼のことをまだ何も知らない。子供が自分に歎心のない者の氣を引こうとしているような、そんな感情に過ぎないのかも知れない、と。

今日も針仕事を持つて部屋を訪れてきたミリィーは、色々な話をしてくれた。

この山での暮らし。そしてフォスターのこと。

彼女の口から語られたのは、悲しい歴史だった。

「戦争があつたのは随分昔のことみたい。負けてこの国に取り込まれてからも、私たちはそれなりに伝統を守つて暮らしていた。でも、今から五年くらい前からかな。この辺の領主が変わったのは。新しい領主は魔法が使える人みたいでね。急に私たちへの弾圧が強くなってきて。魔法も使えない蛮族。そう呼ばれて、差別されているみたい」

この世界には、魔法という力があるらしい。

それは物語の中でそうだつたように、超能力のような強い力。「私たちには、魔法の力を持つている人はいらない。それだけじゃなく、魔法に抵抗力もない。だから大昔の戦争でも、勝てる筈がなかつたのよ」

まるでおどぎ話のように、美しい世界だと思つていた。

けれどこの世界にも、苦しみや悲しみ、痛みは当たり前のように存在していて。同胞は必ず守ると、そう強く言つていたシユカの決意に満ちた顔を思い出す。もうこれ以上、仲間を失いたくないとう、彼の思いがそこに込められていたのだ。

「私たちも五年前までは、こんな山の中じゃなくて里の方に住んでいたのよ。でも、あの日。男たちが獵に出ている間に、女性たちは畠仕事をしていた。そこに、あの男が。領主となつた男がやつてきて。……魔法で、みんなを」

針仕事をしていたミリィーの手が止まる。

「ごめんなさい」

里香子は思わず彼女の背を抱いていた。

「ついに話をさせちゃったね……」

「ううん」

けれど淡い紫っぽい瞳に涙を溜めたまま、ミリィーは首を振る。
「私たちがどうしてこんな山奥で暮らしているか、知つていて欲しいから。私はその日、小さい子どもの面倒を見る為に家に残つていだから、私と小さい女の子たちは無事だったの。けど子どもの母親と、まだ未婚の若い女性。母親の手伝いをしていた男の子どもたちは全員、殺されたわ」

帰つてきてその惨事に憤り、抗議の為か、それとも復讐の為だつたのだろうか。領主の元へ向かつた壮年の男たちもそのまま帰らなかつた。残されたのは、青年たちとミリィー、そして幼い子どもたちだけ。

「私たちは深い山の中に隠れて住むことにしたの。ここはね、ちょっとした探知魔法除けが設置されているから安全なのよ。冬は厳しいし、食糧の確保も難しいけれど。それでも、人がいる所よりは安心だわ」

盗賊行為をしているのは、生きる為だと言つていた。

黒髪をしている自分も、そして匿つている者も危険かもしぬない」と。

彼が言つていたのはすべて、悲しいほど真実だったのだ。
もう何も言えずに、里香子は俯いた。

そして、数日後。

ようやく足の痛みがなくなつて起きられるようになると、里香子は自分で歩き、下の料理部屋へと向かつた。

親切してくれたみんなの為に、美味しい料理を作りつ。そう思つて。

「パンはサンドイッチみたいにしようかな。あとはリコーンのステークと、鶏肉もあつたかな?」

食糧は限られている。なるべく材料がかからないように。それで

もボリュームもある料理を。

(節約生活とか、ああいう番組大好きだったのよね)
大人数の食事を作るのは初めてだったが、とてもやりがいがありそう。

狭い調理場は物が散乱していて、片付けるだけで結構時間がかかるてしまった。それらを綺麗に磨き、使いやすいように分類して並べる。手間はかかったが、綺麗好きの里香子にとつては結構楽しい作業だった。鼻歌を歌いながら小麦粉を練つていると、こんこん、と扉が控えめに叩かれた。

(ん？ 誰だろう？)

手が離せなかつたから、はーい、と返事だけした。

「 里香子。大丈夫か？ 何か手伝う事ががあれば…… 」

そう言つて、狭い調理室に窮屈そうに姿を見せたのは、ルーパリーだつた。

「 ……綺麗になつたなあ 」

周囲を見渡し、感嘆の声をあげる。里香子は、得意そうに笑つて見せた。

彼とはこの数日ですっかり打ち解けていた。親切で話しやすい彼は、とても頼りがいがある。けれどあまりにも真っ直ぐに示される好意には、少し戸惑いもあつた。それにその好意は、自分が里香子だからではなく、数少ない異性だからなのだろう。どうしてもそう考へてしまふ。

「 ジゃあ悪いけど井戸から水を汲んできてくれる？」

「 ああ、もちろんだ 」

彼は快く引き受けると、桶を持って外へと出て行つた。

けれどその後ろ姿を見送りながら、里香子が考えたのはシユカの事だつた。

結局、ここに着いてから一度も彼と言葉を交わしていない。会つてもいないかもしね。毎日、二階から外を歩く彼を見送るだけだつた。

「お姉ちゃん」

背後から可愛らしい声がした。子供達だ。みんなまだ七歳から十
一歳で、すべて女の子だった。

「お手伝い、するの」

「私にも何か教えて」

「お姉ちゃん、私がお皿洗うね」

自然に顔が綻ぶ。みんな素直で可愛らしいが、ここにいる子供達
はすべて母親がいない。ミリィーはある若さで、母親役を頑張つて
続けてきたのだろう。でももう、最年長の女性は自分なのだ。しつ
かりとこの子達を守らなければならない。

「みんなありがとう。無理しなくていいから、少しずつ頑張りうるね
朝食もとても好評だった。美味しい、と何度も繰り返してそう言
つてくれた。

（でもやっぱり、量が足りないのよね……）

育ち盛りの子供たち、働き盛りの男たちだ。もっとお腹いっぱい、
食べさせてあげたい。それに冬になれば、食糧事情はもっと厳しく
なるだろ？ 今のうちに対策をしておかなければならない。

突然訪れた、事情をまったく知らない自分を優しく受け入れてくれ
た。だから今度は、自分が恩返しをしたい。

「里香子さん、本当に料理が上手なのね。私にも教えて欲しいな」
小さい子どもに自分の分のパンを分け与えていたミリィーは、リ
ーンのスープを飲んで感嘆した様子だった。きっと彼女は誰にも
料理を教わることが出来なかつたに違いない。裁縫をしているのを見
る限り、器用そうだしきつとすぐに上達するだろう。

「私にも色々と教えて欲しいな。この国のこととか、フォスターの
伝統を」

厳しい状況の中、必死に助け合つて生きている人たち。この世界
で、この場所で生きよつ。里香子はもつ決意していた。

「うん。もちろん」

ミリィーは嬉しそうに微笑んだ。

ショカは、何処かに出かけていたらしい。

みんなの食事が終わり、ミリィーとふたりで後片付けをしていた
時にようやく帰つてきた。顔を合わせるのは、あの時以来だ。

「お、おかえりなさい」

思い切つて声をかけると、彼は振り向いた。久しぶりに見つめた、
透き通るような紫色の瞳。

「あの、まだお礼を言つていなかつたから。ここまで連れてきてく
れで、ありがとう。あと、迷惑かけちゃつてごめんなさい」

「もう大丈夫なのか?」

彼は手についていた荷物を、狭い調理台の上に置いた。しかしひとつ
荷物が転がり落ちる。林檎のよつな果物だった。

「あ、リッカの実だ」

それを見たミリィーが嬉しそうに駆け寄る。

「リッカの実?」

「うん、そう。甘酸っぱくて美味しいの。子どもたちも大好きなん
だ。でも、山の険しい所でしか採れないの」

まるで宝物を手にするかのように、大事そうにその実を拾い集めた。

「みんなで分けるんだぞ」

シユカはそう言って、そのまま部屋を出ようとしている。まだ返事をしていない。それに、作った料理も食べて貰っていないのに。

「待つて」

思わず、彼の服の裾を掴んでいた。シユカは振り向く。

「どうした？」

他の優しい男達とは違い、近寄りがたい雰囲気の冷たそうな男だ。里香子を無視するような事はしないが、特別関心があるようには見えない。

それなのに、どうしても彼が気になる。もつと話がしたい。

「今日は私がご飯を、作ったの。あの、食事まだよね？」

「ん……」

彼は何故か、ちらりと妹の方を見た。どうしたのだろう。里香子もミリィーに視線を移す。すると。

「大丈夫。里香子さんが、少ない材料ですごい料理を作ってくれたの。みんなお腹いっぱい食べたよ。私もちゃんと食べた。だから、お兄ちゃんも食べて」

その言葉に、里香子は悟った。

他の人たちに比べて、ミリィーはとても小食だと思っていた。いつも食事の時にシユカの姿がなかった。そして二人とも、他の人達に比べると細身だと思っていた。すべてに、理由があったのだ。彼ら兄妹は、自分たちの分の食事も仲間に分け与えていたのだろう。不意に、涙が溢れた。

なんて優しい、人達なのだろう。

虐げられ、罪を犯し、そして憎しみを背負いながらも、慈しむ心を捨てていない。

人を憎むのは、きっととても辛い。里香子には、そこまで人を憎んだ記憶はなかつたけれど。怒りは、憎しみは人をとても消費させ

る。それでもその憎しみを捨てきれなかつた時、人は愛を捨てる。優しい心を捨てる。そうすればもう心は消費しないからだ。罪を犯すのは、そうしないと生きていけないからだ。そして大切な家族や仲間を殺されて、人を憎まずに生きていける程、人間は清らかではない。

けれど、彼等は愛を捨ててはいない。手を取り合い、支え合つて生きている。

涙を拭つて、里香子は微笑んだ。

「私、料理は本当に得意なのよ。それには、節約にも結構自信あるんだ。だから、頑張るよ。任せでね」

彼は少し驚いた様子だった。ミリィーがその耳元に何か囁く。それは、里香子にも聞こえた。本当に、上手なの。すごく美味しいのよ。彼女はそう言つていた。

「そうか」

その時シユカは、笑みを浮かべた。それは苦笑でも、失笑でもなく。初めて見た、柔らかな優しい笑みだった。

（ああ……）

今度こそはつきりと、里香子は自覚する。

（私は彼が、好きなんだ……）

出逢つてからまだ数日。それに、決して穩便な出逢いではなかつた。けれど世の中には、一目で恋に落ちる人もいるくらいなのだ。きつと困難な恋になる。こうして想いを自覚してみても、これからどうなるかまったくわからないくらいだ。周囲にはあんなに優しくしてくれる男性がいるのに、どうして彼なのだろう。そう思つてみても、もう自覚してしまつた気持ちは、確かに自分のものなのに、もう自分の自由にはならない。まるで魔法にかけられてしまったかのように、急速に育つていってしまう。

どうしたらいいかは、まだわからなかつた。けれど、ひとつだけ

確かなのは。

（私は、ここで生きていく。フォスターとして。あの子供達を育てて、その人達の世話をして。そして……）

この決意をいつか、彼に伝えることが出来るだらうか。

彼の為に食事を用意して、そしてミリィーと一緒に子供たちの所へ行き、リックの実を切り分けて食べた。林檎のような歯触りと甘酸っぱさ。お菓子が作れるかもしれない。子供達はきっと、甘い物も欲しいに違いない。

(明日、ミリィーと一緒に作ってみよう)

きっと試行錯誤の日々になる。けれど恐れはなかつた。好きな人と一緒に暮らすことが出来るのだから。

「……」

シユカはひとり、調理室に残つていた。里香子とミリィーは、ふたり揃つて子供たちの所へ行つてしまつた。目の前には、里香子が用意してくれた食事が置いてある。

柔らかなパン。そして、温かいスープ。鶏肉を香草で焼いたもの。これほどきちんとした食事は、どのくらい久しぶりだろう。確かに妹のミリィーは料理が得意ではなかつた。けれど、仕方ない。他の誰が作つてもきっと同じなのだ。母親に習えなかつたのだから。

けれど里香子の料理はとても美味しくて、そして優しい味だつた。きっと愛情のこもつた手作りの食事を食べて育つってきたのだろう。

見た目はまったくフォスター族と変わりのない女性。彼女は何処で生まれ、どうやって育ち、そうしてこの土地に流れ着いたのだろう。保護する者がひとり増えただけ。そう思つていたシユカだったが、里香子に対する興味が沸いてきた。

(あの涙……)

何故彼女は泣いたのだろう。最初は自分達に同情したのだろうか、と思つた。

だがきっとそうではない。あの涙は、そんな安っぽいものではなかつた。もつと透明で、とても綺麗なものだった。

暖かい陽差しが窓から入り込んでくる。

窓から見える山の風景は、少しづつその色を変えようとしていた。金色に染まつていいく世界。向こうの世界ならば、もう紅葉の時期だらう。今はまだ、朝晩少し冷えるだけだ。でも冬は確実に近付いている。食糧の備蓄を、急がなければならぬだらう。（こ）の辺りで雪、かなり降りそつたよねえ。寒さ対策もちゃんとしないと……）

調理室の隣にある食堂で、里香子はミリィーと六人の少女たちと一緒にリッカの実の皮を剥いていた。

「半分はジャムにしましよう。パンにつけて食べるととても美味しいのよ」

器用な手つきでぐるぐると皮を剥く彼女の隣で、悪戦苦闘している少女たち。里香子は少女たちが手を切らないように気をつけながら、どんどん作業を進めていく。

「ジャム？」

「うん。甘くてとても美味しいの。きっと大好きになるわ」
そして今日の授業は、ジャム作りだけではない。皮を剥きながら、ミリィーにフォスター族のことを色々と聞いていた。

「（こ）の入れ墨はみんなにあるけど、場所はそれぞれ違うの」

ミリィーの入れ墨は、右腕の甲にあつた。薦のような紋様で、とても美しい。少女達にもそれぞれ足首にだつたり、頬にある者もある。

「場所は誰が決めるの？」

「フォスターの巫女が産まれた子供を見て決めるの。魂の宿る場所よ。そして同じ場所に魂が宿る者同士で結婚する。それがフォスター族の伝統」

「同じ場所に……」

もし好きになつた人が違う場所に入れ墨があつた時は、どんなに思つてもその恋は成就しないのだろうか。自由に恋愛することが出

来た国で生まれた里香子としては、それはとてもつらじょうづな気がする。

「ちなみにみんなもう、結婚する人は決まっているのよ。女の子は、私を含めて七人だから、身内同士で争いにならなにようにちやんと決めたの」

けれどそう告げるミリィーは、つらそうでも寂しそうでもなかつた。ただの事實を告げるような、何でもない口調。

（こんなに小さい子が、もう結婚相手が決まっているの？）

少女たちを見つめる。

一族の未来を担う者として、大切に大切にされている彼女たち。結婚するのはまだまだ先とはいえ、もう将来が決まっていることに不満はないのだろうか。

だが、彼女達は嬉しそうに自分の相手の名前を、里香子に教えてくれた。

「二十歳にならないと結婚は出来ないし、それまで気持ちが変われば解消も出来る。決定権は女の子にあるからね。私もあと二年あるから、今の人とそのまま結婚するかはわからないわ」

ミリィーはそんな事まで言った。

（な、なるほど……。決定権が女の子にあるなら、選び放題だしねえ）

しかし七歳の子が二十歳になる頃には、男たちはいくつになつているのだろう。

呑気にそんな事を考えていた里香子は、少女たちから告げられた名前にシユカの名がなかつた事に気付く。彼はフォスター族のリーダーだ。本当に、彼にはいないのだろうか。

「里香子さんは、いくつ？」

不器用な手つきでリック力の実の皮を剥きながら、ミリィーは尋ねる。彼女は本当に話し好きだ。人懐こくて、明るくて、とても可愛らしい。

「二十歳よ」

「じゃあ結婚出来る年だね。里香子さんは入れ墨がないから誰とも結婚出来るかもしれないね。うーん、争奪戦が起きそうよねえ」

「お姉ちゃん、入れ墨ないの？」

「私にはないの。私はここから遠く離れた場所で生まれたからひとりひとり、少女たちに視線を移しながら里香子は答えた。確かにシユカと同じ右肩に入れ墨のある少女はないようだ。

「でもお姉ちゃんもフォスターなんだよね？　だって同じだもん」

「そうだね、と里香子は笑つた。

元の世界への執着がほとんどないことに、自分自身でも驚いている。けれど祖父母も父母もすでに亡く、兄妹もいない。学生時代の友人とも年を追うごとに疎遠になつていった。付き合っている彼氏もいない。ここで生きていぐ。そう決心することにも躊躇いはなかつた。

（そりゃあ……。あの人には、運命の相手がないんだ……）

素直にそれを喜ぶことが出来た。今はまだ伝えるべきではないけれど、少しでも過酷なこの山の暮らしの手助けをすることが出来たら。

（まず大切なのは食糧よね）

里香子は熱心にジャム作りの講習を続けた。

その日の午後から、男たちは七人を残してすべて外出していった。食糧の調達に行くのだろう。残っていたのは、昨夜少女たちに相手だと教えて貰つた男たちだつた。相手の決まつている者は危険なことをしないのが、彼等の捷らしい。子孫を絶やさないようにする為なのだろう。

いたたまれない気持ちで、里香子はそれを見送る。けれどここで過ごした数日間で、彼らも何も思っていない訳ではないとわかつてきた。それに人が立ち入らない程の山奥では、作物もろくに育たない。フォスターを雇う者はおらず、例えお金を持つていたとしても売つてくれる店などないといつ。

(生きる為……)

この国の王は、この現実を知っているのだろうか。里香子が暮らしていた村では、町は治安が悪いと嘆いている者も多かつた。こんな状況では良くなる筈がない。

建物の外では、ミリィーと二人の少女が大量の洗濯物を干していた。風に乗つて、笑い声がここまで聞こえてくる。それを聞いた里香子は、夕飯の支度をしながら優しく微笑む。

(国の事情なんて、私には関係ないしね)

大切なのは、ここに住んでいる仲間たち。

国の事情など関係がなかつた。ただ、みんながいつまでも一緒に平穀に暮らせれば、それでいい。

「ああ、一度向こうに帰れたらなあ……」

そうすれば、缶詰やレトルト商品、カップラーメンなどを大量に持つてくるのに。

ふと、考える。

自分はどうしてここに来たのだろう。何か理由があるのだろうか。

里香子は自分の右肩を見る。ここに、あの入れ墨があればいいのに。そうすれば、彼に会つ為にこの世界に来たのだと、言えるのに。

「……なーんて、ね」

何言つているんだね？ 恥ずかしい。里香子は勢いよく包丁を振り下ろす。

恋はどんな女をも乙女にしてしまうのだろうか。だとしたら恐ろしい。

(二) こんな私が運命とか、やだな。恥ずかしいっ……)

赤くなつた頬で、野菜を切り刻む。

でも、そつだつたらいいのに、と思う。

彼に会う為にこの世界に来たんだと、そう言えればいいのに。トマトスープに、刻んだ野菜を入れて煮込む。固形コンソメだけでもあれば、料理はもっと楽になるに違いない。けれど、シユカはこのスープが好きだつた。自然、作る回数が多くなつてしまつ。

「はやく帰つてこないかな……」

だがその夜が更けても、男たちは帰つてこなかつたのである。

セリードリー・国王カインサーの命を受けた近衛騎士ドリカは、部下を何名も使って指定された場所を中心に、徹底的に探索をしていた。真面目な男だった。

体格が優れている訳でもなく、剣が格別に得意だという訳でもない。

一応貴族の出身だが、一番数の多い下流貴族。両親も既に他界している。短く刈つた茶色の髪に、薄い緑色の瞳。外見も平凡な彼だったが、その真面目さが王に買われ、側近として傍近くに仕えていた。

今回の王命も、かなり困難な人搜しだ。わかるのは、女性だとうことだけ。名前も年齢も、外見の特徴も何ひとつわからないのだ。

だが、王命は絶対だ。

まるで水の中に落とした宝石を探すかのように、ひとつひとつ、村を廻つていった。だが今日もまた、何の収穫もないだろう。そう思つていた矢先だった。

フォスター族の盗賊と、遭遇したのは。

この辺りで盗賊が出るとの噂は耳にしていた。全員黒髪のフォスター族らしいとも。荷物や食糧を奪うだけとはいえ、この辺の農村の暮らしも厳しい。確かにこの国では彼らは随分と生きにくいかもしれない。先代の王は民族によつて差別することを禁止したが、それは根強く染みついていて、容易には解決しない問題だろう。しかもそれを取り締まるべき貴族たちは、自分たちだけが特別だと思つている差別意識の塊のような存在だ。カインサーもこの状況を見ないふりをしている訳ではないが、そこまでまだ手が回らないというのが実情だった。

彼らの暮らしには同情するが、だか遭遇した場合は別だ。目の前で起こつた犯罪を見逃すことは出来ない。

「全員戦闘態勢を取り。盗賊たちを逃がすな」

鮮やかな緋色のマントを翻して、ドリカが部下に命じる。こちらは十人にも満たず、それに対し相手側は二十人以上はいるだろう。だが、所詮盗賊だ。訓練された騎士団には適つまい。そう考えた。

だが。

盗賊達は騎士の姿を見ると、まるで軍隊であるかのような機敏な動きをした。

退路を確保する者。奪つた荷物を運ぶ者。そして、騎士達に挑んでくる者。

まるでこの時を想像して、役割を決めていたかのようだった。いや、実際そのだろう。ただひとりも捕縛出来ず、荷物ひとつ取り返せないまま、彼らは驚くべき素早さで去つていった。

盗賊に遭遇したのにひとりも捕縛出来なかつたでは、王宮に帰れない。王に合わせる顔がない。

ドリカは、戸惑つ部下達に直ちに追撃を命じた。

「シュカ」

最後尾を走っていたルーパリーが、目の前にいる彼に鋭い声で告げる。

「奴ら、追つてくるぜ」

「……王国の騎士にしてはなかなか根性あるな」

シュカは立ち止まり、続いてルーパリーも立ち止まつた。

「お前たちはいつものように、山の反対側から登れ。あの場所に帰るのは夜明け頃だ。夜は動くな。わかってるな？」

ルーパリーの言葉に、男たちは声を出さずに頷いて答える。

「よし、行け」

その言葉が合図だつた。男たちはそれぞれ荷物を担いだまま、まつたく異なる方向にばらばらに走り出した。誰ひとり、山へと向かっている者はいない。

「魔導師はいたか？」

腰に下げていた長剣をすらりと抜き、シュカはルーパリーを隣の見上げる。その彼が手にしているのは、背中に担いでいた身の丈程もある大剣だ。

「いなかつた。俺ひとりでも平氣だぞ」

相手は十人。しかも騎士だ。だが二人は顔を見合わせる。いかに騎士といえど、平和に慣れきつた彼らに負ける気などしない。

追つていた盗賊たちが分散し、戸惑っていた騎士たちは、突然反転してきた一人に急襲されて次々に倒されてしまう。

力でなぎ倒すルーパリー。そして素早さで相手を翻弄するシュカ。

「くつ……。何をしている！」

ドリカが叱咤の声を上げても、もう遅かつた。目の前の従者が大剣によつてなぎ倒され、紫の瞳の男の鋭い剣が間近に迫つてきていた。だがドリカは素早く剣を抜き去ると、シュカの剣を弾き返す。

「ちつ。さすがにあれは強いな」

「緋色のマント。正騎士だ。気をつけろ」

十対一だったのが、瞬く間に一対一になっている。たかが盜賊。ドリカはそう悔っていた気持ちを完全に捨て去る。彼等は、強い。シユカを弾き返し、すぐに大剣の襲撃に備えたが、大男はドリカに攻撃するよりも仲間の傍に駆け寄っていた。

「どうする？ シュカ」

「まともに相手する必要ないな。もう時間は充分に稼いだだろ？」

「……了解」

一人で頷き合つと、先程の男たちのように別々の方向へと走り出した。

「……っ」

打ち込んでくると思い身構えていたドリカは、すぐに反応することができなかつた。

今からでも追うべきか、否か。躊躇いは一瞬。遅れを取つてしまつた以上、地の利がある彼らに追いつけるとは思えず、倒れ伏した仲間たちを放つておくことも出来ない。それに盗賊を追うよりも大切な王命があるのだ、と思い出す。一刻もはやく異世界から来たという女性を見つけなければならぬのだ。

ドリカは剣を納め、倒れた従者を抱き起こした。彼は完全に氣を失つていた。

(……どうするか)

取り敢えず、近くの村の手を借りよう。これから行くはずだった村の方向を見る。ドリカは近くを通りかかつた旅人に礼金を払つて言付けを頼み、倒れた者たちを介抱した。

程なくして、数人の村の者が駆け付けた。手を貸して貰い、倒れた騎士達をある老夫婦の所有する森近くの小さな小屋へと運び込む。部屋を開けると、ふわりと甘い匂いが立ちこめる。まるで、若い女性がいるかのようだつた。

(……誰か住んでいたのか？)

荒れた様子はまったくない。殺風景だが、小さな鉢植えに可愛らしい花が咲いていた。

案内してくれた老婦人は、寂しそうな瞳で部屋の中を見渡している。娘か、もしくは孫娘の部屋なのだろうか。

「どうぞこの部屋をお使い下さい。町には連絡しましたので、治癒を専門とした魔導師がすぐに来ると思います」

「……助かる。だが、良いのか？ 大切な部屋なのではないか？」

あまりにも寂しそうな様子に、思わず尋ねた。

「……娘のようについていた子がいたのですが、もういないのです。ですから、どうぞお使い下さい」

もういない。亡くなつたのかもしれない。ドリカはそれ以上聞けず、礼だけを述べて部屋の中へと入る。そして、この部屋にいたのはどんな女性だったのだろう、と考えた。まだ部屋の中には、優しげな雰囲気が残っていた。きっとあの老婦人によく似た、優しく美しい娘だったに違いない。

だがその娘が死んだのではなく、盗賊に拉致されたのだと聞かされたのは、その晩遅くになつてからだつた。

「たまに一晩くらい帰つてこない事があるよ。だからそんなに心配しなくとも大丈夫」

リッカの実を煮詰めながら、ミリィーはそう笑つた。

窓の外はもう闇に満たされている。夕食の時間になつても彼らは戻らなかつた。こんな山道では、もう戻つて来られないだろう。

「警備の者に見つかつたりすると、ここが知られないようにすぐに帰つてこないの。そう決まつてているから。もし何人が帰つてきているのに、戻つてきてい人がいるのなら、それは心配だけど、全員が帰つてきてないなら、明日の朝にはみんな揃つて帰つてくるわ」

「そつか……」

心配で何度も外の様子を伺っていた里香子は、ミコイーの説明によつやく椅子に座る。机には、下揃えがまだ終わっていない野菜が置いてある。

「それより明日の朝は大変かも。みんなお腹すいてるだろ? しね。いっぱい用意しておかないと」

「そうね。だつたらシチューにしてしゃこましょ。たくさん作れるし」

心細そつとしていた里香子が、よつやく笑う。

(……よかつた)

ミコイーは里香子に気付かれなこように、そつと安堵の溜息を漏らす。

里香子が落ち込んでいると、なんだか周りの雰囲気まで暗くなつてしまつ。

(不思議な人だな……)

彼女に好意を持つてゐる男はたくさんいる。相手のいない男たちは全員、彼女を好きだと言つても過言ではないだろ? でもそれは、単に彼女が誰とでも結婚することが出来る女だからという訳ではない。同性のミコイーでさえ、彼女が傍にいるとしても安らぐのだ。自分のすべてを許して貰えるよつた、不思議な安心感があつた。

野菜を下揃えしている彼女の傍に、小さな子供たちが集まり、手伝おうと手を伸ばす。それを里香子はどんなに忙しくても、邪険にしたりしない。

特に懐いているのはナリンだつた。子供たちの中でも最年長のナリンはとても難しい年頃で、ミリィーから見ればまだ子供なのに、大人のように振る舞おうとして言うことをあまり聞こうとしない。料理の腕はナリンの方が上だつたので尚更だつた。

けれど里香子には初対面からとても懐いている。

里香子が大人だからなのだろうか。けれど、自分とそう年も変わらない筈だ。二十歳だと言つていたが、小柄な体はそれよりも幼く見えるのに。

(誰と結婚するのかな……)

二十歳ならばもう結婚をする年頃だ。彼女と結婚したい男はたくさんいる。何人の男が彼女にプロポーズするだろう。そして、誰の申し出を受け入れるのだろう。

誰でもいい。はやく結婚して欲しい。そうすれば、何処で生まれたとしても彼女はもう一族の者だ。ずっとここに居てくれる。

(やっぱり、ルーパリーさん、かなあ?)

今の所は彼が一番親しいように感じる。

ルーパリーは兄シユカの親友で、力が強くて頭もいい。兄の代わりを務める事が出来る唯一の男だ。彼が里香子にプロポーズすれば、他の男たちは遠慮するかもしれない。それにいつまでもフリーの女性がいるのはあまりよくない。争いの元となってしまう。

(帰つたら聞いてみようかな。いつプロポーズするのかつて)

里香子が切つた野菜を下揃えしながら、ミリィーは近々あるどう結婚式に思いを馳せていた。

近年は悲しい事ばかりだつた。もう自分たちの未来には死と憎し

みしか、残されていないように感じていた。

けれど、里香子がやつてきてから、この隠れ村には、笑い声さえ聞こえるようになってきたのだ。

彼女がずっといてくれるならば、きっとこれからは良い事ばかりある。そんな気さえする。

（美味しいものも食べられるよつになつたし……）

綺麗に片付けられている調理室に、視線を巡らせる。

少ない材料で美味しい料理を作る里香子は、まるで魔導師のようだつた。結婚するまでには、彼女のよつな料理上手になりたい。

残された時間はあと、二年。

少し前までは、先の事を考えるのがとても嫌だつた。

どうなるかわからない不安だけが渦巻き、何も見えない暗闇を探りで歩くかのような心細さだけ。けれどミリィーは今、二年後をとても楽しみにしている事に気が付く。その頃には、里香子にはもう子供だつているかもしれない。結婚する自分に、先輩として色々と助言してくれるかもしねれない。

どうか、神様。

ミリィーは静かに祈る。

どうかこの幸せを、彼女を、私たちから取り上げないでください、と。

闇が、ゆっくりと遠のいていく。黒から白くと変わっていく空。夜が明けていく。一番好きな時間帯だつた。

澄み切つた少し肌寒い空氣も、すべての者が眠りについているのよつな、この静寂も。

シユカはひとり、夜が明けるのを見つめていた。どんな事があつても、こうして朝は来る。

「……シユカ」

白くなつていく空をぼんやりと見ていると、背後から声を掛けられる。振り向かなくとも、誰かはすぐにわかつた。この場所を知っているのは彼だけだ。

「ルーパリー。どうした？」

薄暗い山道は危険だ。出発は、もう少し辺りが明るくなつてからと決めていた。だから彼がこんなに早起きなのは珍しかった。

「……ちょっと、寝られなくてな」

「お前が？」

例え野外で大雨が降つてこよつと、平氣で寝ている彼の言葉にシユカは笑う。だが、続いた彼の言葉にその笑みはたちまち消え去つた。

「昨日、リンザとカイールがちょっと揉めてね。……考えていた」「……原因は？」

数少ないフォスター族。身内同士の諍いは、シユカとルーパリーが一番氣を遣い、防ごうとしていた事だ。

「里香子だ。いつかはこうなるかと思つて心配していたが……」

「……」

里香子に入れ墨がないとわかつてからは、シユカもルーパリーが言つようにトラブルになつてしまふかもしれないといつ予感はあつた。極端に女性が少ない所に、誰とでも結婚することが出来る妙齢の女性が飛び込んできたのだから。

「彼女には選ぶ自由がある。だから強制は出来ないって言つて來たが、俺はみんなの為にも彼女の為にも、はやく相手を決めた方がいいんじゃないかと思う。それに里香子は二十歳らしい。適齢期だ」

「……」

シユカはまだ、無言だ。

その様子はいつも彼ではないように見えた。ルーパリーは彼の傍に近寄り、その隣に座る。いつも彼ならば即座に決断する。フォスター族の為にはどうしたらいいか。それだけを考えて生きている

よつな男だ。

周囲は少しずつ明るくなっている。もうすぐ他の男たちも起きてくれるだろう。その前に、これだけは聞いておきたい。ルーパリーは空を見上げているシユカの横顔に問いかけた。

「里香子のこと、お前はどう思っている?」

「……」

長い沈黙だつた。答えはすぐに返つてこない。だが、何も思っていないのならばすぐに返事をしただろう。シユカの戸惑いも理解出来る。仲間は幼い頃から知つてゐる顔ばかりなのだ。そこに今まで会つたことのない成人した女性が、突然現れたのだから。

「ミリィーはもう懷いてるようだな。毎日、里香子の後を付いて回つてゐるみたいだ。自分より年上の女性の存在が嬉しくて、そして心強いんだろうな」

沈黙を破るように、ルーパリーは言葉を続ける。

彼もまた彼女の傍にいると、心が安らいだ。

近寄りがたいほどの美人ではなく、むしろ年齢に比べると幼いくらいだが、彼女の傍にいるとまるで子どものように安心してしまうのだ。あの包容力はどこから来ているのだろう。それは自分だけではなく、他の男たちも一緒にようだ。だが一人きりになると、彼女はどの男にも、いつも一步引いて接している。最初こそ里香子に夢中だったルーパリーだったが、周囲を見渡す冷静さを持つ彼にはそれがわかつていた。

そしてひとりだけ、彼女が気にしている男があるということも。

「まあ、選ぶのは彼女自身だ。俺たちには強制出来ない。でももし、里香子がこの先もずっと俺たちと一緒に暮らすのだと決めてくれたら。俺は、お前がいいと思う。お前なら誰からも反対意見が出ないだらうつてのが理由だ」

もし里香子が誰かひとりを選んだとしたら。

他の男たちはそれに納得するだらうか。諦めきれず、何とか自分を選んで欲しいと懇願する者が出るのではないか。相手が決まらずに争いの元になるのと同じくらい、相手が決まったときの混乱も心配だつた。

だが里香子が選んだのがシユカならば、きっと誰も何も言わない。自分もシユカならば仕方ない、とそう思うだろう。それだけ彼を信していいたし、その苦労も知っていた。

フォスター族を存続させる為に休む日もなく懸命になつているシユカには、支え手が必要だ。彼女ならば、シユカに安らぎを与える事が出来る。いや、きっと彼女にしか出来ないだろう。

返答は、なかつた。

その腕は、無意識に入れ墨のある右肩に触れている。

五年前、多くの者が経験した痛み。

魂の共有者を失う痛みを、彼は知らない。シユカには生まれた時から、半身となるべき存在がいなかつたのだ。

一般的に同じ場所に魂を宿す者は、複数存在する。その中から気の合つ者を女性が選ぶことになつていて。それなのに彼には、元からその相手が存在しなかつた。

稀にそういう者が、過去にも存在したらしい。

そして彼らはすべてフォスターのリーダーになつていた。皆を率いるリーダーには、時として危険も伴う。魂の共有者がいない者は率先して危険を引き受け、他の仲間を守つてきた。

今のは、今の彼のように。

「仲間を守らなければならない。それが俺の役目だ」

ようやく彼が口にしたのは、固い決意の言葉。きっと彼はフォスターの守護者として己の人生を捧げると、もつ遙か昔に決めていたのだろう。

考え方、生き方を変えるのは容易ではない。
けれど。

「シユカ。お前は考へたことはないのか？　もし同じ場所に魂を宿す者がいたら、どんな人生を送つていただろう、と
自分は何度もあつた。

ルーパリーも五年前、少し年上だった婚約者を亡くした。彼女が生きていたら、どんな人生だつただろうと、何度も繰り返し、考へ

た。彼女を失つた痛みはまだ癒えることなく残つてゐる。きっと他の誰かを愛したとしても、きっと消えることはないのだろう。

シユカはゆっくりと首を横に振る。

「ない。一度も考えたことがないんだ。俺の思い描く未来に、共有者の姿は一度も浮かんだことはない。だから俺は、これからもリーダーとして生きていくべきだと、そう思つていて」

毅然とした声。けれどルー・パリーは思う。本人も気付かないところできつと、シユカは迷つている。あの沈黙がそれを物語つている。今はもう少し、時間が必要なかも知れない。

「そうか。だかシユカ。もしこれから先に、一族よりも里香子の姿が先に思い浮かぶようなことがあれば、今日の俺の言葉を思い出してくれ」

焦る必要はないのかも知れない。まだ出逢つたばかりの二人なのだから。

辺りが明るくなる頃を見計らつて、男たちは山に向かつた。仲間が待つ場所へ。

最後尾を歩くシユカはずつと無言だった。何かを深く考え込んでいるかのように、時折その足が止まる。こんな彼を見るのは初めてだつた。まだ安全な場所には入つていない。ルー・パリーは先頭を別の男に任せ、後方へと移動をする。

「シユカ」

声を掛けると、紫水晶の瞳が真っ直ぐにルー・パリーを見つめた。

「俺が後ろを行く。お前が先に行け」

きつと里香子は待つている。

ミリィーたちにとつては何度もある夜だが、里香子にとつて仲間が夜になつても帰らないのは初めての経験だ。優しい彼女のことだ。きつと心配している。何度も窓の外を見て、帰つてくるのを心待ち

にしているだろ？。

それにきっと、里香子が誰よりも先に探すのはシユカの姿だろ？。
ならば彼が先頭に立つべきだ。

「お前が先頭だ、シユカ」

「……」

シユカはきつぱりと言い切るルーパリーの姿に、少し首を傾げる。
その秘めた決意を知らぬままに。だが特に疑問を口にすることはなく、
先に立つて歩き出した。気が削がれていたという自覚はあるの
だろう。だからこそ、ルーパリーが背後を任せせるのを不安に思つた
くらいにしか考えていないのかもしれない。

それでいい、と思う。そうでなければシユカは決して動かないだ
ら？。

（世話の焼ける奴だ……）

先頭に向かうその姿を見て、思わず笑みを浮かべる。

里香子もシユカも、どちらもルーパリーにとつて大切な存在だつ
た。だからきっと、自分はずつとその幸せを願うだろ？。

今朝はまた一段と寒さが厳しかった。

冷たい風が部屋の中を冷やさないように、里香子は窓の隙間に布をあてがう。この寒さの中で一晩過ごした彼らはきっと冷え切つているだろう。少しでも暖かい部屋で迎えてあげたかった。野菜ときのこで作ったシチューは、いつもよりかなり多めに作ってある。パンもたくさん用意しておいた。

もう一度調理室に戻り、料理を確認する。温め直すのはまだ早いだろう。

不安で落ち着かず、昨晩はほとんど眠れなかつた。どんなに心配はいらないと言われても、心が安まることはなかつた。むしろ不安は時間が過ぎ去る」とに積もつていく。唇がまた、同じ言葉を刻む。

「早く帰つてきて……」

祈るような願いは、辺りが明るくなつた頃によつやく叶えられた。窓から外を見つめていた里香子は、見えてきた人影に立ち上がる。「シユカさん……

先頭に立つっていたのは、誰よりも待ち望んでいた人。子どもたちはまだ眠つている。里香子は走り出したいのを堪え、ゆっくりと建物の外へと向かつた。

まだ静まりかえつた家が見えてきた時、シユカが考えていたのはあの早朝の出来事だつた。

何故、ルーパリーはあんなことを言い出したのだろう。そして、里香子。

外見は間違いなくフォスターなのに、仲間たちとは何処か違う雰囲気を纏つている女性。きっと今生きているフォスターとは誰とも繋がらない血筋だ。少なくとも知る限りでは、行方不明になつたフ

オスターは誰もない。

けれどあの日。

初めて彼女の手料理を食べた時に見た、あの涙。

例えどんな生まれだらうと彼女は仲間であり、守つていいくのだと決めた。

自分たちの境遇を思い、流してくれたあの涙にきっと偽りはない。そしていつかは仲間の誰かと結婚し、本当の仲間になる日も来るだろう。そう思っていた。

お前がいいと思う。

それなのにルーパリーの言葉が、あれから何度も心の中に蘇る。彼には、魂の共有者がもし存在したらと考えたことは一度もない、とそう答えた。嘘を言つたつもりはない。その時までは本当にやつだつたのだから。

けれどルーパリーのあの言葉が、心を騒がせた。

生涯、一族の守護者として生きると、そう決めていたのに。

「……おかえりなさい」

彼女が見えた。

きつと心配したのだろう。あまり疲れなかつたような顔をして、それでも微笑んでいる里香子の姿がそこにあつた。

初めて会つた時を思い出す。箒を手に、勇ましく挑んできたその姿を思い出して思わず笑みが浮かんだ。思えば最初から、ここにいるような大切に守られている少女たちとは違つていた。

黒髪の女性だつたとはいえその腕を取つたのは、そんな彼女に惹かれていたからなのだろうか。

勇敢に挑んできた、あの姿。

透明な涙。

鮮やかな手つきで料理をしていた後ろ姿。

纏わり付く子どもたちを邪険にしたりせず、慈愛に満ちた顔で料理や裁縫を教えていた姿も。

一族の守護者として、生きる。

その誓いは、今もこの胸にある。けれど。ほんの少しだけ触れるくらいは、許されるのではないか。

成人女性にしては小柄な里香子の、肩辺りにある黒髪に優しく触れる。

「……ただいま」

そしてそのままその傍を通り過ぎる。妹の姿が見えた。

「ミリィー。変わりはなかつたか?」

「……うん。こつちは大丈夫。みんな無事?」

「ああ」

背後からおかえりなさい、と里香子の声がした。それに答える複数の男たちの声。

それを聞きながら、シユカは荷物を持って建物の中に入る。振り返らなかつた。

(……お兄ちゃん?)

男たちが帰ってきた気配を感じて外に出てきたミリィーは、里香子のすぐ後ろにいた。

そこで見た兄の姿。

あんなに迷いのある顔は、初めて見た。あんなに優しい笑みも。そして、何処か寂しげな後ろ姿も。

「大丈夫だ」

優しく掛けられた声。振り返るとルーパリーが立つていた。

「俺がいる。だから大丈夫だ」

「……うん」

その言葉が何を指しているのか。この時はまだミリィーにはわからなかつた。けれど頷くことに躊躇いはなかつた。彼が大丈夫だと言うからには、きっと大丈夫なのだ。

「すごい、あれだけあつたのに全部なくなっちゃった」かなりの量を作つておいた筈のシチューは、すべて綺麗になくなつていた。作る方としては、これだけ喜んで食べて貰えると嬉しい。里香子は後片付けをしながらにこにこと微笑んだ。

これを作つていた時は、胸を締め付ける不安に苛まれた夜だつた。けれどもう不安は欠片もない。全員揃つて無事に帰つてきてくれたのだから。

「さて、後片付けをしなきゃね」

水道もないし、初冬の水は指が痛くなるくらい冷たいが、大量に積まれていた食器を洗うのも苦にならない。

「あ、お水がもうないみたい。汲んでこなきや」

水桶を手に外へ出た。

金色に染まつた草が、山頂から吹く風に揺られてさわさわと音を奏でる。黄金に染まつた世界は何度見ても壯觀だつた。もしこの世界の住人が紅に染まつた向こうの紅葉を見たら、その鮮やかな色にやはり感動を覚えるのだろうか。

「あ……」

景色に見とれていたせいで空っぽの桶が風に煽られ、思わず手を離してしまつた。風に乗つてころころと転がる桶を拾おうと、慌てて手を伸ばす。けれど急な坂道で急激に体勢を変えてしまつたせいで、今度はバランスを崩す。

「きやあっ」

どうしてこう落ちたり転がつたりするのだろう。

「危ない！」

衝撃に備えて身体を固くするが、転がりかけていた里香子を片手で支えてくれた人がいた。

「本当に転がるのが好きなのか？ 危ないからあんまりひとりで歩

くな

僅かに苦笑したような口調。でもそこには、案じるような響きが確かに宿っている。

どうしていつも、助けてくれるのは彼なのだろう。里香子を片腕に抱き寄せたまま、足元に転がる水桶を拾い上げているのは、シユカだつた。宝石のような瞳が、真っ直ぐに里香子を見つめる。

「あ、ありがとう」

俯くと、金色の野原の上に転がる赤い果実が目に入った。周囲に転がっていたのはリッカの実。子どもたちが好きなこの果実を、山に採りに行つていたのだろう。

「ああ、ごめんなさい」

慌ててその実を拾うと、シユカは水桶を持って歩き出す。

「それを頼む。子どもたちに食べさせてやつてくれ

「わ、私が行くから」

リッカの実を持ったまま慌てて後を追つ。その気配を感じたのだろつ。シユカは立ち止まつた。

「……一緒に行くか？ その方が回数も少なくてすむ」

「い、行く」

二人きりになれるチャンスなど、この集団生活の中では一度と無いかもしない。里香子は何度も頷いていた。

（すつごく、嬉しいかも……）

ここに来たばかりの頃は、顔も合わせることすらなかつた。それから少しづつ声を掛けることが出来るようになつて。料理を褒めてくれたこともあつた。気のせいかもしれないが、今日は特にいつもよりも優しく接してくれているように思つ。

きつと迎えに出た自分は泣きそうな顔をしていたのだろう。幼い子どもにするように、優しく髪を撫でられたことを思い出す。

一度リッカの実を置きに戻り、それから水桶をひとつずつ持つて

から森に向かつて歩いた。

綺麗な水が流れている川まではそう遠くはない。けれどほんの少しの時間でも、一緒に歩けるだけで幸せだった。

「冬もここまで水を汲みに来るの？」

「いや、この辺りは雪が深くて近付けなくなる。だからむしろ下流の方へ行く」

下流といえば、里にも近い場所だらう。

つい最近まで里香子もその辺りに住んでいた筈だ。けれどもう、山から離れた場所は怖いと感じてしまう。

それはこの世界のことを深く知ったからか。それともこの心がもうフォスターになつてゐるからなのだろうか。

「……やっぱり冬は厳しいよね。長期間保存出来る食糧を、少しでも多く作らないと」

食糧が確保出来れば、彼らが山を下りなければならぬ回数も減る。ただ空を見つめ、はやく朝が来るようになると祈る、あんな夜もなくなるかもしねえ。

「私、頑張るからね」

決意を込めて力強く告げる。料理が好きで本当に良かつたと改めて思う。皆の為に出来ることがある。それはとても嬉しいことだった。

「ありがとう。助かる。

彼は静かな声でそう言つてくれた。

けれどその表情が少し寂しげに見えたのは、氣のせいなのだろうか。

川で水を汲み、歩いてきた道を戻る。並んで歩ける時間も、もう僅かだ。

子どもたちの声が聞こえてくるよくなつたとき、ふと彼は立ち止まつた。

「……シユカさん？」

「ひとつ、聞いてもいいか？」

その真摯な声に、こくりと頷いた。不安と期待が同時に過ぎつて

いく。

「あの村には、いつから住んでいたんだ？」

「……」

里香は困惑する。

どう答えるべきなのだろう。

外見もほんと回じだが、自分はフォスターではない。それ以前に、この世界の者でもないのだ。

忘れていたのではない。

けれど彼らも仲間として扱つてくれていたし、里香子も彼らのことを深く知るにつれ、その痛みや歴史を共有してきた。ここでフォスターとして、生きていくつもりだった。

嘘は言いたくない。

けれど、フォスターではないと知れたらもうここには居られないのではないか。

不安が、言葉を自由にしてくれなかつた。

「答えたくなれば、それでいい。ただ俺たちが知る以外に、生き残りがいるのか気になつただけだ」

続く沈黙、そして不安そうな里香子の表情に彼は何を思ったのだろう。答えることを強要せず、シユカは先程のように優しく黒髪に触れる。

「お前を連れて来たのは俺だ。フォスターのリーダーとして、同族は必ず守る。だからそんな顔をするな

「……わ、私がもし、同族じゃないとしても？」

けれどこの優しさが、ますます里香子を追い詰めた。

絶対に口にしたくない言葉が、無意識に飛び出してしまう。

「私があの村に住まわせて貰つていたのは、ほんの数日なの。気が付いたらあの近くの森に倒れていて、村に住んでいる老夫婦に助けて貰つたのよ。だから……」

「この国には、フォスターの血を引く者以外に黒髪はいないんだ。だからもし、記憶がないとしてもお前は同族だ。心配はいらない」記憶がないのではない。ただどう説明したらいいのかわからないのだ。

こことは異なる別の世界から来た。

そんなことを言つて、信じて貰えるかどうかわからない。

信じて貰うぞ」りか。

自分でも少しずつ、元の世界の記憶があやふやになつてきいてい
る気がする。あれは夢なのだと、そつ言われたら納得してしまつかも
しれない。

私はどうしてここにいるの?
これからどうしたらいいの?

問う相手もいない疑問が、ぐるぐると頭の中を駆け巡る。涙が溢
れる。

水音がした。

足に冷たい水の感触。

せっかく汲んできた水を、こぼしてしまつたようだ。けれどもう
それを顧みる余裕もない。

戸惑う気配を感じる。

彼にしてみれば、ただ他にもフォスターが生き残つてゐるのではないか
と思つて尋ねただけだ。何故こんなに泣いているのかもわから
ないに違ひない。

「ごめんなさい。……私、迷惑ばつかり……」

必死に声を振り絞つて謝罪する。

「……大丈夫だ」

肩に温かい感覚。

あまりにも近く、耳元で聞こえる声。

怯え、不安に震える里香子の肩を、シユカが力強く抱き締めていた。

「シユカ……さん」

突然の抱擁だった。

けれど驚くよりも、その腕から伝わる温もりに、怯えた心が少し

ずつ宥められていぐ。

(温かい……)

優しい抱擁は、彼の心を何よりも伝えてくれた。縋り付くようつてその背に腕を伸ばす。

(ここにいたい。あなたの傍に、いたい……)

けれど真実を伝えずには出来ないだろう。この優しさを、裏切ることは出来ない。例え追い出されたとしても、彼を欺くことは出来なかつた。

「……信じて貰えないかも、しれない。でも聞いて欲しいの」自分が住んでいた場所は、この世界とは違う場所であること。向こうの世界で穴に落ちてしまい、気が付いたらこの世界の森の中に倒れていしたこと。

そしてあまりにも世界観が異なることから、別の次元から来たかもしれないここまで。

彼の腕の中に寄り添つたまま、考えつくすべてを言葉にして彼に伝えた。

シユカは途中で言葉を挟むことなく、静かにそれを聞いてくれた。「俺たちは魔法には詳しくないが……。召還魔法というものがある、と聞いたことがある。だがかなり高度な魔法で、その辺の魔導師に使えるようなものじゃない筈だ。おそらく宫廷魔導師クラスの者だろう。だが、それだけ簡単なものじゃない筈だ。……何の為に?」「え……。ま、魔法?」

そう言われて思い出す。ここは、魔法という力が存在する世界だったのだ。そして過去に、彼らはその力によつて苦しめられてきたというのに。

シユカの傍にいたかった。

フォスターとして、彼らと一緒にここで生きていくたいと、そう思つていた。

小さな可愛い女の子たち。

まるで姉のように慕つてくれるミコイー。

親切にしてくれる男の人たち。

もうみんな家族のようになくて大切な人たちだ。

ずっと一緒に暮らしたい。ここで、彼らの仲間として。

けれどそれが彼らを危険に晒す可能性が、ほんの僅かでもあるとしたら。

（私はここに、居てはいけないのかもしない……）

この世界の状況を色々と知ってしまった今、山を下りるのは怖かつた。黒髪をしているというだけで、どんな目に遭うかもわからぬ世界なのだ。

でも、彼が好きだから。この仲間が大切だから。これからみんなには、幸せになって欲しいから。

里香子は瞳を閉じて、シユカの腕に縋つた。

この温もりを、忘れないように。

かたり、と物音がして目が覚めた。

いつの間にか眠つてしまつていたらしい。

ここは王宮。王の住まう場所である。

生活をする空間で常に緊張を強いられるのは、苦痛だった。けれど部屋の外には衛兵がいるとはいえ、盟友のイドも忠臣のドリカも傍にいない今、もう少し用心するべきだ。

(……ここには敵が多すぎる)

窓から差し込んでくる光が、部屋の中を照らしている。まだ日が高い。そう長い間眠つていた訳ではないようだ。

そして視界に映つた人影に気が付き、表情を険しくする。

「……ここで何をしている」

部屋の隅には、ひとりの女性が静かに座つていた。

大人びた顔立ちをしているが、細い手足はまだ成熟していない。艶やかな茶色の巻き毛に、深緑の絹のドレスを身に纏つっていた。緑色の瞳は、王の不機嫌な声にもまったく動じず、静かに彼を見つめている。

「お話があつたので伺いました」

少女には似合わぬ落ち着いた声が、その薄紅色に染まつた唇から溢れた。

ここは私室ではなく、執務室だ。来客があつても不思議ではないが、よりによつて彼女は一番力を持つているドリニティー公の愛娘だ。カインサーは不快さを隠そつともせず、目の前の少女を見つめる。

彼も即位したばかりの時は、多くの理想を掲げていた。国民全員が安心して暮らせるように、それを実現させる為に生涯を捧げようと決意していた。

だがそれを実行するには、あまりにも多くの障害があつたのである。

亡き父王はどちらかといえば、自分の意見を述べるよりも周りの意見に耳を傾ける人だった。だが例え嘘を述べられたとしても、それを簡単に信じてしまう危うい面もあつた。父を愚王だったとは思いたくないが、国王としてすべてを背負うには優しすぎたのかもしれない。そのせいで物心がついた時には、王宮は貴族達に完全に取り仕切られていたのだ。

自分達の利益しか考えない人間。この国の貴族は、まさにそんな存在である。一応、国王であるカインサーには従つてゐるが、それも見せかけだらう。まだ若い王を彼等は心の底では侮つてゐる。例えこの国が滅んだとしても、彼らは自分達の財産さえ無事ならば良いのだろう。

国内を良くするという目標以前に、まず彼等と戦わなければならなかつた。

その貴族の筆頭が彼女の父ドリーティー公爵。まさに敵の象徴のような男だ。その男が溺愛する愛娘がこのシアという少女。母親は王族の血を引いてゐる為に、現時点では自分の正妃候補もある。だが周囲からどんな圧力を掛けられようと、それだけは受け入れるつもりはなかつた。あの男が次期王位継承者の祖父になつてしまえば、もうこの国は終わる。

「何の用だ？」

彼女自身には何も罪はないとわかつてゐる。

わかつてはいても、国王としての立場から彼女と親しくするつもりはまつたくなかつた。

ドリーティー公爵令嬢シアは、国王の素つ気ない態度に臆した様子も見せず、不思議なほど大人びた声で、こう告げる。

「……異世界の女性を捜すのは、お止め下さい。この国の為を、思

うのならば

「何処から、それを」

「この言葉に素つ気ないだけだったカインサーの視線に、明らかに敵意が宿つた。

「ドリーティー公爵に言われて来たのか？ その女性が見つかれば王妃になれなくなる、とでも？」

だがその視線を難なく受け止め、彼女はそれを否定する。

「いいえ、父は何も知りません。知ったとしても、恐らく関心がないでしよう。父にとつて関心があるのは、自分の地位と財産だけ。そういう人ですから」

父が娘を溺愛しているのならば、娘も父に親愛の情を持っていると無意識にそう思っていた。少なくとも、家族とはそういうものだと。だがシアはカインサーとほぼ同じ評価を、自分の父に付けたのである。

「わたしがここに来たことは誰も知りません。誰にも知られずに陛下とお話がしたかったのです。どうか異世界の女性を捜すのはお止め下さい。この国が滅びる前に」

「……」

淡々としていたシアの口調に、僅かに懇願の色が混じる。カインサーはそれに答えず、静かにシアを見つめた。

いくら大人びて見えても、彼女はまだ十七歳の筈だ。それに大切に育てられた公爵家のひとり娘である。イドが異世界からある女性を召還したというのは、一部の者しか知らない事実。それを年端もいかぬ少女が調べ上げ、誰にも相談せずに独断で話をしにきたのだと言う。

だがそれをここで詰問しても、彼女は何も言わないだろう。

カインサーは豪奢な椅子にその背を預けた。その話をじっくりと聞けば、何かわかるかもしない。

「まるでその女性が見つかれば、この国が滅ぶような言い方だ。何故、そう思う？」

シアは無言のまま、ずっと大切そうに手にしていた本のよつなのを差し出した。

「これは？」

用心しながらも受け取ると、見た目に反して軽々としていた。本ではない。

「わたしの母の日記です。母は、ミフアリ・ラリ様とも親しくして頂いたと聞きました」

ミフアリ・ラリは前王妃であり、カインンサーの生母の名前だ。そしてこの異世界に関する予言を遺した人間でもある。

「きっと陛下が知らない真実も、そこに書き記されてると思います。どうかそれをお読み下さい。そうすればきっと、異世界の女性を捜すことなどがどんなに危険なのか、おわかりになると思います」懇願するような声で、シアはそう告げると深々と頭を下げた。そしてそのまま衣擦れの音すら立てず、執務室を後にする。

ひとり残されたカインンサーは、じつとその日記を見つめた。

「真実、だと……？」

街が寝静まる深夜になつても、王宮にはまだ明かりが灯つていた。徹夜で見張りをする衛兵。いつでも主の要求に応えられるようにと、交代で起きている侍女たちもいる。広い王宮は静まりかえっているが、それでも多くの者が眠らずに朝を待つていた。

この王宮の主、セリドリー王国のカインサーもまだ眠つてはいなかつた。

夜が更ける頃によつやく私室に戻った彼は、シアから渡された日記に目を通していた。そして、その傍にはもうひとりの姿。この部屋に蠅燭は灯されていない。それなのにまるで真昼のようになるかつた。王の私室のすべてを、死角がないように明るく照らしている。

「イド。これは、ここに書かれているのは事実なのか？」

その隣には、長い銀の髪をひとつに束ね、まるで自室にいるかのように寛いだ格好をしている魔導師の姿があつた。この部屋の明るすぎる照明は、彼の魔法なのだろう。

「……ああ、そうだ。その通りだ」

「ならば彼女は、お前の？」

「亞還に成功すれば、伝えるつもりだった。彼女をこの世界に呼び戻すのが、俺の使命だと思っていた。……だが、俺よりも魔力の強かつた筈の父が、どうしてこの魔法を実行しなかつたのか。それがずっと氣懸かりだつた。俺と同じくらい、いやむしろ俺よりも強く願つていた筈なのに」

二人の間にある机には、三つの日記が並べられていた。

カインサーの父である前王のもの。

そこには、母の遺言が記されていた。

運命の女性を妃としたとき、この国は大陸を制する力を持つだろ

う、と。

それが誰なのか、はつきりと記されてはいない。だが父はそれは他国の妨害に遭つて失敗したと書き残している。その後は亡き母に対する言葉だけで、その件にはまったく触れていなかつた。

次に、イドの父が遺した魔法書。

そこに記されていたのは、運命の女性は異世界にいること、そしてその次元を特定して探し出す方法が詳しく記されていた。

そして最後に、シアに渡された彼女の母の遺した日記。

彼女の言う真実が、そこには書き綴られていた。

すべては、二十四年前。

このセリドリー王国の前王が、ある高名な女魔導師を王妃として迎えたことから始まつた。

一般的に女の魔導師は、結婚することはない。

それは出産によって魔力が相当量奪われてしまうからだ。力の強い魔導師の場合は奪われてしまふ魔力の量も多大で、命に関わることもある。

前王と王妃の間には、ただ純粋なる愛があつたのか。それとも、それは契約だつたのか。

今となつては知る術もないが、王は女魔導師に求婚し、彼女もそれを受け入れた。遺した日記から察するに、少なくとも王は彼女を愛していたのだろう。

そしてそれから一一年後、王妃は現王であるカインサー・ロド・セリドリーを産んだ。

それはかなりの難産で、結局王妃はその後回復することなく命を落とすが、その命と引き替えに産んだ息子を抱き、満足そうに微笑んで、こう言い残したといつ。

「私が産んだのは、ただのセリドリー王国の跡継ぎではない。この子は、大陸を統べる、偉大なる王となるだつ。けれど、それはこの子ひとりでは為し得ない。今から三年後、半身となる女性が王の血筋に産まれる。その娘を、次期王妃にするのだ。そうすれば我が

国は大陸を制し、太陽の沈まない王国のように永遠の繁栄を誇るだ

る。「ひ

かしくてその予言通り、一年後に王の妹が次期王妃として定められた娘を妊娠した。

けれど他国にまで広がった王妃の予言を恐れた、ある国の呪術師によつて呪いをかけられてしまつ。そのせいで運命の娘は産まれることなく、異世界に飛ばされてしまったのだと「ひ」。

だとしたら。

カインサーはまだ見ぬその女性を「ひ」。

この世界で生まれなかつたとはいえ、彼女は異なる世界の人間とは言えない。

もし妨害に遭わなければ王家の直系の娘として、ドリーティー公爵の娘であるシアよりもずっと正妃に相応しい身分だつた筈だ。もし母の予言がなくとも、きっとそうなつたに違ひない。

そんな女性を何故、シアは探すなと言つたのだろう。しかも国が滅びる、などと。

ここに記されている過去を知つた今、彼女の発言をただの戯れ言として聞き流すことは出来なくなつていた。

けれどその意図が掴めず、カインサーはイドに問う。

「魔法を構築しておきながら、それを実行しなかつた父も懸念を感じていたのかもしれない。それが何なのか。……俺に考えられることは、ひとつだけだ」

イドの指が、日記のある一部分を指し示す。そこにはシアの母が書き遺した言葉があつた。
他国の呪術師、と。

翌朝。

カインサーはイドに頼み、ドリーティー公爵家の者には誰ひとり知られないようにしてシアを呼び出した。

あれからも思案を重ね、カインサーもイドも一睡もしないままだった。だが身支度をきっちりと整え、執務室で彼女が訪れるのを待つた。

ほじなく、イドが彼女を連れて来た。

艶やかな茶色の髪を結い上げ薄紅色のドレスを纏った彼女も、早朝にも関わらず身だしなみを完璧に整えていた。カインサーはその手に、預かった彼女の母の日記を返す。

「イドが、他国の呪術師がまた彼女を狙うのではないかと懸念していた。もしくはその身に転生しても消えない呪いをかけられているのではないか、と」

シアはこくり、と頷く。真摯な瞳だった。

「……わたしは、とても身近に呪術師を知っています。彼らの呪いがどれほど恐ろしいか、よく知っています」

それはドリーティー公爵が呪術師を雇っていると告げたのも同然だった。けれど今はそれを追求する時ではない。カインサーはただ頷いた。

窓から見える空は、真っ赤に染まっていた。
建物の周りに干した洗濯物を取り込みながら、里香子はその夕陽に見惚れていた。

「綺麗……」

金色に染まつた草原が朱色を帯びる。

その景色はとても神秘的で、そして壯絶だった。

夕陽というものはとても美しいにも関わらず、時には物悲しく見える場合がある。里香子も少しずつ闇に染まっていく朱金の大地を見つめ、切ないような気持ちになつて田を細めた。
けれど景色に氣を取られすぎた。洗濯物を落としそうになつて慌てて手を伸ばす。

「あつ……」

風に煽られて空に舞い上がるシーツを必死に追う。すると。

「危ないぞ」

背後からの声。里香子の背を支えてくれたのが誰なのか、振り返つて確認するまでもなかつた。

「おかえりなさい」

「本当にお前は田を離すと、落ちたり転がつたりするからな」

「そんなにいつも、転がってる訳じゃないし……」

子どものように拗ねてみせて、彼はただ苦笑するだけだ。

あの日の夜。

仲間が大切だからこそ、里香子はここを離れようとした。もし魔導師が自分を探しに来たりしたら、この隠れ村も危険に晒されてしまう。それだけはどうしても嫌だった。

決行は皆が寝静まっているだろう、夜明け前。

別れも告げずに離れるのはつらかったけれど、直接別れを告げる勇気はなくて。

まだ闇の残滓が残る空の下、ひとりで山を下りるべく外へ出たのだが。

ルーパリーが振り返り、さわやかに笑う。

「あ、里香子。おはよ。水汲みはもうしてあるぞ」

まだ周囲は薄暗いといつのに数名の男たちはもう起きていて、薪を割つたり水を汲んだりしていたのだ。

「お、おはよう……。す、すぐにパンを焼くから、待っててね……。
それから数回挑戦するも、何故かいつも誰かは起きている。昼間はミリィーや子どもたちがずっと一緒に、ここ数日間、ひとりになる時間がまたくなかった。

あれほど強かつた決意も、田にちが過ぎるとどうしても薄れてしまう。それに村は何事もなく平和だった。その平和が緊急性を失わせ、いつしか冬を越える為の準備に熱中してしまっていた。こちらの方が余程切実なかもしれない。

「里香子」

シユカはその背中に手を添えたまま、彼女の名を呼んだ。

「話がある。少し、いいか?」

「ぐりと頷く。間近で見つめる彼の紫の瞳は、とても真剣だった。

シユカに手を取られたまま、少し山の中を歩いた。子どもたちに聞こえる場所では、話しくいのだろうか。生い茂った木々は赤く燃える夕陽の光さえ遮り、少し薄暗い。ひとりならば怖くて歩けないかもしれない。

里香子は、目の前を歩くシユカの背中を見つめた。

彼は仲間たちを守るリーダーだ。その為に何かを決断したのかもしれない。

どうして言われる前に出て行かなかつたのだらう。少しずつ後悔が胸を満たしていく。直接別れを言わるのはつらいから、誰にも告げずに行こうとしていたのに。

繫がれたままの手。この温もりに、あの日の抱擁を思い出す。それを思い出にこの地を去ればよかつたと思ひ気持ちと、離れたくないという相反する気持ちに翻弄される。

泣き出しそうになつたその時、ふいに風が吹き抜けた。

顔を上げると、森の終わりが見えた。

唐突に生い茂つた木々が姿を消し、その代わりに現れたのは金色の波。

消えようとしている太陽の赤い光が、シユカの横顔を照らしている。

「もう沈むけどな。ここから見る夕陽が、一番好きなんだ」
穏やかな声でそう言つと、シユカは里香子の手を離して金色に染まつた草の上に座つた。

「……とっても綺麗

その傍に寄り添つよつとして座る。

「ずっと話がしたかつたんだが、少し忙しくてな。今日までルーパリーやミリィーに頼んで、見張つて貰つっていた。思い詰めた様子だつたから」

「え……」

思いがけない言葉に、その紫の瞳を見つめる。

「最初に言つておく。俺は、必ず守ると言つてお前を連れて來た。

その約束を破る気はまったくない。だからそれを信じてくれないか?

？」

ゆつくつと、小さな子どもに言ひ聞かせるかのような声。その優しい口調に、張り詰めていた心が解けていく。

「でも私はフォスターじゃない……」

「自分からフォスターだと名乗つた訳ぢやない。俺が、あの村で平和に暮らしてきたお前を、こんな不自由な山の中に連れて來たんだ。

責任は俺にある。だからここに居てくれ。俺たちも里香子には、随分と助けられている」

でも、と口にした言葉と同時に、涙が頬を伝う。守ると黙ってくれた。

ここに居て欲しいと言つてくれた。助けられている、とも黙ってくれた。

仲間たちと一緒に助け合つ暮らしが、不自由だなんて思ったこともない。

「でも私を召還したつていう魔導師が、探しているかもしれない。ここに来てしまうかも知れない。みんなを危険に晒すくらいなら、私……」

こんなに切ない気持ちになつたことは、元の世界にいた時だって一度もなかつた。心がすべて砕け散りそうな痛み。

「俺たちは元々追われている。盜賊だからな。生きる為、仲間を守る為とはいえ、許される行為ではないだらう。いつか、裁きを受ける日が来る。それは覚悟している」

赤い光を背に、シユカはそう呟く。眩しい夕陽のせいで影が深まり、彼がどんな表情でその言葉を口にしたのかわからなかつた。初めて出逢つたとき、泥棒と叫んだことを思い出して里香子は俯いた。

けれどあの時は知らなかつた。

彼らがどんな境遇で暮らしているか、知らなかつたから。

「召還魔法かもしれないというのも、俺の予測でしかないからな。だが、もし誰かが意図的に里香子をこの世界に呼び出したのだとしたら、そいつは里香子を元の世界に戻す方法も知っているかもしれない。もし生まれ育つた場所に帰りたいと思つならば……」

元の場所。

生まれ育つたあの国。

中島里香子として生きてきた、二十年間が蘇る。

「私の生まれた国は、とても平和だったの。今思えばとても恵まれていた。水汲みなんてしたこともなかつたし、食べ物だつて欲しい物がすぐに手に入つた」

どんなに便利な暮らしをしていたか、ここに来て初めて思い知つた。もし帰ることが出来たら、日々の生活に感謝することが出来るだろう。

「……確かにあの世界は私の生まれた故郷だし、一十年分の思い出もある。でもね、もう両親もいないし、親しい友も恋人もいなかつた。忙しさに紛れて気が付かなかつたかもしれないけれど、きっと私、寂しかつた」

けれどここには、一緒に生きていく仲間がいる。必要だと呟いて

くれる人がいる。

「帰りたくない訳じゃない。でも私はここに居たい。みんなと一緒に生きてていきたい」

それでも一緒にいられない。彼らの安全を思つならば。
だから苦しい。だから、こんなにも切ないのだ。

里香子が目の前で泣いている。

便利で安全な場所で生まれ育ったという彼女。

だとしたら、こんな山奥での暮らしは本当に不便だつたに違いない、

それなのに、いつも楽しそうに笑っていた。

子どもたちの面倒を見ながら、母親のいない彼女たちに色々と教えてくれた。料理もとても上手で、彼女がここに来てから食事の時間を探しあにしている者も多い。

彼女は俺たちの境遇を哀れんで空から降臨した女神のようだ、と
そう言つたのは誰だつたか。

さすがに夢見がちなその言葉に苦笑する者もいたが、それでも里香子の存在が希望の光となつていていた事実は誰も否定しないだらう。

光。

そう、彼女の周りにはいつも明るい光があった。そして罪に手を染め、もう闇の中でしか生きられない自分たちにも、惜しみなくその光を分け与えてくれた。

だからこそ、彼女にフォスターではないと聞かされてもそんなに驚きはなかつた。彼女から感じる明るい光は、もう自分たちには失われてしまつたものだつたから。そしてきっとこれからフォスターの将来を背負う子どもたちには、今よりも必要なものだらう。

仲間たちの身の安全も大切だが、子どもたちの未来も、同じくら

い大切だ。

「里香子」

シユカは選ぶ言葉に惑つ。

彼女はフォスターにとつて必要な人間なのだ。どうしたらそれを上手く伝えられるだろ。

「もし、この世界に生きると決めてくれたのならば、俺たちと一緒に生きてはくれないか。こんな山奥での不自由な暮らしだ。苦労することも多いだろう。危険もあるかもしない。けれど俺が、必ず守る。守るから」

苦労はしても、それでも幸せを感じられるように。もうこんな涙を流すことがないようだ。

「……シユカさん」

里香子の頬にもう涙の跡はなく、薄紅色に染まっている。潤んだままの瞳で、そっと呟く。

「それって、プロポーズみたいだよ……」

思わず口にしてしまった後に我に返り、里香子はシユカの紫水晶のよう透明な瞳を見上げる。すると彼もまた、動搖したような瞳で里香子を見つめていた。

ほんの数瞬、交わされた視線。

それからどちらともなく笑い出した。吹き抜ける風に乗つて、笑い声が空へと昇つて行く。

「帰ろうか」

「うん」

戸惑いは、まだ心の中に少しだけ存在していた。

けれど一緒に居たいと言つた。そしてシユカは必要だと言つてくれた。

仲間たちを守ると言つてくれた。

だから彼を信じよう。好きな人を信じられないのは、あまりにも悲しいから。

「本当はルーパリーは朝がすこく苦手なんだ」

「え、 そうなの？ ものすごくさわやかな顔をしていたよ？」

それを聞いてショカは声を上げて笑う。それは怖いな、と呟いて。つらい思いをした。

何度泣いたかわからない。

けれどショカにすべてを伝えて、彼との距離もかなり近付いた。前を歩く彼の手を、そつと掴んでみる。

「また転がると悪いからな」

少し悪戯っぽい笑みを浮べて、ショカは里香子の手を取ってくれる。

振り返った。

目にしたのは、赤く燃える夕陽。

そして金色に光る草原。

きっとこの一つの景色を、忘れる事はないだろう。

2・5 夜が明ける

里香子が帰ってきた。

シユカに手を取られ、少し嬉しそうに微笑んでいる。里香子を気遣いながら歩くシユカの顔も穏やかそうで。どう見てもお互い好意があるようにしか見えない。

その様子を窓から見つめていたミロイーは、傍にいる背の高い大男を見上げた。

「……私。てっきり里香子さんは、ルーパリーさんに好意を持つてるんじゃないかと思つてた」

ルーパリーはただ静かに里香子とシユカを見つめている。

「好きだつたんでしょう？」

「里香子を嫌いな男なんていないだろ？」

兄であるシユカが、今までどんなに苦労をしてきたか知っている。だから、兄に寄り添う相手が出来たのは嬉しかった。けれど、ルーパリーだけではない。里香子を好きな男は他にもたくさんいるのだ。

彼らとの関係がどうなつてしまつのか。今まで助け合い、共に暮らしてきた関係が壊れたりはしないだろうか。それがミロイーには心配だった。

視線を前に向けたまま、ルーパリーは静かに口を開いた。

「俺が、俺達が里香子に惹かれているのは、ただ黒髪の女性だからという単純な理由なんかじゃない」

「……うん。わかる気がする」

頷く。

この隔離された山奥の暮らしの中に、笑い声が響くよくなつたのは彼女が来てからだ。

明るくて、前向きで。里香子が傍にいると、空気まで穏やかに変

化するかのようで。

「彼女の明るい笑顔に、俺達がどれだけ救われたか」
その声には、里香子に対する深い想いが宿っていた。そう、彼も
こんなにも里香子を愛していたのだ。

「ここだけの話、もし里香子が選んだのがシユカじゃなかつたら、
諦めたりはしないだろうな。俺だけじゃなくて、あいつらも」
それでも里香子の傍にいるシユカを見て、彼は優しく笑う。

「シユカがどれだけ必死に、俺達が生きていけるようにしてくれた
のか知っている。いつだって自分よりも俺たちを優先してくれた。
確かに里香子は大切だが、俺にとつてはシユカも同じくらい大事な
んだ。一人が幸せになってくれるなら、こんなに嬉しい事はない。
俺だけじゃない。あいつらも、シユカならいい。そう思つていて」
ルーパリーの言葉に、ミリィーは瞳が潤むのを感じていた。

今日の食べ物にも困るような、山奥での不自由な暮らし。

人目を避けて隠れ住むような暮らしに、どうして自分たちばかり
こんなに迫害されなければならないのかと、悔しく思つた日もあつ
た。町でなんの不安もなく暮らしている同じ年頃の少女達を、訳も
なく憎く思つた日もあつた。

けれどここに暮らす人々は、とても優しい。

自分以外の誰かの幸せを、こんなにも祈る事が出来るのだから。

（私、ここに生まれて良かつた……）

その優しい人達と共に暮らせる事を、彼らの仲間として生まれ
たことを、初めてミリィーは感謝した。

頬を伝う涙。潤んだ視界の先には、寄り添う二人の姿。

どうか、二人がずっと一緒に居られますように。

兄の為に、そして大好きな里香子の為に、ミリィーも瞳を閉じて
祈りを捧げた。

「」の数日間続いた習慣で、里香子は夜が明ける頃に田を覚ました。

外を見ると、ほんのりと明るくなっている。もう一度寝直そつかと少し悩み、思い直して起き上がる。

着替えをして髪の毛を丁寧に梳かし、音を立てないようにと水桶を出した。

早朝の澄んだ空氣。ひんやりとした冷氣が身体を包み込んだ。冬は確実に近付いているのだ。

「食糧の確保をもう少し急がないとね……」

水桶を手にして外に出る。

「里香子」

すると背後から声を掛けられた。振り向くと、シコ力の姿。大量に集めた薪を建物のすぐ傍にある小屋に積む作業をしていたようだ。もちろん、冬に備えてだ。

「随分早いね」

「早起きだな」

目が合いつとほぼ同時に同じような言葉を口にして、里香子は思わず微笑んだ。

昨日までは、こんなに穏やかな時間が過ぎさせるなんて考えもしなかつたのに。

「俺はこの時間帯が好きなんだ」

シコ力が浮かべる笑みも、最初会つたときには想像も出来なかつたくらい柔らかい。

「この静けさも、澄んだ空氣も」

「うん。そうだね。とっても気持ちがいいね」

連れだって水汲みに歩くこの光景も、もしかしたら毎朝恒例になるかもしれない。集団生活の中、一人きりになれるチャンスはなかなか貴重だ。

（毎日早起きしなきや……）

それに集団の中ではなかなか、彼の穏やかな表情を見る機会は少ないだろう。

皆の前では彼は常にリーダーであり、すべきことも多い。でも今だけは、一人きりで。

里香子は田の前を歩くシユカの左手にそっと右手を滑り込ませる。彼は振り向きもせず、それでも壊れ物を扱うかのように優しく握り返してくれた。

幸せな気分になつて、里香子は微笑む。今はこれだけで充分だつた。

2・6 償うべき罪

田の前に報告書が積まれている。

セリドリー国王カインは手を伸ばしてそれを取り、素早く田を通していく。

「呪術師。我が国にはあまり縁がないようだが、他国では呪術師絡みと思われる事件がこんなにあるのだな」

その隣にいるのは銀髪の魔導師イド。

「そうだな。しかも魔法を使ってむやみに人を傷付けたら罪になるのと違い、法による規制がない。幸いまだ国内には蔓延していないようだから、この国のようにする前に法律で規制するべきだ」「だが、国内で犯罪が起きた前例のない法律を持ち込むのは、容易ではないだろう。

「ここにリストリア王国で起きた事件の事例があります。他国といえば、これほどの被害が出た事件ならば規制するのは当然かと思われます」

いつもならばイドと二人きりのこの部屋に、今はもうひとりの姿があつた。

美しく着飾った貴族の少女。ドリー＝ティ－公爵の娘シアだった。

艶やかな茶色の巻き毛を結い上げ、その髪を飾るのは花をモチーフとした髪飾り。それには煌めく宝石が贅沢に使われている。同様に、ほつそりとした白い首元には瞳の色と同じ見事な緑玉の首飾り。その豪華さと比べて、細い身体を包む薄紅色の絹のドレスはシンプルだ。けれどそのシンプルさが、若い少女の美しさを引き立てている。

何故彼女が、王であるカインサーの私室に入ることを許されているのか。

それはシアが、カインサーとイドが探して異世界の女性の搜索をやめるようにと嘆願したあの日のことがきっかけだった。

異世界から呼び出した女性を捜さないよう、と言つシアに、カインサーは頷かなかつた。

「彼女は、元々この国の王族に生まれていた筈の女性だ。それをどこにいるかもわからないまま放つておくことは出来ない。呪いをかけられているのならば、尙更だ」

事實を知った今、カインサーにとつて彼女は単なる異世界から来た女性ではなかつた。

けれどシアは言つ。

「……ミファリ・ラリ様は偉大な魔導師でした。そのお名前は、国外にも広く知れ渡つているでしょう。そして遺された予言もまた、大陸中に知れ渡つているのです。何故、彼女が生まれる前に呪いをかけられてしまったのか。それは」

「……母上の予言を恐れた他国の差し金、だつたな」

「そうです。そしてその予言は、今も各国から恐れられているのです。我が国が大陸を制するということは、他国にとつては侵略されて國を奪われること。……今度こそ呪法だけではすまないでしまうまだ二十四年前の歴史は過去に埋もれてはいない。もしカインサーが予言の女性を正妃にすれば、近隣の国が共謀してこの国を孤立させる恐れがある。孤立させるだけならばまだ良い。最悪の場合、戦火に包まれる場合すらある。

それを考えてシアは言つたのだ。この国が滅ぶ、と。

「……父が術式を完成されながらも実行しなかつたのは、彼女の身を安全を考えてのことだったのか」

一度と会えない世界でも、生きててくれているのならそれでいい。きつとそう思い、会いたい気持ちを堪えたに違ひない。

「それなのに俺が、この世界に……」

カインサーもイドも、既に両親を亡くしている。当時のことを見るのは、すでにほとんどない。その限られた情報の中では、彼女の命が危険に晒される可能性を、この国を更に危険な状態にしてし

まう可能性を見いだすことが出来なかつた。

「いや。それを実行するように命令したのは、俺だ。体力をすべて使わせる程の無茶をさせて、その上……」

荒れ果てた国内に氣を取られ、外交にまで氣が回らずにいた。王

たる者、すべてに意識を向けていなければならぬといふのに。

「いいえ。陛下が野心からではなく、真にこの国を思つていたからだとわかつています」

年齢に似合わぬ落ち着いた声で淡々と話していたシアが、慈愛すら感じさせる穏やかな表情で、カインサーを見つめる。

「腐敗しているのはこの国ではなく、上層部の貴族たち。そして父が、その筆頭であることもわかっています。でもわたしは、この国を愛している。この国を良くしたいと戦つておられる陛下の、お力になれば。そう思つています」

この状況下で、信頼できる味方は数える程しかいない。人手不足は視野の狭さに繋がり、また同じような過ちを犯してしまつ危険性もある。けれど彼女はドリーティー公爵の愛娘なのだ。

何処まで信用していいのだろう。

「だがそれは、君の父上であるドリーティー公爵を追い詰めることになる。それでもカインサーと共に戦つと？」

イドが静かに尋ねる。彼女の言葉は真摯だった。それが虚構ではないと彼は感じていた。けれど不安なのはその覚悟。

父親を追い詰める。それを、いくらこの国の為とはいえまだ十七歳の少女に出来るのだろうか。

「……父は五年前、罪を犯しました。わたしはまだ子供もでしたが、今でもその光景を忘れることが出来ません」

白い頬に涙が伝づ。声は冷静なまま、けれど彼女の緑色の瞳には、涙が溢れていた。

「この国の貴族として、ひとりの魔導師として。何よりも人間として許されることではありません。わたしは父が許せない。罪を償つて欲しいと、そう思つています。

そして彼女は語り出した。

五年前。まだ無邪気な子どもだった彼女は、新しく移り住んだ屋敷をこつそりと抜け出した。父が新しく領土にした土地は王都から少し離れた、自然の豊かな美しい場所だった。

そこで出逢った同世代の少女。珍しい髪の色をしていたが、とても可愛らしくて優しい子だった。初めて、年の近い少女と一緒に遊んだ。初めて出来た友達だった。

また明日も一緒に遊ぼう。そう約束したのに。

「この子は、黒い髪をしていました。フォスターの少女だったのです」

フォスター。

それは今はもうない国の民を指す言葉。もつこの国の一員になつているとはいって、他では見られない珍しい黒い髪をしているので、見ただけですぐにフォスターだとわかる。

「五年前まではただ静かに暮らしていたフォスターが何故、姿を消したのか。何故、盗賊と成り果ててしまったのか。原因はすべてわたしの父にあります。父は、友達を捜して森の近くまで歩いて行つたわたしの目の前で、彼女たちを虐殺したのです」

多い茂った金色の草に隠れて見た、地獄のような景色。その恐ろしい光景は今でも時折蘇り、シアを苦しめる。

「父が、フォスターを嫌っていたのは知っていました。それが自分の領土に住んでいることに、かなりの不快感を持つていたことも。けれどまさか、あんなにひどいことをするなんて」

父は、自分がすぐ近くの草むらに潜んでいたことを知らなかつただろう。きっと今でも知らないままに違いない。

「あの時の悪魔のような顔を、忘れることは出来ません。目の前で繰り広げられた惨劇も。父は罪を償うべきです。わたしが、証言します」

その事件が王都に伝わることはなかつたのだらう。カインサーもイドも、初めて聞く惨劇にただ言葉を失つた。

残されたフォスターたちは、一方的な虐殺にどれほど怒りを覚えただらう。そしてその犯人が何の処罰もなくのうのうと生きているのを見て、どれほどこの国に失望したのだらう。

「これほどの非道が罷り通るこの国を変えたいと思いました。そして今はもうこの國の民である筈のフォスターが、迫害されることのない国になつて欲しいと。たつた一日だけでも、名前も知らなくとも、彼女はわたしの友達でした。彼女の魂が安らかに眠れるように、わたしは父と戦いたいのです」

少女が心に受けた傷は、血の繋がつた父親よりも、たつた一日だけの友を選ぶほど深かつたのだろうか。いや、同世代の友人を持つことが難しい貴族の娘にとって、同じような年頃の少女と思い切り遊んだことはきっと宝物のように大切な思い出だつたに違いない。

その決意を疑うことなど、もう出来なかつた。それにその罪が明らかになれば、ドリーティー公爵は確実に裁かれるだらう。

そしてこの日から、三人の戦いは始まった。

ドリーニティー公爵との戦いは、長期に及ぶだろう。それにフォスター側からの証言も必要になる。彼らとの接觸方法を探りつつ、どうやつて彼を追い詰めていくかを慎重に探っていくことになるだろう。

異世界から呼び出した女性の捜索は、続行することになった。

もう二ちらの世界に呼び戻してしまった以上、そのまま放置してもおかじとも出来ない。彼女は自分の運命も、呪いをかけられていることも知らないのだから。

シアは危険だと言い続けたが、イドが納得しなかった。

結局、捜索は極秘に行うこと、予言の女性を捜しているとは一切他言しないことを条件に、シアも同意した。彼女が恐れているのは、その存在が他国に知れ渡ってしまうことだ。それさえ避けられるのなら、異を唱え続けたりはしなかつた。

だが取り敢えず今は、大きな動きは出来ない。すでに大々的に捜索を開始してしまった以上、世間の関心が薄れるまで少し時間をおかなければならぬだろう。

その間に彼女に掛けられた呪いを解除する方法を探そうとイドが提案し、こうして呪術師に関する事例を集めていた。その中で呪術の恐ろしさを知り、それを制限する法律が何もないことに気が付いた。そしてそれを導入すべく話し合いを進めていたのである。

「ではこのリストリア王国の事例を元に、提案書を作成します。そうですね、明日には」

書類を整理するシアが、その仕事に不釣り合いな程着飾っているのには理由がある。表向きは、王宮の茶会に出席することになつているからだ。娘を正妃にしたいという野望を捨てていかないドリーニティー公にとつては好都合らしく、毎回美しく着飾つて送り出してくる。

彼女がその裏で、父の失脚を願つているとも知らず。

(……あの男も哀れだな)

けれど彼女を王宮に招く」とで、王が異世界の女性を諦めて王妃選びに入ったという噂も既に流れている。時折本当の茶会を開き、彼女以外の上位貴族の娘も招いていた。それによつて自分の娘を正妃にしたい貴族同士の競争感を煽り、彼らの団結力を弱める目的もある。

策略と駆け引きに満ちた世界。

それでもまだ勝算があるだけ、戦う意志も沸いてくる。

カインサーは空を見上げた。

高く澄んだ青い空。

今、彼女は何処にいるのだろう。

里香子は調理室で夕食の準備をしていた。

長い黒髪をきつちりと束ね、余つた布で作ったエプロンをして楽しげに料理をしている。

リーンの実を茹でで、裏ごしをする。鍋に移して牛乳を加えて混ぜ、ゆっくりとかき混ぜた。

パンは木の実を混ぜて香ばしさを増した。バターももちろん手作りだ。それにリッカの実で作ったジャム。甘いジャムは子どもたちだけではなく、男たちにも意外に好評だった。鶏肉は小麦粉を付けて唐揚げに。里香子の周囲には小さな子どもたちがいて、一生懸命にお皿を並べたり里香子の手元を覗き込んだりしている。

「さあて、出来た。熱いから気を付けてね。……あれ、リンちゃんは？」

子どもがひとり足りないと気が付き、周囲を見渡す。少女たちは大抵いつも一緒にいる。ひとりで単独行動をすることなどほとんどなかつた。

「……部屋で寝てる。頭が痛いつて」

具合が悪いのだろうか。里香子は心配になり、針仕事を終えてちよつと入ってきたミリィーに後を頼み、彼女の部屋へ向かった。

「昨日は随分寒かったから。もし風邪を引いたら大変だわ……」

怪我の手当ならばともかく、山奥に隠れ住む彼らには、病気に対する術がほとんどなかつた。

部屋の中を覗くと、まだ七歳のリンファは眠つてゐる様子だった。起きねないよつていつと、額に手を当てる。

(……熱い)

どうやら熱があるようだ。里香子は慌てて調理室に戻り、水瓶から冷たい水を汲みだして布を浸す。

「里香子さん？」

食事の用意をしていたミリィーが顔を出す。

「リンちゃんが風邪を引いたみたい。熱があるの。私がついてるから、先にご飯食べてて」

水に浸した布を固く絞り、額に当てる。

「お姉ちゃん……」

里香子は高熱に喘ぐ少女の小さな手を握りながら、唇を噛み締めた。食事は女性が優先的に配られるが、育ち盛りの子供達にはそれでも充分な量ではない。栄養不足の体では抵抗力も落ちてしまつているだろう。

「大丈夫。ゆっくり休んで」

黒髪を優しく撫でると、リンファは安心したように瞳を閉じた。吹き荒れる風が窓をがたがたと揺らした。視線を向けると、外はもう暗闇に包まれている。今夜も冷えるかもしない。暖炉の火を少し強くして、汗をかいたときの為に着替えを用意した。

「里香子さん」

しばらく眠っている少女を見つめていると、背後から小さな声がした。ミリィーがそっと顔を出す。

「リンファは……」

「大丈夫よ。たぶん風邪だから。温かくしてゆっくり休んでいればすぐに良くなるわ」

里香子の力強い言葉に、ミリィーは安心したように笑みを浮かべる。

「よかつた。私が代わるから、里香子さんも」飯食べてきて。もうすぐお兄ちゃんも戻ると思うし」

その申し出に素直に頷く。自分だけならば一食くらい抜いても平気だが、ショカは放つておくと自分から食事をしようとはしないのだ。しかも大切な仲間の少女が寝込んでいると聞けば、それどころではなくなつてしまつだ。

ミリィーに後を任せ、里香子は廊下に出た。ひやりとした冷たい空氣。部屋に戻つてショールを肩に掛け、調理室へ戻る。ミリィー

は後片付けもすべて終えてから来たようだ。きちんと整理された部屋の中には誰もいなかつたが、まだ空気はほんのりと温かい。

明かりを灯し、スープとパンを軽く温め直して器に盛る。鶏肉は熱い鍋の中に入っていたので、そのまま大皿に入れた。

夕食の準備が整い、明日の朝食の下拵えが済んでも、彼はまだ帰つてこない。

立ち上がり、窓を開けて外を覗き込んだ。

目の前に広がるのは明かりひとつない、深遠の闇に支配された森。その中に浮かび上るのは、半分に割られたかのような白い月。もし太陽がいたのならば弱々しく浮かび上がるだけの月も、暗闇の中ではまるで女王のように燐然と輝いている。

どこからか聞こえる鳥の声。

呼びかけるように鳴いているその声に、里香子は耳を傾けた。誰を呼んでいるのだろう。

その悲しげな鳴き声は、普段はあまり考えないようにしている不安を不意打ちのように浮かび上がらせた。この空だけではなく、心中にも闇が押し寄せてくる。

（今回は風邪だつたから、何とか出来た。でも、もし大きな病気や手当のしようがない程の怪我人が出たら……）

それは薄氷の上に暮らしているかのように、脆いものかもしれない。

「大丈夫、大丈夫よ……」

まるで自分自身に言い聞かせるかのように、何度も呟く。
きつとこの月のせいだ。

今日の月の光は、あまりにも綺麗だったから。

「里香子？」

不安に震える心に、待ち望んだ声が響いてきたのはその時だつた。窓の外を見ると、森から帰つてきたらしいシユカの姿がそこにある。透明な輝きを宿す紫の瞳が、真っ直ぐに里香子を見つめていた。

「シユカさん」

名前を呼ぶ。それは、希望を呼び寄せる呪文のよつた言葉。

この世界は安全な場所ではない。だからこの世界に生きると決めたのは、戦うと決めたのと同じだらう。それは武力による戦いではなく。

運命に屈せずに、生きる努力を、幸せになる努力をすることだ。
(そつよ、私が不安になつてどうするの)

出来ることは少ないかもしない。平和な場所でぬくぬくと育つた自分は足手纏いかもしれない。

でも、願つたのだ。

一緒にいたい、と。彼と一緒に生きていきたい、と。

「どうした？ 何かあつたのか？」

「リンちゃんが風邪を引いたやつたの。でも、大丈夫」
笑みを作る。

「大丈夫よ。私が絶対に、治してみせるんだから」

翌日になると手当てが効いたのか熱も下がり、よつやく食欲も出るよつになつてきた。

もう心配ないだらう。

「よかつたあ……」

里香子の隣に座つていたミリィーが、涙で潤んだ瞳でそう呟く。
その横顔を見つめながら、里香子は考へていた。これからもつと寒くなつていく。食糧も確保するのが難しくなつていくだらう。近隣の村だつてそんな裕福ではないし、常に蓄えがたくさんある訳ではないだらう。生きる為の略奪が、他の者の命を奪つてしまつかもしない。自分達が生きるだけで精一杯。その言葉は嘘や偽りではないと、里香子にも理解出来る。そして、彼らがこんな生活をしなければならないのは、この領土を支配している領主のせいだというのも。

けれど村に暮らす人達にも生活があつて、それを理不尽に奪われれば恨んだり憎んだりするだらう。それが更に差別を加速させる。

悲しい負の連鎖だ。

断ち切る術は、ないのだろうか。

今までの歴史がある。そして、それに至った理由がある。性急にすべてを解決しようと思つのは、無理なのかもしれない。
「でも何か考えなきゃいけないわ。このままじゃ……」

いずれ遠くない時期に、破滅が訪れる。

それを思つのは、最初にこの世界に飛ばされた時よりも恐ろしかつた。

(シユカさん)

ふと、彼の顔が浮かんだ。フォスターを率いてきたという彼は、いつもこんな気持ちでいるのだろうか。背後に迫り来る破滅から、仲間たちを守るべし。

里香子は立ち上がった。

彼だつて色々と考えているに違いない。誰よりも彼こそが、この事態を何とかしたいと思っているのだろう。

「里香子さん？」

「「めんなさい、朝食はもう出来てるかい」廊下に出る。そしてそのまま外へ飛び出す。

「里香子？」

すれ違つたルーパリーが、その勢いに驚いたように声を掛けた。
「どうかしたのか？ リンは？」

「あ、ごめんなさい。リンちゃんはもう大丈夫。熱も下がつたし」緊張を含んだ声に慌てて立ち止まる。

「そうか」

ルーパリーはその様子に優しく微笑んだ。その笑顔で、里香子は彼の自分に対する心情の変化を悟つた。まるで妹を見るかのような、穏やかで優しい笑み。ミリィーに接しているかのようだ。

「シユカなら裏にいるんじゃないかな」

「あ、ありがとう……」

慌てて誰の所に向かつたのかを見透かされて、頬をほんのりと紅色に染める。

「里香子」

恥ずかしさに足早に立ち去るつとした。けれどルーパリーは、走り去ろうとする彼女をもう一度引き留める。

「あいつは生まれたときから、魂の共有者となるべきパートナーが存在しなかつた。そういう人間は、一族の守護者としてリーダーになるんだ。危険を受け、仲間たちが安全に暮らせるように」「ルーパリーさん……」

何か大切なことを告げられている気がして、里香子は彼に向き直

つた。見上げる程に大きい彼の、優しさを感じさせる瞳を見つめる。「でも今は、あいつだけじゃない。パートナーのいない男は大勢いる。……俺もそのひとりだ。だからもう、何もかも背負う必要はないんだ。ひとりでは抱えきれない荷物でも、一人、三人で持てば何とかなる。きっとな」

里香子がシユカに伝えたかったこと。それは今まさに、ルーパリーが口にした言葉だった。

「うん。私もそう思う」

それを彼の本当の仲間であるルーパリーが言つてくれた。それがとても嬉しい。

「ルーパリーさんのパートナーって、どんな人だったの？」

思わず口にしてから、後悔する。まだ癒えていない傷に触れるかもしれない。

けれど彼は笑みを絶やさない。

「五年前はまだ子どもだったから、ゆつくりと話す」ともなかつたな。生きていれば十七歳。ミリィーと同じ年だ。真っ直ぐで綺麗な黒髪をした、優しい子だったよ

「……ごめんなさい」

「いや、いいんだ。普段はこの話を誰もしようとしてない。でもそれじゃあ、いつまでたつても傷は癒えない。里香子が来てからよく思うんだ。俺たちには、もう少し違う生き方もあったのかもしれないって」

遠くを見つめているかのような瞳。彼が見ているのは、もう戻ることのない遠い過去なのだろうか。

「ルーパリーさん……」

「シユカを頼む。あいつもきっと、里香子に惹かれてる。一族のしがらみや運命なんてねじ伏せてやりたくないくらい、夢中にさせてやれ」

「む、夢中つて」

頬が染まるのを自覚して、慌てて顔を手で覆い隠す。

「無理ですよ、私なんか。全然可愛くないし……」

「里香子は可愛いぞ。俺も一時期、夢中になりかけたくらいだからな」

あまりにもさりげなく告げられた言葉に、赤面していたことも忘れて見上げた。交わされる視線。彼の瞳はあくまでも優しい。

「あいつを頼む」

再び告げられた言葉に、今度は真摯に頷いた。

その騒動が起ったのは、それから数日後。まるで春のよつて暖かい日だった。

その暖かい陽射しに惹かれ、里香子は洗濯物を持って外に出た。吹く風も、いつもの冬の気配を感じさせる風ではない。（こいつって、小春日和って言つんだっけ？）

真っ白なシーツが穏やかな風に靡く。里香子は少し微笑んだ。もう里香子の頭には、元の世界も自分を召還したという魔導師も存在していないと同じだった。

自分の望んだ場所で、生きていける幸せ。ただそれだけ。

洗濯物をすべて干し終え、空になつた籠を手に家中へ戻ろうとすると、からん、と乾いた音が反対側から響いた。その音に誘われるようすに、里香子はその方向へ向かう。

「シユカさん……」

そこにいたのはシユカだった。

少し伸びた黒髪を無造作に束ね、暖かい陽射しに上着を脱ぎ捨てている。

冬の準備なのだろう。厳しい自然に痛んだ建物の修繕をしていた。どう言葉を掛けたらよいかわからずに、ただその後ろ姿を見つめる。

「里香子？」

その気配に気が付いたシユカが振り向く。

「どうした？」

「洗濯をしていたの。今日はとても良い天気ね」

「そうだな」

シユカの瞳が、天へと向けられる。高く青い空には無数の白い雲。風に流れてどんどん姿を変えしていく。

先日のルーパリーとの会話を思い出して、里香子は小さな溜息を付く。

彼の幸せを願う気持ちはルーパリーにも負けない。けれど彼の一番大切なものは仲間。それはどんなに愛してもきっと変わらない。一族よりも恋を選ぶ人ではない。わかっている。

わかつているのに少し寂しく思つのは、やはり異世界の価値観で恋愛をしようとしているからなのだろうか。

けれどその溜息を、彼は疲れていると思つたのか。自分の肩ほど

の位置にある里香子の黒髪を優しく撫でる。

「いつも苦労させて、すまないな

不意打ちだつた。

（そ、そんな長年連れ添つた夫婦みたいな……）

頬を染めながらも、まるで大好きな飼い主に撫でられている猫のような気分になつて、里香子は瞳を細めた。彼にとつて大切なならば、それは自分にとつても大切なものの。今は二人で、力を合わせて守ることが出来たらそれでいい。

これから先。そう、厳しい冬が終わり、春が訪れる頃には。

冬を乗り切つた安堵で、きっと彼の心も和むだろう。子どもたちも少しずつ大きくなつていく。それから考えればいい。それまでは、心も彼と一緒に寄り添つて困難に立ち向かおう。

春。

まだ見ぬその季節を思つ。自然に満ち溢れているこの場所の春は、きっと美しいだろつ。

だが、その静かな時間も長くは続かなかつた。

「シユカ！」

顔色を変えたルーパリーが、裏庭に駆け込んできた。

「どうした？」

その様子を見て、非常事態だと悟つたのだろう。シユカの顔が瞬時に険しくなる。

「さつき見廻りに行つていたコラド達が戻つたんだが。麓に見慣れぬ男たちの姿があつたらしい。遠目に見ただけだから確証はないが、その中に魔導師らしき姿があつたと……」

「魔導師？」

シユカの警戒が、緊張が、触れ合つていた里香子に直接伝わる。不安になつて彼を見上げた。

「大丈夫だ」

宥めるように里香子の背を優しく撫で、けれど厳しい表情のまま、シユカはルーパリーに告げる。

「とにかくすぐに全員を集めろ。何が目的かわからないが、用心した方がいい。女たちとその相手の男たちをあの部屋の一番奥へ。里香子もだ」

「シユカ。お前はどうするんだ」

「魔導師がいるところは危険だからな。例の仕掛けを作動させてくる」

仕掛けとは何だろつ。疑問に思つたが、この緊迫した状況の中ではそれを尋ねる事も出来ない。

「わかつた。……気を付けるよ」

「ああ」

シユカの手が、里香子から離れる。

思わずそれを追つように、手を伸ばした。

「里香子？」

「あ。“じめんなさい”」

心細そうに、服の裾を掴んだ里香子の手を、彼は握り締めた。

「ルーパリーが傍にいる。だから心配ない」

「ううん。私は大丈夫。ただ……」

ルーパリーは、シユカを見上げる里香子の潤んだ瞳を見つめていた。そう、彼女は自分のことを不安に思つているのではない。

（何故、気付かない……）

溜息が漏れる。里香子は、シユカの身を案じているのだ。その心配そうな瞳、そして縋る腕。青ざめた頬。すべて、彼の為だというのに。

「大丈夫。仕掛けそのものは大がかりなものではないよ。魔導師の探索魔法避けだ。レリコの葉というものがあつてね。それは、微弱だが魔力を遮る力があるんだ。そのレリコの葉を編み上げて作つた繩を、森の中に張り巡らせるだけだ。むしろ、こっちに残る俺の方が重労働だよ」

少し大袈裟にそう言つと、ようやく里香子の顔が緩んだ。

だが作業は単純だが、麓近くまで行く必要がある。その魔導師に遭遇する危険もある。だが、それを里香子に告げる必要はない。不安にさせてしまうだけだ。

「気を付けてね」

その言葉に頷き、シユカは走り去つていった。

「俺達も行こう。色々と準備がある」

そのまま里香子の手を引いて、建物の中へと入つた。そこには、シユカを除いた全員が集まつていた。

ルーパリーは全員がいるのを確認すると、少し小さめの斧を取り出す。そして、一番奥の部屋にある壁に向かつてそれを振りかざした。

「この奥に、隠し部屋があるので。私達が入つた後、また壁を修復し

て入り口を隠すのよ」「

ミリィーが説明をしてくれる。彼女は小さな女の子達にそれぞれの荷物を持たせ、ルーパリーが開けた小さな穴から次々と中に入るよう指示していた。

「里香子さんもこれを持って中に入つてね。水と食糧よ。ちょっと暗くて狭いけど、子供たちが声を上げたりしないように見ていて欲しいの」

手渡されたものを持つて、里香子も促されるままに壁の奥へと入る。灯りはなく、昼なのに薄暗い。だが思つていた以上に中は広かつた。六畳くらいはあるだろうか。床には防音の為か、それとも防寒の為か、乾いた布が敷き詰められていた。一番奥に小さな子供たち。そして年齢順に並んで、最後に里香子。その周囲を守るかのように、少女たちの未来の夫である男たちが座つた。

ミリィーは何度も荷物を持って往復している。水や食糧、そして防寒の為の毛布や衣服のようだ。

「これで全部ね。全員いる？ 大丈夫？」

人数を数え、確認したミリィーは。

「何があつても、何が聞こえても、絶対に声を出したら駄目よ。大丈夫。ここは安全だからね」

そう告げると、隠し部屋から出て行った。

「ルーパリーさん。ここをお願いします」

「わかった」

その会話を最後に、外部からの光が遮断された。新たな板をかぶせ、釘を打つ音が響き渡る。更に、その上から防寒の為に壁に貼つていた布を被せていくようだ。

「……ミリィーさん、は？」

ぽつりと呟いた里香子の声に応えたのは、ある男性の声。暗すぎて、それが誰なのかわからなかつた。

「女がひとりもいないのは不自然だから、彼女が残ることになつている。前々から、こういつ時はそうしようと決められているんだ」いつも彼等は、覚悟をしているのだ。何かあつた時にどう動けばいいのか。どうすれば、生き残れるのか。

「大丈夫」

壁の向こう側から、ミリィーの囁きが聞こえてきた。

「でも」

「そんなに心配しないで。少し大袈裟だけれど、万が一の事を考えただけ。お兄ちゃんもすぐ戻つてくるし、そうしたら出られるからね」

ミリィーの声は明るかつた。その声に、里香子もよつやく落ち着きを取り戻していく。

(そうよね。まだ何があるって決まつた訳じゃないんだし
もう一度と、五年前のような悲劇が起きないよう。)

仲間と別れたシユカは、ひとり山道を下っていた。

道らしい道はほとんどないというのに、まるで平地を歩いているのと変わらない速度だった。鬱蒼とした暗い森の合間にから在する民家が見えてきたところで、彼は立ち止まつた。

慎重に、周囲の気配を探る。まだ人の気配は感じない。だが気配を感じる場所まで近付くのは危険だった。

この辺りでいいだろ。そう判断したシユカは、背負っていた縄を下ろす。レリコの葉を使った探索の魔法避けの仕掛けだ。それを木に登つて地面から高い位置に張り巡らせる。二力所。三力所。

あまり一点に集中させると、かえつてその方向が怪しまれるから、まったく関係のない場所にも何個か設置しておく。

だがそれが何処まで有効なのか、魔力を持たない彼らにはわからない。魔導師の実力もかなり個人差があると聞いている。単に森に迷い込んだ冒険者のような者ならば、大して驚異ではないが、それが王宮の魔導師、しかも異世界から一人の女性を召還する事すら出来る力の持ち主だとしたら話は別だ。

それでも、打てる手はすべて打つておくべきだろ。仕掛けを設置し終えて、迂回しつつ里香子の待つ家へと帰る。いく。

「誰か」
だが。

不意に聞こえてきた声にシユカは立ち止まつた。まだ若い女性の声だろ。それは今にも途切れそうに弱々しい。

それでも用心の為に腰の剣を抜きながら、その声の方向へ歩いていく。

「助けて……」

声は崖の下からだ。姿勢を低くしてそつと覗き込むと、ひとりの少女が崖から突き出すようにして生えた木に、必死に捕まっている。この辺りは深い森のせいで視界が悪く、覆い茂った草むらのせいで崖があることもわからなかつたのだろう。

そつと覗き込むと、陽光を反射して煌めく金色の髪。馴染みのないその色に、瞳を細めた。彼女のしがみついている場所はそう遠くない。もし男なら、腕の力だけで這い上がるこつが出来るだろう。気配を感じたのか。必死にしがみついていた茶色の髪をした女性が顔をあげる。その顔を見た途端、シユカは思わず手を伸ばしていった。その姿は妹のミリィーと同じ年くらいの少女だったからだ。差し伸べた腕に、必死にしがみつく茶髪の少女。その身体は細くて軽く、大して力もいらずに助け出すことが出来た。

「ありがとうございます。助かりました……」

俯いたまま、彼女は震える声で必死に言葉を紡ぐ。だがその装いは村娘のものではなさそうだ。動きやすさを考慮しているが、上等な絹の布地。美しく磨かれた茶色の巻き毛。

(貴族の娘か)

助けなければよかつた、とまでは思わないが、関わりたくない人種だ。まだ立つことも出来ない少女を置いて、シユカはその場を去ろうとする。きっと向こうつも関わりたくはあるまい。

忌まわしき黒髪の人間などと。

「ま、待つて……ください……」

だがその少女は、まだふらつく足取りで必死に後を追つてきた。

「お願いです、少し話を聞いて下さい。……フォスターの方でしょう?」

魔導師の気配を感じた者がいる。まだ少女とはいえ、この土地にいる貴族の娘ならばあの男と関係がある者かもしれない。油断をするのは危険だ。

けれど今は仲間と離れ、ひとりきりでいるという身軽さが、シユカを立ち止まらせた。彼女の口調からして、ただ助けて貰つた礼を

言いたい訳ではなさそうだ。

「フォスターに、何の用だ」

そのまま彼女の言葉に耳を貸さずに立ち去れば、何も変わらなかつただろ？。この国も、彼らの生き方も。それは急激な変化もなく、つかの間の平和は得られる代わりに、少しずつ終焉に向かっていく希望なき未来だったかもしれない。

3・1 接触

ほんの少し前まで春のように暖かく注いでいた陽射しは、急に心変わりしたかのようにその姿を変えてしまっていた。強い風にどんどん流れしていく灰色の雲の切れ間から垣間見える光は白く、風も次第に冷たくなっていく。

少女とシユカは向かい合つていた。

茶色の髪の少女は真正面から宝玉のような紫の瞳に見つめられ、気圧されたように口を閉ざす。それでもまだ力の入らない足を必死に踏み止めて、彼に向き直つた。

「これを持っていた人のことを、ご存知ですか？」

上等の絹に包み、大切そうに懷に入れていたものを彼女は取り出した。シユカが目を向けると、そこにあつたのは古いネックレス。金や銀細工ではない。複雑に編み込んだ綺麗な色の紐の先に、木彫りの彫刻があつた。鷹と鳶のよつな紋様。

「……これは、フィーナの」

思わず口にしたのは、五年前に殺されてしまった少女の名前。見覚えのある紋様だった。

フォスターの女性は婚約者が決まるごとに、相手の家に代々伝わる紋様のネックレスを、婚約者の母親から渡される。鷹と鳶の紋様は、彼がよく知る相手の家に伝わっていたものだった。

何故それを、貴族の令嬢らしきこの少女が持つているのか。

「……フィーナ。彼女は、フィーナという名前だったんですね……」

彼女の緑色の瞳から、涙がこぼれ落ちた。

その名前を知つて、心から喜んでいる。そう感じさせる涙だった。

「わたしは、シアと言います」

絹のドレスが汚れることも気にせず、地面に座つた茶色の髪の少女はそう名乗つた。

「本当は五日後に来たかったのですが、家を抜け出すチャンスが今日しかなかったのでこの森にきました。何処にあるかはわかりませんが、きっとこの山の何処かに彼女が眠っていると、そう思ったのです」

五日後。

それは彼女たちの命日となつた、忌まわしき日。

シアと名乗った少女から離れた場所に、同じようになに座つていたシユカはその言葉に俯く。

もう六年目になろうとしているのだと、気が付いて。

「けれどすっかり道に迷つてしまつて。木が途切れた場所に行けば、道を見つけられるかも知れないと飛び出したら……」

そこは森の切れ間ではなく、崖だつた。

「助けて頂いてありがとうございます。フォスターの方に助けて頂けるとは、思つてもいませんでした」

丁寧に頭を下げる様子から、シユカは目を反らした。

「これは五年前、わたしの友人に預かつたものです。とても大切なだけれど、明日も遊ぼうっていう約束の印だと言つて。わたしは初めて出来た友に夢中になり、離れたくないと散々泣いて困らせてしまつたのです」

「……」

懐かしむように、手のひらに乗せたネックレスを見つめるシアと名乗った少女。

五年前までは、女や子どもたちも普通に麓まで出て畠を耕したりしていた。出逢う可能性がまったくなかつた訳ではない。

けれどあの頃から、いやもつとずつと前から、フォスターに対する差別は存在していた。いかに子どもとはいえ、友人になれることなどあるのだろうか。

シユカの警戒を感じ取つたのだろう。彼女は少し寂しげに言葉を続ける。

「本当は、ただ彼女の冥福を祈る為にここに来たのですが……。フ

オスターの方と接触することが出来たのは、彼女の魂が導いてくれたからかもしません。本来ならば、許可なくわたしの一存で話すことは許されないことでしよう。けれど、わたしはこの機会を逃さたくない」「

ただ悲しげに、寂しげに話していた彼女の瞳が、まるで雨が降つた後の森のように輝いた。そこに感じられるのは、強い意志。

「彼女を殺したのは、わたしの父です」

それは憎しみすら感じさせる声。

「ですがわたしにとつては父というよりも先に、わたしの大切な友人とその家族を殺害した殺戮者です」

父といつても顔を合わせる機会などほとんどなかつた、と彼女は言つ。

「わたしは昔、父にとつては何の価値もない娘でした。美しい姉といつも比べられ、部屋にこもりがちで。そんな時に出逢つた友は、わたしにとつては何よりも大切な宝だつた……」

自慢の姉は流行病で、婚約者が決まる前に死んでしまつた。

そして年頃になつたシアは周囲が驚くほど美しく成長し、父の態度が突然変わる。

けれどどんなに優しくされても、褒められても嬉しくなどなかつた。亡くなつた姉の形見の宝石まで持ち出して自分を着飾ろうとする父に、嫌悪しか覚えなかつた。

それでも父に対して従順な娘を演じ続けてきたのは、いつか彼女の仇を取りたいと思い続けていたから。

「……陛下は、この国の在り方を変えようと戦つておられます。自分たちの利益しか考えない貴族を排除し、真に国民の為の国を作ろうと。どんな階級のどんな人間でも、犯した罪は償わなければなりません。どうかその為に、力を貸して欲しいのです」

頬に冷たい雫を感じた。

見上げると、晴れ渡っていた空は姿を消し、周囲は薄暗くなっている。天はあるの明るい太陽が姿を隠してしまつと、まったく違った顔を見せる。

「……雨、か」

ぱつぱつと降り続ける冷たい雨。その雫を全身で浴びながら、それでもシユカはその場から動かなかつた。

その手には、フィーナの形見となつた古いネックレス。雨に濡れないよう、そつと布で包み込む。これを彼に託したあの金の髪の少女の姿は、もうなかつた。

明確な返事を、彼女は求めなかつた。

ただ自分の想いと王宮の今の状況を語り、考えてみて欲しいと告げて去つていつた。

雨は次第に強さを増していく。容赦なく降り続ける雨が身体を冷やす。けれどそれを顧みることもなく、シユカはただ立ち尽くしていた。

山の暮らしの状況は、年々厳しくなっていく。

今の王が、彼女の言うように誠実な人物なのだとしたら。あの罪を暴いて償わせ、この国を正しい方向へと導いてくれるのならば。少しは自分たちの生き方も変わってくるのだろうか。

山奥で凍えるような暮らしではなく。食糧も薬も少なく、ちょっとした病で命を落としてしまうような生活から仲間を救えるのだろうか。だとしたら彼女たちに協力し、あの事件の首謀者に罪を償わせる為に動くのが正しいのか。

そう、彼女が言つてたよう。罪は償わなくてはならない。どんな階級の、どんな人間だとして も。

(……罪)

泥棒、と初めて出逢ったときに里香子が叫んだ言葉が蘇る。生きる為とはいえ、罪を犯してきたのは自分も同じなのだ。もし、彼らが裁かれこの国が平和で平等な世界になつたとしても。

罪を償わずに、フォスターがその世界に受け入れられることはない。自分たちが害した者もまた、この国に住まう人間だから。彼が裁かれるのならば。

自分たちもまた、裁かれなければならない。
それでこそ、平等で平和な世界。

(里香子……)

その時、シユカが思い浮かべたのは、ただ里香子の笑顔だけだつ

た。

今まで共に生きてきた仲間や、たつたひとりの妹であるリリィーではなく。

どこまでも明るく優しい、彼女の笑顔だけ。

初めて出逢つた、あの時。いくら黒髪の女性だつたとはいえ、村で平和に暮らしていた彼女をあんなにも強引に連れてきた。本当はあの時からもう、惹かれていたのかもしれない。自分でも気付かないままに。

不自由な山奥の暮らしに不満も言わず、それどころか力になりたいと、会えてよかったですと言つてくれた。誰にも渡したくない。ずっと彼女の傍で、一緒に生きたい。

愛しているのだと。

それに気付いたのが、こんな状況になつてしまつてからだとは。

鬱蒼とした森が、次第に暗闇に同化していく。随分長い間、考え込んでいたらしい。

仲間たちは心配しているだろつ。何かあつたのかと、不安に思つてゐるに違ひない。すぐにも戻らなければならぬ。そう思つているのに身体は動かず、シユカはそのまま立ち尽くしていた。

罪を犯したのは、フォスターでも一部の者だけ。女たちや、その相手と決まつている男たちには罪はない。いやあの女性が言つように、この国の王が誠実な男なのだとしたら。他の男たちもそう重い罪にはならないかもしだれない。そうしなければ生きていけない事情があつたのだから。

だが誰も裁かれずに終わる事は出来ないだろつ。確かに被害を受けた者はいるのだ。
ならば。

フォスターのリーダーであつた自分が、裁かれるべきなのだろつ。そうすれば、すべてうまくいく。もう仲間たちは山奥に隠れ住むような暮らしからは開放されるかもしだれない。

覚悟は、いつだつてあつた。仲間たちを生かす為ならば、何だつ

てやつてきた。それなのに。

里香子。

その手を、放さなければならないのだろうか。

今になつて愛していると気付いても、もう遅すぎる。一緒に生きることは許されないのだ。

ふと。

誰よりも仲間を思つて生きてきたシユカの心に影が生じる。

今のやりとりを、仲間達は誰も知らない。何も言わなければ。何も知らせなければ。例え厳しい生活だとしても、仲間たちとそして里香子と一緒に生きることが出来る。きっとこの冬さえ乗り切れば、まだなんとか暮らしていける筈だ、と。

雷鳴が、轟く。

暗い空に走る凄烈な光。その厳しく美しい光が、彼をその暗い影から呼び覚ました。

「俺は……」

天を仰ぐ。

雷鳴は彼を裁くかのように、高らかに鳴り響く。

「今、何を」

紡がれる言葉は、普段の彼からは想像も出来ない程、弱々しい。大切な仲間を守る為に生きてきた。

それが自分の使命であり、生きていく理由だった。それを放棄してどんな顔で里香子の前に立とうというのか。愛するというのか。厳しい生活の中、薬が手に入らないばかりに死んでいった仲間。そして何よりも五年前、まるで獣を狩るかのように追い立てられ、無残に殺されていった女たち。その無念を、今ようやく晴らせるかもしれないというのに。

まるで呪文のように、繰り返し。シユカは、里香子の名前を呼ぶ。彼女の笑顔。そして、強さを思い出すと勇気が沸いてくる気がした。もしこの先、共に生きることが出来ないとしても。それでも、彼女を愛するに相応しい男でありたい。愛されるに相

応しい、男でありたいと。

雷鳴の中、シユカは真っ直ぐに前を見据えた。

手のひらの中の、古びたネックレス。

彼の婚約者だったひとに返して欲しいと、彼女は言った。けれど今これを彼に返すことは出来ない。

今のやりとりを、仲間たちに告げる気はなかつた。聞いた話から察するに、王といえども絶対的な立場にいるわけではないようだ。王が失脚し、彼女の父がこの国を牛耳る可能性もまったくない訳ではないだろう。希望を知らなければ、失望することもない。

だから彼らが知るのは、すべてが良い方向に向かつてからで良い。

「ごめんな、フィーナ。後で必ず、ルーパリーに渡すから」

まだ時間は残されている。その間に精一杯伝えよう。どれだけ、里香子の優しさに癒されてきたか。その強さに、励まされてきたか。そしてどれだけ、愛しているのか。

だから今は帰ろう。彼女の元へ。

シユカは山道を登る。一度だけ、振り向き。

そしてその後はもう振り向かず、雷鳴の轟く中、仲間たちが待つ場所へと走り出した。

3・3 黒の魔導師

だが、彼が立ち去つたその後に。

周囲に同化するように姿を消していた男が、すつと現れた。

雷鳴轟く雨の中、その身体はまったく濡れていない。全身を覆い隠す漆黒のローブ。

魔導師だ。

シユカの向かつた先を探るよつに見つめていたが、彼が事前に仕掛けでおいた探索除けのレリコの葉がそれを妨害する。魔導師は無理にそれを探ろうとせず、興味を失つたように視線を反らした。そしてそのまま、姿を消す。

残されたのは、静寂。

その壮大な建物は、その大きさと豪華さで見る者を威圧するかのように、そびえ立つていた。

自然を徹底的に排除した敷地内に、縁はまったく見当たらない。隅々まで石畳が敷き詰められ、これほど大きな屋敷ならば、本来あるべき庭園の場所には大きな魔方陣が描かれていた。その隣には魔導師の実技訓練所が設けられている。屋敷内の警備に当たっている者も魔導師ばかりだった。

屋敷の主ドリニティー公爵ゼネレスは、目の前に跪いた魔導師の報告に不機嫌そうに頷く。

「シアが、そんなことを。王宮に上げたのは間違いだつたかもしかんな」

忌々しげにそつと語る公爵は、重々しい緋色のローブを身に纏っていた。もう初老とも言える年だが、他を圧倒するかのような威圧感を放つている。短い茶色の髪に、緑色の瞳は娘であるシアと同じ。

「娘を部屋に閉じ込めておけ。外部との接触も一切禁止しろ。実の父親を陥れようとするような娘だ、もう容赦は必要ない。抵抗するよつなら少々痛めつけても構わん。だが、わしの唯一の娘であることに変わりはない。顔や身体に傷は付けるな」

「はい、と漆黒のローブを纏つた魔導師が返答する。その声は若い男性のものだつた。

「それにしてもあの忌々しいフォスターのせいで、あの若造に陥れられるところだつたとはな。そしてあいつらがまだわしの領土に住んでいたとは……」

苛立つ公爵が放つ魔力で、空気がびりびりと震える。だが漆黒のローブを纏つた魔導師は、そんな攻撃的な魔力にもまつたく動搖せず、そのままに平伏し続けている。

「ローダ」

公爵は男の名を呼んだ。

「カインサーがどんな手を打とつと、証言もなしにわしを断罪することは出来ないだろ。そんなことをすれば他の貴族たちに冤罪だと騒がれるからな。ならば、証言する者を消せば良い。娘はもう外には出さない。残りは……」

野心に燃える緑色の瞳が、山の方角へと向けられた。

「あの忌まわしきフォスターを、完全に消し去つてしまえばいい。皆殺しにしろ」

「……承知しました」

返答を残し、ローダの姿は搔き消すように消え去る。

ようやく満足げに笑みを浮かべた公爵は、次期国王は誰がいいか、と考えを巡らせていた。

若年の王は操るにはちょうど良かつたが、あの青年は凡庸だつた前王とは違う。出来るならば今のうちに退位させてしまつた方が都合が良いだろ。そして次の王に娘を嫁がせる。

（それまでにあの娘を従順にさせておかなければな……）

ござとなれば魔法で意志を奪つてしまえばいい。必要なのは余計

なことを考える意志ではなく、自分の血を引くその身体だ。

そうすれば遅くとも五年後には、この国は自分のものになる。

欲に取り憑かれた男は、昏い笑みを浮べていた。

もう少しのくらいの時間が経つたのだろう。

暗い部屋の中で、里香子はきつく両手を握り締めていた。シユカが帰つて来たら、すぐにわかる。ミリィーもすぐに知らせてくれると言つていた。

それなのに、まだ彼女はこない。帰つてきていないのであつた。

雷鳴が轟く。

窓がないので外の様子はわからないが、屋根に当たる音で激しい雨が降つているのがわかる。

敵と出逢つてしまつたのだろうか。それとも天氣が悪いから様子を見ているのだろうか。

（お願ひ。どうか、無事で……）

腕に縋り付いてきた小さな手が震えている。子供たちもまた、不安を感じているのだろう。自分の不安を押し隠して微笑む。小声で大丈夫よ、と囁いた。

きっと大丈夫。

自分に言い聞かせるように、里香子は繰り返す。

そのとき、誰かが隣接している部屋に入ってきた気配がした。

「……里香子さん」

小さな声。ミリィーだ。

「もう大丈夫みたいだから、ここ開けるね。お兄ちゃん、帰つてきたから」

待ち望んでいたその言葉。だが大丈夫だと言いながらも、ミリィーの声は少し固い。何かあったのだろうか。

男たちが先に出る。子供たちを次に出し、最後に里香子が隠し部

屋から出た。

「シユカさんは？」

「奥でまだルーパリーさんと話してゐるわ。先にご飯の支度をした方がいいかも」

何の話だろう。気になつたが、彼が帰つてきてくれたのなら、もう不安になる必要はない。

「そうね。今日は寒いから暖かいスープを作ろうかな。水を汲んでくるね」

「あ、私が行く。すごい天氣だし」

大丈夫、と里香子は水桶を持って出口へと向かった。

その日の食事は、いつも以上に賑やかだった。

ほんの少し前まで、誰もが不安をそれぞれの胸に抱いていたというのに。いや、だからこそ必要以上に陽気に振る舞つたのだろうか。それでも笑い声の響く食卓は、決して豪華ではない食事も楽しく明るいものしてくれた。

(みんなが笑い合つていれば何とかなる気がしてくるよね)

緊張して疲れただろう子どもたちを、今日は早めに休ませるようになるとミリィーに頼み、里香子は残つて後片付けをしていた。水は冷たいが、わざわざお湯を沸かそうとは思わなかつた。これくらいで音を上げていたら、冬は越せないだろつ。

食器を綺麗に洗い、少し傾いた食器棚にしまい込む。ふと机に目をやれば、一人分だけ残つている食事。

(シユカさん、まだ戻らないのかな……)

一度帰つてきたにも関わらず、彼は念の為に反対側も見てくる、と言い残してすぐに見張りに出てしまつた。帰つてきたばかりなのだから自分が行く、とルーパリーは引き留めたが、それを振り切るようにして行つてしまつたのだ。

調理室は入り口近くにあり、彼が帰つてきたらすぐにわかる。それまでここで待とうと、里香子は針仕事を持つてきて机に座つた。蠅燭の炎が隙間風に吹かれる度に、壁に広がつた影がゆらゆらと揺れる。この頼りない灯で過ごす夜にも随分慣れた。暗闇に囲まれた夜は少し怖くて、そして安らぎを感じる。こうしていると向こうで過ごしていたまるで昼間のように明るい夜が、夢の世界のようだ。そのままどれくらい時間が過ぎただろう。

机に出したままの一人分の食事はすっかり冷え切り、針仕事をする指先も震える。外を見上げると、宵闇に反するような白い羽根がふわふわと舞つていた。

「あ……。雪？」

冷たい雨は、いつしか雪に変わっていた。きっと初雪だろ？。この雪の中、彼は何をしているのだろう。ビリビリいるのだろう。たつたひとりで。

針仕事を籠にしまい、里香子は外套を取り出した。蠟燭を吹き消し、代わりにランプに灯を灯す。

何処にいるか、わからない。

けれど探さないと彼はもう戻つてこないような気がした。

里香子は外套を羽織り、ランプを手に外に出る。雪が混じる風が、その細い身体を叩きのめそうと襲いかかってくる。けれど里香子は、俯かなかつた。ただ前を見据えて、もうすっかりと馴染んだ山道を迷いのない足取りで歩いていく。

もつと雪が降ればいい、と初めて思った。

降り続ける雪に、すべてが埋もれてしまえばいい、と。

この白い雪が降り積もり、その白さで罪も消えてしまえばいい。愚かだとはわかっていても、手を伸ばさずにはいられなかつた。けれど雪は、すべてを拒絶するかのように冷たくて。

逃げるように家を出てきたのは、あれほど強く決意したにも関わらず、仲間や彼女の顔を見ることが出来なかつたからだ。

こんなにも自分は、弱かつたのだろうか。

常に先頭に立ち、どんな困難も絶対に退けてみせると戦ってきたフォスターのリーダーとしての自分は、何処に行つてしまつたのだろ？。

もしこれから先、一族よりも里香子の姿が先に思い浮かぶようなことがあれば。

不意に蘇つたのは、ルーパリーの言葉。

この言葉を聞いたのは、いつのことだつたか。

そう、確かにあの時、自分たちもまた裁かれなければならないと思つた時に浮かんだのは、里香子の笑顔だつた。

人を、誰かを愛するということは、引き替えに何かを手放すことなのか。例えば何よりも仲間を優先し、必ず守るのだと誓つた固い決意を。

もちろん仲間を大切に思う気持ちは変わらない。ただ何も知らなかつたあの頃とは違い、僅かに躊躇う気持ちが存在する。それだけだ。

もう少しだけ雪の中で頭を冷やしたら帰ろう。そう思い、空から舞い落ちる雪を見つめる。

「やつと、見つけた」

そんな中で不意に与えられた温もり。

背後からそつと抱きついてきたのは、里香子だつた。

凍えた腕に添えられた優しい手。彼女は目に涙を溜めながらも、それでも明るく笑顔を作つていた。

「よかつた、見つかって。雪はどんどん積もるし、道はわからなくなるし、どうしようかと思ったよ」

赤くなつた頬。外套の上に降り積もつた雪。どれだけの時間、この悪天候の中を彷徨つたのだろう。けれど触れた腕は、何故かとても温かくて。

言葉には出来ないこの想いがすべてわかっているかのように、寄り添つてくれる。その温もりが、どれだけ優しく心を癒してくれるのか、彼女は知つてゐるのだろうか。

そしてその優しさは、シユカの闘志を静かに蘇らせた。

そう、戦いは終わつたのではない。これから始まるのだ。一族の存続が、これから遣り取りに懸つてゐる。

仲間とそして彼女を守る為に戦つ。罪に苛まれるのは、すべてが終わった後でいい。

「里香子」

自分を抱き締める小柄な身体の、凍える背中を撫でる。

「帰ろうか。俺たちの家に」

どんなに冷たい雪が降ったとしても、手を繋げば温もりを感じることができる。その温もりが戦う意志になる。

このときには彼女が追つてくれなかつたら、ここで戦う意志を固めることができなかつた。これから来る、厳しい試練を迎へ撃つことが出来なかつたかも知れない。

3・5 湖のよつな

闇が意志を持つて動いたかのように見えた。

鬱蒼とした森の、夜の闇は深い。常人ならば手探りでしか動けないだろう暗闇の中、黒衣の魔導師がまるで光の下を歩くかのような迷いのない足取りで、歩いて行く。土の上に残された足跡が、かろうじて彼が闇そのものではなく、生身の人間だと証明していた。

昼間、太陽の光を浴びた地面は雪がそのままの姿で留まることを許さず、液体に変えてその中に吸収してしまっていた。けれど、吹く風に晒され続けた樹木は冷え切ついて、枝の間に白い雪が消えずに降り積もっている。それはシユカが配置したレリコの葉の上にも積もり、探索魔法避けとしての効果をなくしてしまう。

黒衣の魔導師は、周囲をゆっくりと見渡した。かすかに光るその掌。発動された、魔法。

「……あそこか」

そして彼はある一点の方向へ、迷わず真っ直ぐ歩いて行く。

主の命令は、山に隠れ住む民の抹殺。迅速に、そして決して証拠を残さずに実行しなければならない。

主の敵であるセリドリー・国王の傍には、あの男がいる。

他を凌駕する魔力を持つ、銀の魔導師。公爵令嬢からの連絡がな一件事情で、既に異変を感じているだろう。

一力所に集まっている人間を全滅させるには大きな魔法で薙ぎ払ってしまうのが一番確実だが、それを彼が、銀の魔導師が見過ごすことはないだろう。王都のみならず、国内ならば魔力絡みの不審な事件があれば、彼はすぐに感知する。

（さすがあの方の血を引いているだけある……）

彼の父は、偉大な魔導師だった。

彼ほど魔法という力を理解し、効率良く行使している者はいない。

今後もきっと現れないだろう。もし彼が今も健在ならば、主であるドリニティー公爵も大人しく王家に忠誠を誓っていたに違いない。主もまた魔導師であるが故に、あまりにも規格外なその力を充分に理解していた。

だがどんなに優れた力を持つていたとしても、彼はもういない。どんなに強い人間でも、死者になってしまえば生まれたばかりの赤子よりも無力だ。

ゆっくりと坂道を登る。

目的地に住む彼らもまた、無力な存在になろうとしている。

異変を感じたのは、里香子の方が先だった。

「……」

ぞくりと背筋を這うような悪寒。まるで肉食獣の鋭い瞳に射貫かれ、動けなくなる獲物のようだ。

「……どうした？」

先を行くシユカが振り返る。真っ青な顔で震えている里香子に気が付き、慌てて走り寄ってきた。

「気分が悪いのか？」

差し出した手が握った、里香子の小さな掌は震えていた。言葉を発することも出来ないその様子に、シユカは跪き里香子を支えるよう寄り添う。尋常ではない様子に座らせて休ませようとするが、彼女はまるで子どものように激しく首を振つて立ち上がりうとする。

「里香子？」

「魔導師が……。みんなが、危ない……」

途切れ途切れに伝えられた言葉。シユカは紫色の瞳を見開く。

「急がないと。間に合わなくなる……」

それだけ告げると、走り出した。

溶けた雪でぬかるんだ道。山道に慣れた者さえ足を取られる悪路

を、里香子はまるで誰かに導かれるかのようにどんどん走っていく。

シユカは重ねて問うような真似はせず、その後を追つた。

一瞬だけ、里香子の瞳が輝いたように見えたのは、気のせいだつたのだろうか。

古びた建物は、もう静かに眠りにつこうとしていた。

見張りの為に起きていたルーパリーは、里香子の姿がないことに気が付いて調理室へと向かつた。そこに残された一人分の食事。そして里香子の外套とランプがなくなっている。

「……シユカを探しに行つたのか？」

窓を開けて外を見ると、雪こそやんでいるものの、空は闇と暗雲が支配し月どころか星さえ見えない夜だ。しかも道はぬかるみ、冷たい外気は外套を羽織つっていても容赦なくその身を苛むだろう。

そんな中、シユカの身を案じて夜の闇に飛び出していったのか。ほんの少しだけ彼が羨ましく感じたのは、里香子の深い愛情に感動したからだろう。

まるで包み込むように深く愛する彼女の愛は、底のない湖のようだ。きっとどんなことがあっても、その湖は決して干上がる事はないのだろう。

ルーパリーは調理室の蠅燭に火を灯し、冷え切つて帰つてくるだろう二人の為に、暖炉に火を入れた。使つてしまつた分の薪は、明日シユカに集めさせればいいだろう。

闇に灯る赤い光を見つめながら思い出したのは、もう失われた婚約者のことだった。

非業の死を遂げたとき、彼女はまだ十一歳だった。

その時は幼くて、妹のようにしか見ることが出来なかつたけれど。生きていれば誰よりも大切に思い、愛する存在になつていただろう。

「フィーナ」

五年もの間、一度も口にすることのなかつた名前を、呴く。

「……生きていれば、お前はどんな女性になつたのだろうな」
どうして人は、叶うことのない未来を夢見てしまうのだろう。どうして叶うことないと、分かり切つているのに願うのか。
自嘲の笑みを振り切るよう、燃えさかる炎の中に薪を放り込んだ。

3・6 炎の蛇

誰かが歩いてくるような気配を感じたのは、その時だった。

里香子たちが帰ってきたのかと思ったが、足音はひとつだけ。シユカと出逢えず帰ってきたのだろうか。それともシユカが、里香子が探しに行つたと知らずに真っ直ぐに帰ってきたのか。もしシユカがひとりならば、里香子を捜しに行つた方がいいだろう。そう思い、ルーパリーは外へ出る。

だがそこに立っていたのは、闇を纏つたひとりの見慣れぬ男。その黒い服装は、魔導師のものだろうか。

「誰だ？」

問うまでもなく、溢れ出る殺氣が言葉よりも雄弁にすべてを物語つている。

それでも声を掛けたのは、中にいる仲間たちにこの異変を伝わることを願つて。まだ起きている男もいるだろう。ミリィーもいる。それは加勢を期待していたのではなく、子どもたちを裏口から逃がす為にだ。

「……強力な魔法が使えたなら、苦しまずにすんだかもしねないな。だが虐げられて生きる苦痛に比べれば一瞬だ。すぐに、楽になる……」

見張りをしていたので剣は身に付けていたが、それでもいつも使う大剣と比べると威力は落ちる。それでも素手よりはいいだろ、とルーパリーは剣を構えた。

どうせ魔導師相手に剣など通じない。それなのに何故、剣を抜くのか。

それは、意志。

戦うという、強い意志の現れだつた。

「樂になることなど、最初から望んでいない生きることが出来なかつた仲間がいる。

幼い子どもを残したまま死んでいった母親。結婚式を間近に控えていた若い乙女。

それぞれに夢見ていた未来があつただろう。彼女たちの為にも、生きなければならない。子どもたちを生かさなければならぬのだ。

この騒ぎに、ミリィーは気が付いただらうか。子どもたちを連れて行つてくれるだらうか。そして里香子とシユカは。

剣を構えながら問答するのは、時間稼ぎをする為に。だが黒衣の魔導師はルーパリーではなく、ひつそりと静まりかえつている建物に向かつて手を掲げた。その掌から炎が生まれる。建物は木造であり、川までは遠い。ほんの小さな炎が致命傷になる恐れもある。

「！」

ルーパリーは背後にある建物を庇おうと、その前に飛び出す。だがその掌から生み出されたものは、小さな炎などではなかつた。地を這う、炎を纏つた蛇。その大きさは小さな子どもの身長くらいはあるだらう。動きを止めようと剣を繰り出すが、蛇はまるで炎そのもののように実体がない。土が焼ける匂いを撒き散らしながら、炎の蛇は建物の壁を這い上がる。

「……っ」

蛇は屋根の上にまで楽々と到達し、たちまち炎は広がつた。ルーパリーは走つた。こうなつては田の前の魔導師よりも、中に入いる仲間を助けるのが先だ。

建物の中に駆け込むルーパリーの姿を見て、黒衣の魔導師は僅かに笑みを浮かべた。

「この程度ならば燃え尽きてしまえば、自然の炎と区別がつかないだらう。証拠も証人も、残らない。……これで、終わりだ」

手を振ると、炎の蛇はたちまち消え去る。だがすでに建物に燃え移つた炎は、消えることなく勢いを増していく。そしてその上から結界を張り出口を塞ぐと、黒衣の魔術師は瞳を細めて目の前の惨状

を見つめた。

目の前で剣を構えていた黒髪の男は、決意に満ちた瞳をしていた。適わないとわかっている。けれどそれで仲間を逃がす時間が作れるのなら、死ぬことも恐れないだろう。

あの瞳をしている者は厄介だ。捨て身ほど怖いものはない。だからこそ仲間を先に攻撃した。彼ならば必ず戻ると思ったからだ。そして予想通り彼は、仲間を助ける為に燃えさかる炎の中に駆け戻った。この結界は並の魔導師には破れない。まして魔法に対しても何の抵抗も持たないフォスターならば尚更だ。

後はすべてを見届けるだけ。

黒衣の魔導師は、燃え盛る炎にその身を紅に染めながら、炎がすべてを飲み込んでいく光景を表情を変えることなく見つめていた。

ふと顔を上げると、視線の先が赤に染まっていた。

それはいつか見たあの夕陽のように美しいものではなく、不吉な

昏い赤。

「ああ……」

それが何かを認識したとき、里香子は力なく地面に膝を付いていた。

焼ける木の匂い。炎はまるで天を目指すかのように高く昇つて行く。その勢いは、こんなに離れていても息苦しく感じるくらいだ。遅かつたのかもしれない。

もう立ち上がる気力もなく、その場に蹲る。燃えていく。みんなで大にきてきた家も、一生懸命蓄えた食糧も、何よりも大切な仲間さえ。炎はすべてを灰にしてしまう。

「里香子」

その時、背後から追いついたシユカの声がした。地面に倒れ伏すようにして座り込んでいる里香子に気が付き、走り寄ってくる。

「どうした？ 気分が悪いのか？」

そうして異様な気配を感じて里香子の視線の先を辿り、その惨状を目の当たりにする。

シユカは一瞬も躊躇わなかつた。

里香子をその場に残し、勢いを増す炎に駆け寄る。その前に佇んでいる魔導師の存在には気が付かず。

仲間を、妹の名を呼びながらほとんど焼け落ちた扉に手を掛けた。炎は新たな獲物も燃やし尽くそうと、その手を更に伸ばしていく。仲間の安否に気を取られているシユカは、肌を焼く炎にも構わずに扉を強引に押し開けようとする。けれど魔法で封じられている扉は、どんなに力を込めても動かなかつた。

3・7 銀の光

荒れ狂う暴君と化した炎は、シユカにも襲いかかる。焼け落ちて崩れる柱。その姿が、紅に飲まれて見えなくなってしまう。

「いやあっ」

あまりの惨劇に思考さえ凍てついたかのように蹲つたままだった里香子は、それを見て悲鳴を上げた。彼の名を呼び続けながら、自らも炎の中に飛び込まんばかりに走り寄る。

「……女か？ もうひとりいたようだな」

その悲鳴は静かにそれを見守っていた黒衣の魔導師に、彼女の存在を気付かせてしまう。彼は視線を声の聞こえた方へと向け、走り寄る小柄な黒髪の女性を見つけた。

最後のひとりだ。

手を掲げる。そこに宿るのは、炎の蛇。赤い光が里香子を照らし出す。

その背に向けて、炎が迸った。

紅蓮は彼女も飲み込み、すべてが終わる。その筈だった。
けれど。

不意に、黒と赤に彩られていた世界に光が射した。

それは銀の眩い光。その光に守られた里香子が、ゆっくりと振り返る。

「……何だと？」

黒衣の魔導師の瞳に、初めて動搖の色が浮かんだ。

彼女に触れた途端、炎の蛇はまるで彫刻になつたかのように、燃え盛る炎の形すら残したままで凍りついた。光はどんどんと強くなり、まるで真昼のよう。里香子の身に宿る光は、やがて弾けるかのように、霧散した。

里香子は、ゆっくりと瞳を開いた。眩い光は消えても、銀はまだ煌めいている。

両手を見つめた。自分の記憶にあったよりも、白くて細い手。「シユカさん。助けなきや……」

唇から溢れ出た声も、聞き慣れた自分の声とは違っていた。心地良く響く、高くて綺麗なソプラノの声。里香子は首を傾げる。肩にさらりと流れた銀は、腰まで長く伸びた美しい銀の髪だった。

彼女はまだ知らない。

その姿がすっかり変わってしまったことに。

銀細工の女神像のような美しい姿は、この世界で生まれる筈だった自分の、本来の姿であることを。そして身体の中から溢れ出てくるこの力が、この国に名を残す偉大な魔導師であった本来の父親から、受け継がれた魔力であることも。

それはどちらも生まれる前に掛けられた呪術で、封じられていたものだった。

それを里香子は愛する人と仲間を助けたいと心から切望し、その強い意志の力で呪術を自ら解呪したのだ。

けれどまだ今は何も知らず、けれど知らないまま、シユカを助けようとした。

彼女には見えていた。

炎の中に倒れ伏すシユカの姿。そして、建物の中で身を寄せ合つて苦しむ仲間たちの姿が。

「今、助けに行くから。待っていて」

里香子は燃え盛る炎を見つめる。

ただそれだけで、狂ったように燃えていた炎は、まるで幻だったかのように一瞬で消え失せた。銀の美しい髪を靡かせて、里香子は走る。

「シユカさん」

その白い手足が、綿のように美しい髪が炭で汚れることも厭わず、

里香子は倒れていたシユカを抱き上げる。愛しげにその頬に触れる
と、痛々しい火傷の痕が跡形もなく消え去った。最初から存在して
いなかつたかのように、完璧に。それと同時に、建物の中にいた仲
間たちも安全な場所に移動させていた。もちろん彼らの怪我もひと
つ残らず消え去っている。

「馬鹿な。こんなことが、出来る筈が……」

目の前で繰り広げられた奇跡に、そして突然姿を変えたその女性
の持つ、あまりにも圧倒的な魔力に、黒衣の魔導師は途切れ途切れ
の言葉を発すことしか出来なかつた。有り得ない。彼の頭はただ
その一言で埋め尽くされてしまつ。

こんなに凄まじい魔力は、見たことがない。彼女が言葉を発する
度に、空気まで震えるかのようだ。国一番の魔導師と言われている
王の側近、銀の魔導師イドをも凌ぐだろう。

「銀の魔導師……。そうか、お前が」

確かにその纖細で美しい容貌は、彼によく似ている。

あのイドの父親でもある偉大な魔導師の血を引き、前王の妹を母
に持つ。

カインサーの母親が予言した、彼の運命の女性。

「君還は失敗したと聞いていたが……。まさかこんな所にいたとは
な。確かにその力を手に入れれば、大陸など容易に支配出来るだろ
う」

それだけの力を、彼女はその美しい身体の中に秘めている。

皮肉にもドリニティー公爵の下した命令が、この国に紛れていた
この女性を見つけ出してしまつた。これだけ強い魔力を抑えもせず
に放つてゐるのだ。銀の魔導師はすぐにここに来て、そして彼女を
見つけるだろう。

そしてあつさりと決着が付くことはないかもしれないが、この女
性を手にした国王に彼が適うことはないだろう。

ドリー・ティー公爵の命運はもづ、ひぬでいる。

沈むとわかりきつてゐる船に乗り続ける程、彼に忠誠を誓つてい
る訳ではなかつた。幸い、彼女の意識は仲間たちに向いてい
る。

黒衣の魔導師は闇にその姿を同化させ、そしてゆっくりと消えて
いった。

何かが割れる音がした。

誰かが慌てて駆け寄る音。何かを指示する声。色々な音が周囲で響いていたが、何ひとつ頭の中には入らなかつた。

(……これは。この魔力は)

イドは、真夜中近くまでカインサーの私室にいた。

今までのこと、そしてこれからのこと。

何度も繰り返し語り合い、戦う意志と準備を重ねていたのだ。
どんな時に感じ取つたのは、あまりにも大きな、大きすぎる魔力。
これほどの力を持つた者が、自分の父以外にこの世界に存在したのだろうか。

だが、彼女ならば。

真っ先に浮かんだのは、この世界に還した筈のあの女性。それは次第に疑念から確信に変わつていぐ。

見つけたのだ。ようやく。

「イド」

身近で呼ばれた名前。腕を引かれて、ようやく視線を隣に向かた。
カインサーだつた。

「どうした？ 大丈夫か？」

見れば割れたのは持つていたカップだつたようだ。纖細な紋様を描いていた美しい陶器が、足下で粉々になつてゐる。

「すまない」

大きな破片をひとつ拾い上げると、左手を掲げる。淡い光が割れていた陶器をたちまち元の姿に戻した。後片付けをしようと駆けつけてきた侍女は、その様子に感嘆したように声を上げる。

「カインサー」

イドは立ち上がつた。

「少しう掛けてくる。お前の運命を見つけたかも知れない」

その言葉の意味を即座に理解したカインサーは、一瞬複雑な表情を浮かべる。その脳裏を過ぎたのは、公爵令嬢シアの言葉なのだろうか。

だが彼は即座に頷いた。

「わかった。気を付けろよ」

「ああ」

瞳を閉じてその魔力を感じ、そして迷うことなくその場所へ移動する。

暗闇の中、焼け焦げた木の匂いがした。

視線を巡らせると、無残に燃え尽きた建物が目に入る。山の中だろうか。随分と森が深いようを感じる。その周りに座り込んでいる複数の人間。疲れ切った様子で互いに抱き合いながら、戸惑った視線をある一点に向けている。その視線の先を辿った。

イドはそこにとづとづ、探し求めていた女性の姿を見つけ出す。

召還してからの期間だけではない。

父の遺した魔法書でその存在を知つてから、ずっと探し続けてきた。

何事もなく無事にこの世界に生まれれば、彼女は自分のたつたひとりの妹になる筈だったのだから。父と、そして自分とも同じ長い銀色の髪。深い海のようなダークブルーの瞳は、記憶に残る母の優しい眼差しと同じ色をしている。

「エリセール……」

思わず言葉にしたのは、父が母と相談して決めたという、生ましてくれる子どもの名前。本当に心から、その誕生を待ち望んでいたのだろう。

「！」

その声が聞こえたのだろう。

彼女は銀色の髪を揺らして、不安そうに周囲を見渡す。その細い

腕には、意識のない誰かを抱いていた。怯えるよう、それでも守るよう腕の中の身体を抱き締める。

ふと、その仕種に不安を感じた。

彼女をこの世界に召還してから、短くない時間が経つてしまっている。その間に他の誰かを愛してしまっている可能性もあるのかもしれない、と。

「ぐ……。また魔導師か？」

建物の前に立ち尽くしていた者のひとりがこちらに気が付き、警戒心を剥き出しにして仲間を庇つよつて前に出た。背の高い黒髪の男だった。

(……黒髪?)

そしてようやく気が付く。ここにいた者たちは、全員が黒い髪をしていたことに。彼らはフォスターに間違いないだろう。

焼け落ちた建物。

そして彼の言葉。

イドは意識を集中させ、その場に残る魔力の残滓を探った。彼女から感じる魔力があまりにも大きすぎて容易ではなかつたが、かすかに炎の魔力を感じることが出来る。彼らの住処が魔導師によって焼き払われたのは間違いないだろう。

「ここは……。ドレー・ティー公爵の領地、か」

更に意識を飛ばし、高い空からこの地形を見渡す。ドレー・ティー公爵もまた、力を持つ魔導師のひとり。彼女の強すぎる魔力を感じ取つただろう。その姿を彼に見られる前に、この場から移動しなければならない。

そして恐らくフォスターを襲撃させたのもドレー・ティー公爵だろう。彼らの存在が自らの地位を危うくすると、どうやって知つたのか。シアが彼に話すとは思わなかつたが、思わず場所にスパイがいる可能性もある。だとしたら彼女も危険かもしない。あるいはもう危機に陥っている可能性もある。

ようやく会ったことが出来た妹と、協力者であるシア。そして証言者である彼らフォスターも、守らなければならぬ。

詳しい説明をしている時間はなかつた。

「この場所は危険だ」

全部で何人いるだろう。イドはもう一度、周囲を見渡す。複数の人間を同時に転移させるには、かなりの魔力を使う。回復しきつていない今の身体で、それを成功させることが出来るだろうか。けれど今は、手段を選んでいる余裕はなかつた。

「後で説明をする。すまないが、全員を移動させて貰う」

両手を広げる。妨害魔法はまだないようだ。イドは瞳を閉じて魔力を高めた。

3・9 眠れない夜

何処に移動するのが一番安全か。

カインサーは待つてゐるだろつ。けれど残念ながら王宮は、決して安全な場所ではない。

ここからも王宮からも遠く、妹にも彼らにも安全な場所が必要だつた。

「……大丈夫だから」

不安に震えている幼い少女に、イドは微笑みかけた。こんなにも幼い少女が怯えなければならないのが、今のこの国の状況。変えなければならない。この国は生まれ変わらなければならないのだ。

固い決意が、足りない体力を補う。光が暗闇を照らし、彼らの姿はその光に溶け込むようにして消えた。

その光があまりにも眩しくて、里香子はシユカを抱き締めたまま瞳を瞑つていた。

けれどあの炎のような恐ろしさは感じない。ただ暖かく、包み込むように優しい光。

突然目の前に現れた銀髪の魔導師は、里香子とシユカ、そしてフォスターたちも全員どこかへ移動させたようだ。

周囲を見渡すと、こんな季節にも関わらず美しい花が咲いているのが見えた。肌を撫でる風も暖かく感じる。どうやらここは美しい庭園の中のようだ。秋の少し寂しげな色の花が整然と並べられている。その手入れの行き届いた様子、そして豪華な噴水まで見える様子から、かなり高級な庭であることが感じられる。

その中にルーパリーやミリィーの姿も見えた。その無事な様子に、心から安堵する。

「何とか、無事に着いた、かな」

銀髪の魔導師はそう呟いた。額には汗が浮かんでいる。蒼白な顔色から察するに、相当の魔力を使ったのだろう。

「……あなたは」

自分の発する声に戸惑いながらも、里香子は彼を見つめた。

「あなたは、誰？　ここは何処なの？」

彼はどうやらただの魔導師ではなさそうだった。

銀色の髪に映える朱色のローブを纏い、整った綺麗な顔立ちは気品を感じさせた。身分の高い人間なのかもしれない。

「それに私のこの姿。どうして変わっちゃったの？　何かの魔法？」

焦燥から、里香子は質問を重ねる。触れてみた髪はいつのまにか腰に届くまで長く、色は彼と同じような銀色だった。声も変わって

いる。この姿をシユカが見たらどう思つだろ？

「俺は君たちの敵ではない。それだけは、わかつて欲しい。最初からすべて説明するよ」

そんな里香子を宥めるかのように、彼は優しく告げた。その視線が里香子からフォスターたちへと移る。それを受け、警戒をあらわしていたルーパリーは、仲間たちを庇うようにしながら鋭い視線で彼を見つめ返す。

「それを、信じろ、と？」

彼が魔導師でなかつたら、ここまで警戒することはなかつたかもしれない。けれど彼らにしてみれば、魔導師に仲間を攻撃されたのは今日が初めてではない。五年前は多くの仲間を、そして今日はすべての仲間を失うところだったのだ。

その様子に、まずは彼らの警戒心を解くことが先だとイドは悟る。「君たちを襲つた者と俺は、敵対する立場にある。俺たちの目的は

……

「……シアという女性から、聞いた」

けれどその時、目を覚ましたらしいシユカがゆっくりと身体を起こした。

イドは突然出てきたその名前に驚きながらも、黙つてその話に耳

を傾ける。もし彼が事情を知っているのならば、仲間である彼から説明して貰つた方が彼らも納得出来るだらう。

シユカは視線をイードに、そしてルーパリーへと向け、それから最後に自分を抱き締めていた里香子を見つめる。その紫色の瞳が、その後変わつてしまつた姿を見て僅かに驚愕の色を浮かべた。けれど彼は今はその姿について質問をすることはなく、目を見ましたことに安堵して泣き出しそうなその頬を優しく撫でる。

「五年前、俺たちの仲間を殺した男は自分の父だと言つていた。そして、フォスターの友がいたと。彼女の仇を取るために、この国の在り方を変える為に力を貸して欲しい。そう言われた。その魔導師はきっと、あの女性の仲間なのだらう」

「シユカ、お前いつのまに……」

驚くルーパリーに黙つていたことを小さく謝罪し、シユカは懐から預かっていた形見を取り出し、彼に手渡した。

「彼女は嘘を言つてているようには見えなかつた。これを覚えているか？」

それを受け取つた彼の顔が、たちまち強張る。

「忘れる筈が、ないだろう。俺がこれを忘れる筈が」

唇を噛み締めてそう言つたルーパリーの声は弱々しく震えていた。

「あの日の前日、これをしていなかつたフィーナに尋ねたら、一日だけ友人に貸したのだと、そう言われた。それがお前が会つたという女性なのか？」

シユカは頷く。

「きっとその話を、ドレーニティーの手の者が聞いていたのだらう。身の危険を感じて君たちを魔導師に抹殺させようとした、と考えられる」

イードがそれに続けた。

「だとしたら、シアは父によつて幽閉されている恐れもある。助け出さなければならぬだらう。

完全に信じ切つている訳ではないだらうが、どうやら彼が敵では

ないらしいと伝わったのだろう。それを感じ取り、イドは続ける。

「俺の知る限りの事情は、すべて説明する。それにこちらから聞きたいことも多少ある。けれどその前に子どもたちを休ませた方がいい。まだ朝までは時間がある。この先の建物で休んでくれ。あそこには誰もいない」

里香子のお陰で怪我人は誰もいなかつたが、疲労だけはどうにも出来ない。特に少女たちはもう限界のようだつた。

話し合い、シユカとルーパリー、そして里香子の三人以外は、そこで休ませて貰うことにして。ミリィーは残りたがつたが、誰かは子どもたちの面倒を見なければならぬ。シユカは里香子も休むようになつたが、承知しなかつた。

この姿で、この状況で何もわからないまま眠ることは出来そうになかつた。

小さな建物と彼は言つたが、そこは充分に広くて美しい建物だつた。

一階建ての白い建物は、周りをぐるりと美しい庭園に囲まれている。これほど広大でも、中にも外にも人の気配はまったくなかつた。これほどの大きさにも関わらず、使用人もいないようだ。けれどその方が安心かもしれない。

それでもほんの少し警戒しながら、その中に入る。

魔導師である彼のものにしては、自然の光が充分に入るよう工夫された空間である。そして広間から、あの庭園が見渡せた。夜の月に反射して輝く噴水の水の美しさに、里香子はしばし目を奪われる。

一階には複数の寝室があるらしく、ミリィーたちはそちらへ向かつた。

銀の魔導師に案内され、里香子たちは一階にあるひとつの中に入れる。足を踏み入れると、暗い部屋にまるで電気をつけたかのような明かりが灯る。きっと彼の魔法なのだろう。蠟燭とは違い、その光は部屋の隅々まで昼間のように明るく照らしていた。

その明かりの中で、里香子は部屋を見渡す。広くゆったりとした部屋で、家具のようなものはまったくない。だが柱や窓枠などには見事な彫刻が施され、中央には座り心地の良さそうな椅子とテーブルが置いてあつた。十人くらいは座れそうな大きな物だ。促され、里香子を中心にして両脇にシュカ、ルーパリーが座る。彼はちょうど三人の向かい側、里香子の真正面に座つた。

「名乗るのが遅くなつてしまつたが、俺はイド。セリドリー＝国王力インサーの側近だ」

そしてイドと名乗つた銀の魔導師は、視線を里香子に向ける。「私は里香子です」

視線を受け、里香子は軽く頭を下げた。

「えつとこっちが、シユカとルーパリーです」

ルーパリーは俯いたまま、婚約者の形見だというネックレスを握り締めている。シユカは静かな瞳をして、イドを見つめていた。

「里香子」

不意に名前を呼ばれ、驚いて正面を見る。イドの翡翠のような瞳が、真っ直ぐに里香子を見つめていた。真摯なその瞳に、思わず身を固くする。衝撃的なことを言われるような予感があつたのかもしれない。

「君を、この世界に呼び出したのは俺だ」

「え……」

だがそれは、想像以上の言葉だった。

どこから話せばいいか、トイドは少し躊躇いを見せる。里香子はただ言葉もなく彼を見つめた。

(この人が、私をこの世界に召還したといつの？)

何の目的があつてそうしたのだろう。この変わり果てた姿も、彼がやつたのだろうか。疑問は次々に沸いてくるが、何ひとつ言葉にすることが出来ない。

恐らく元の姿のままならば、ここまで動搖しなかつたかも知れない。何を聞かされても隣にはシユカがいるし、仲間たちもいるのだから。そう信じていた。けれどこんなに変わり果てた姿では、それも難しいかも知れない。

自分の身に何が起こったのか。これからどうなつてしまつのか。不安に蝕まれ、俯いた瞳には涙が滲む。

ひとりきりになつても戦えるのだろうか。この見知らぬ世界で。けれど。

「大丈夫か？」

耳元で小さく囁かれた声。顔を上げると、隣にいたシユカがいつも変わらない優しい瞳で里香子を見つめていた。励ますように背に置かれた手は、とても温かい。

今までのようにならに傍に居てくれるのだろうか。もう自分は、彼の大
切なフォスターではなくなってしまったといったのに。

でも、そうだとしたら。

シユカの紫色の瞳を見つめて頷き、里香子は真っ直ぐに前を向いた。

「そうだとしたら、どんな過酷な運命が待ち受けっていても、きっと
戦える。

どんな話でも受け止めるつもりだった。
だから尋ねる。話の続きを促すために。

「どうして私を？」

イドは田の前の光景に、複雑な思いを抱く。

里香子の不安そうな様子は、傍にいた彼のほんの少しの慰めで簡単に吹き飛んだ。それどころか、今は何処か決意を感じさせる瞳をしている。

二人の親密さは、見ているだけで伝わった。けれど彼女の運命の相手はカインサーなのだ。彼と出逢った時、彼女は変わらうか。それとも一度定まつたその心は、決して変わることはないのだろうか。

運命とは、いったい何なのだろう。誰が決めたものなのだろう。
けれど今は、それ答えを出すことは誰にも出来ない。イドは迷いを振り切るかのように、彼女に向き直る。

「君はこの世界に生まれる筈だったんだ。それを生まれる前に呪術をかけられ、遠い異世界に飛ばされてしまった。君の父親は、そんな君を呼び戻そうとして召還のための魔法を研究していて。それを俺が受け継ぎ、実行したというのが理由だ」

「……私が、この世界、に？」

藍色の瞳を見開いて、彼女は傍に寄り添う男性を見上げる。

「私は元々この世界の人間、だったの？ どうして呪術なんて」

「……」

すべてを話すと、約束した。だが寄り添い合つ一人を目の前にして、どうして前王妃の遺言をこの場で伝えることは出来るだろつ。やつと呪つじが出来た、たつたひとりの妹。その顔が曇るのは、やはりつらい。けれど。

(カインサー……)

主であり、大切な友でもあるカインサー。孤独に戦い続けるその姿が思い浮かび、同時に罪悪感が沸き起る。これでは彼の為ではなく自分の為に、生き別れた妹を捜し出す為にその命令を利用して召還をしたことになつてしまふ。

「現王カインサーの生母である前王妃が、ある予言を遺した。その予言のせいで、君は呪術をかけられ、この世界から追われたんだ」

3・11 それぞれの夜（1）

随分長い間、話を聞いていたようだ。

あてがわれた部屋の片隅で、里香子は柔らかなベッドに腰を掛け、ぼんやりと窓の外を見ていた。

今日は疲れそうになかった。

夜明けにはまだ早いが、それでも外の景色は少しづつ明るくなっている。薄暗い光の下に見える、手入れが行き届いた美しい庭を見つめる。

この建物は、里香子の母であつた女性が気に入つて住んでいた場所だとイドは言っていた。だから好きに使ってよいと。けれど彼が何故、この場所を管理していたのだろう。もうすでに亡くなつてしまっていた両親という人たちと、彼も何か関わりがあるのだろうか。

「まさか、私がね……」

鏡に映つた姿を見て、溜息を付く。どれほど強く決意を固めても、長い話の末に語られた事実の前には無力だった。銀色の長い髪に縁取られた、綺麗すぎる顔。何度見ても、まったく見知らぬ他人が映つているとしか考えることが出来なかつた。けれどこれが本当の自分の姿だと彼は言つ。この姿と魔法の力を、呪術によつて封じられていたのだと。確かにこの姿になつてから、この世界をもつと身近に感じていた。魔法という力も、恐らく使おうと思えば自在に使えるだろう。けれど里香子は、それはもう一度と使うまいと決意していた。

今の自分が消えてしまうような気がして。

日本で二十年間暮らしてきた自分は何だつたのだろう。この世界に来てからも、フォスターの人たちと出会い、シユカを愛してきた自分は、何処へ行くのだろう。例え魂は同じでも、姿が変わつてしまつたように少しずつ意識も変化していくのではないだろうか。そういう思つとともに恐ろしかった。

「こんなのは、嫌……。元の姿に戻してよ……」

鏡を乱暴にベッドの上に放り投げ、両手で顔を覆う。

あまりにも美しすぎる姿も、世界を掌中出来るほどの大な力も、王族のひとりという高貴な身分も、何ひとつ欲しくなどなかつた。

運命の相手だと言われた、カインサーといつこの国の王もきっと立派な人物なのだろう。

フォスターの協力によつて敵を排除することが出来たのなら、もうどんな人も犯罪を犯さなければ生きていけないような国にはしないと彼は約束してくれたという。今までフォスターが犯してきた罪に対しても、そうしなければ生きていけない状況だったこと、そして死者はひとりもいなかつたことを配慮して、そうするべき状況を作つてしまつた國の責任とする。被害のあつた村には最大限の保障をするとイドは告げた。里香子を最初に保護してくれたあの村も、それで冬を越すことが出来るだろう。それに対してはとても感謝していた。きっと彼は崇高な志を持つている賢王なのだろう。だからこそ、正義の為の力を欲したのだろうか。

けれど彼の傍で王妃となつて生きるよりも、あの山で苦労しながらも互いに助けて合つて、シユカと一緒に生きていたかったのに。それももう、叶わない夢なのだろうか。

頬を伝う涙すら厭わしくて、里香子はそのまま瞳を閉じた。何も見えないように。

里香子がほんの少し前まで見つめていた庭園で、シユカはひとり、月を見上げていた。

空が明るくなるにつれて、月は少しづつその存在感を失っていく。

誰もいない夜の庭園に、噴水の水音だけが響き渡つていた。少し

長い黒髪を揺らす風は、こんな時期にも関わらず冷たくはない。魔法という移動手段を持たないフォスターの行動範囲は狭い。同じ国の中でもこんなに違うものだと、初めて知った。薄紫の花びらが風に舞い、噴水に落ちる。水の流れに飲まれて浮いたり沈んだりするそれを、指を水に浸して掬い取った。

長い一日だつた。

里香子が居てくれなかつたら、こうして月を見上げている自分はもうなかつただろう。魔法はいつも理不尽なほど強い力で、すべてを奪い去る。それに対抗する術を持たない自分たちは、この大陸では永遠に弱者のままなのだろうか。

噴水の中央に飾られている彫刻が月の光で銀色に輝き、その色は里香子を思い出させた。

あれほど美しい女性は、見たことがなかつた。人間とはあそこまでの美を造り出せるのだろうか。封印されていたといふ、その姿と力。解放したのは、自分たちを助けたいと強く願つてくれたからだとわかつてゐる。それに彼女が異世界から来たということも、フォスターではないといふこともシユカは既に知つていた。だから里香子の姿が変わつたとしても、たいした問題ではなかつた。どんな姿になつたとしても里香子は里香子であり、その魂は変わらない。そしてどんなに一人を取り巻く状況が変わつても身分という差がついても、彼女の心が変わらない限り、愛する心にも変わりはない。

ただひとつ、気になつたのは運命の相手だといふ、この国の王。生まれる前から定められた、運命の伴侶。それはきっとフォスターの、魂の共有者に相当するものなのかもしれない。

フォスターに関して言えば、魂の共有者がいる相手を愛するのは禁忌だつた。例え結ばれなくとも、愛するだけで一族から追放される厳しい掟。イドという銀髪の魔導師の話を聞き終えた時、ルーパーも少し慰めるような口調でこう言つてゐた。

運命の相手が既にいるのなら、仕方ないな。

「仕方ない、か」

聞く者のいない咳きに宿る、憤り。

このまま運命だという言葉で彼女を諦めれば、すべて収まるのだろうか。王に協力すれば仲間の仇を取ることも出来る。今よりも生活は穏やかになるだろう。ならば今まで通り一族を守り、生涯その守護者としてこれからも生きていいくのだろうか。今まで一度も疑問に思ったことのない人生。

けれどそれを選んだ時、もう隣に里香子の姿はないだろう。それを使うとき、世界のすべてが色を失う。こんなにも深く彼女を愛していたのだと、今更ながら思い知る。

運命に、どれほどの力があるというのだろう。

フォスターであることよりも、彼女を愛したいといつここの気持ちすら、変えることが出来ないといつのに。これからは今までよりも穏やかに暮らせるとはいえ、何よりも大切にしてきた仲間たちを裏切る行為かもしれないといつのに、抑えられない。こんなに激しい思いが自分の中に宿っていたのだ。

一族か、彼女か。今問われれば、きっと迷わず答えるだろう。

3・12 それぞれの夜（2）

シユカは立ち上がった。

静まりかえつて建物の中に、灯りのついている部屋がふたつ。ひとつは里香子が向かつた部屋だ。今日一日だけであまりにも多くの出来事が、まるで嵐のように襲いかかってきた。きっと眠れずに過ごしているのだろう。

真っ直ぐに、その部屋の庭園に面している窓へ向かつた。

「……里香子？」

窓は開いたままだつた。高級そうなカーテンが、やんわりと吹く風に煽られて舞つている。それに手をかけて払うと、部屋の中の様子が見えた。そこは大きな鏡や衣装棚、そして化粧台などが置いてあり、元々女性のために作られている部屋のようだ。すべて白で統一されていて、花の彫刻が施されている。奥にはレースのカーテンで仕切られた大きなベッド。そこに、里香子の姿があつた。

俯き、両手で額を覆つてゐる。震える小さな肩。かすかに聞こえる嗚咽。投げ捨てたかのように、乱暴に置かれた鏡。世界に絶望したかのような痛ましい姿に、思わず窓から部屋の中に入る。

「里香子」

レースのカーテンを押しやり、震えている肩に手を掛ける。びくりと身体を震わせた里香子は、それがシユカであると悟ると、その胸の中に飛び込んできた。

「シユカさん……シユカさん……」

泣きながら自分の名前を繰り返し呼ぶその姿に、心が痛む。

生まれ育つた世界から突然呼び出され、事情はあつたとしても何もわからないまま放置されていた。そしてフォスターと同じ姿をしていましたばかりに、人里離れた山奥で隠れ住まなければならなくなつた。育つてきた場所とは違う世界で、何故この世界に来たのかもわからないます。

苦労しただらう。つらいこともあつたに違ひない。けれど里香子はいつも笑顔で、健気に頑張っていた。

そんな彼女に、運命は更に重荷を背負わせようとしているのか。細い背中に、腕を回す。力を込めたら壊してしまうそうな気がして、優しく抱き締めた。

「私、こんな姿は嫌……。呪術だなんて言われても、私は今まで一

十年間、あの姿で生きてきたのよ。みんなと一緒にの方がよかつた…」

抱き締められ、その腕から伝わる温もりに少し安心したのだろうか。里香子は感情のままに言葉を紡ぐ。溢れる涙を拭おうともせずに。

「どんな姿になつても、里香子は里香子だ」

腕にさらりと流れる銀の髪に触れる。馴染みのない色。けれどとても綺麗だと思った。

「本当に？ 私のこと嫌いになつたりしない？」

「ああ」

「……姿が変わつてしまつたように、心まで変わつてしまつかもしない。私が、里香子が消えてなくなつてしまつよつて、怖い……。ここにいるのが、怖いの」

里香子、と小さくその名前を呼ぶ。流れる涙をそつと拭つた。

「もし五年前の事件の犯人が裁かれすべてが終わつたら。海を越えて他の国に行つてみようか。ふたりで、誰も知らないところへ」運命が追いかけてこないくらい、遠い場所へ。

彼女が元のように笑えるように。

「でも、いいの？ みんなと離れて……」

シユカがどれくらい仲間を大切にしていたか知つてゐる里香子は、喜ぶよりも心配そうに彼を見る。

自分の幸せよりも、相手を思いやる。それが里香子といつ女性。彼女は何も変わってなどいない。

「王があの男に勝つことが出来れば、俺たちの生活もかなり変わる

だろう。そうすればもう、俺がいなくても大丈夫だ」

そしてそれは、初めて自ら望んだ未来。

本当に、いいの？ と言つ里香子の小さな呟きに、頷く。

「他の国には、もしかしたら黒髪の人がいっぱいいるかもね。私の育つた国では、みんな黒髪だったのよ」

「そうなのか。……そうだな、他にもいるかもしれないな」

そのためには、まず王と協力してあの男に勝たなければならぬ。「私も、何が出来るかもわからないけど頑張る。今を乗り越えたら、幸せになれるってわかったから」

嬉しそうに笑う里香子。蘇った微笑みに、安堵を覚える。これからはずっと、この笑顔を守りながら生きていく。

「朝にはまだ遠い。少し、休んだ方がいい」

封印を打ち破り、秘められていた力を駆使したのだ。きっと身体も疲れているだろう。銀色の髪を優しく撫でて促すと、彼女は素直にそれに従つた。

「……傍に居てくれる？」

「ああ。ずっとここにいる」

子どものように手を繋ぎ、里香子は瞳を閉じた。その白く小さな手を握りながら、シユカは窓から空を見上げた。

白く輝く月の光に、何故か不安を覚える。

里香子はきっともう大丈夫だ。笑うことが出来たのだから。仲間たちにも、これからはつらいことばかりではないに違いない。

それなのに、心の底から沸き上がるようなこの焦燥は何なのだろう。

不吉な予感を振り払うように首を振り、里香子の手を握った。色々なことがありすぎて、自分も少し疲れているのかもしれない。

3・13 それぞれの夜（3）

美しく磨かれた石を敷き詰めた床に、月の光に照らされた自分の姿が映り込んでいる。ゆっくりと音を立てないように廊下を歩いていたルーパリーは、人影に気が付いて足を止めた。

「ミリィー？ どうした？ 眠れないのか？」

廊下に面している大きな窓の傍に佇んでいたのは、シユカの妹のミリィーだった。

「子どもたちは？」

「大丈夫。みんなぐつすり眠っているわ。悪い夢も見ていないみたい」

あの子たちは心配いらないから、ヒミリィーは笑う。あれだけ恐ろしい目に遭つたというのに、子どもたちは騒がなかつた。それに寝室を包んでいた優しい空気。まるで誰かに守られているように感じたのは気のせいなのだろうか。

「あんまり豪華な部屋だから、何だか寝付けなくて。本当にここは綺麗ね。何だか落ち着かない」

ちよつと居心地が悪いかも、と彼女は苦笑する。

「お話は終わつたの？」

ああ、とルーパリーは頷き、ミリィーの隣に並んでそこから見る美しい庭園を見つめた。

「……色々とありすぎて、何から話したらいいかわからないな」

幻想的な月の光に照らされる花。その美しさに、まるで夢を見ているかのような錯覚を覚える。あの火事で死んでしまった自分が、死の間際に見ている夢なのではないかと。

夢の中を漂つていてるよつた意識を引き戻したのは、すこし思い詰めたかのようなミリィーの言葉。

「じゃあ聞きたいこと、質問してもいい？ 話せないことなら、無理に聞いたりしないから」

「わかった」

ミリィーは何から聞けばいいのか迷つかのよつこ、一瞬だけ沈黙した。

「里香子さんは、今何処に？」

最初に尋ねたのは、彼のこと。

変わつてしまつたその姿を見たときは、ルーパリーも本当に驚いた。けれど里香子はその力でみんなを助けてくれたのだ。だから感謝していたし、彼女も自分の運命をまったく知らなかつたのだから。「別室にいる。かなり動搖していたから、今夜はひとりになりたいんだろ？」「うう」

衝撃の事実だつた。彼女はフオスターではなかつたのだ。それどころか、かなり身分の高い女性だつたらしい。
まるで出逢つてからのが、すべて幻となつて消えてしまつたかのような寂しさを覚えてしまつ。シユカもどれだけ衝撃を受けただろう。

「お兄ちゃんは？」

「シユカは、少し外の風に当たつてくると言つていた」

仕方ないと、そう口にした時の彼の様子を思い出す。あの瞳があれほど強い光を放つているのを見たのは、初めてだつた。きっと彼は何かを強く決意したのだ。それが何かは、なんとなくわかるような気がしていただ。

「里香子さんが助けに来てくれたとき、私は女神さまかと思つたわ。私たちを哀れんで、天から降りて来て下さつた女神さまかと」
それだけ神々しく美しかつた彼女の姿。そしてその偉大な力で、死ぬ運命から自分たちを助けてくれた。

「きつとそうなのよ。里香子さんは私たちを助けるために、ここに来てくれたんだわ」

まるで祈るように両手を組み合わせ、ミリィーは瞳を閉じる。

「女神……か」

確かに彼女が来てから、良い出来事ばかりが続いている。そして

これからもきっとそうだろう。もし彼らの作戦が上手く行けば、もう隠れ住む必要もなくなるのだ。どれだけその日が来るのを待ち望んだだろう。このきっかけを作ってくれたのは、里香子だ。

「確かにそうかもしれないな」

頷く。

けれど思ひ。果たして彼女自身は、幸せなのだろうか。

まだ朝は来ないのだろうか。

イドはゆっくりと握り締めていた掌を開く。随分力を込めて握っていたのだろう。指の関節が軋むように痛む。疲労した身体には頬にかかる髪さえ厭わしく、銀色の髪を乱暴に背後へ払つた。

夢魔を寄せ付けないように守護魔法を発動させていたのは、フォスターの少女たちのためだ。火に包まれ、どれほど恐ろしい目に遭つただろう。夢の中まで苦しまなくともいいよに、イドは静かに祈つていた。けれど普段ならば無意識に作動することが出来る簡単な魔法でも、今の状態では多少の苦痛を伴う。体力がなかなか回復しないことに、少し苛立ちを感じていた。

もしかしたらこのまま回復しないのではないか。

父の最期の様子を思い出し、不安よりも焦燥が沸き上がる。

まだカインサーの戦いは始まつたばかり。彼の本当の味方は自分しかいないのだ。孤独な王を遺して死ぬ訳にはいかない。

そしてようやく会うことが出来た、里香子と名乗った妹。

前王妃の予言がなかつたとしても、彼女にはカインサーの傍にいて欲しかった。

王宮にいる時でさえ緊張を強いられる彼の、安らぎになつてくれたらと願つていた。そうなれば、自分がいなくなつたとしても何の不安もなかつたというのに。

もし確実に召還を成功させいたら、彼女はフォスターと出逢う

こともなく、あの紫色の瞳をしたフォスターと親しくなることもなかつた。

自分の未熟さが、運命を狂わせてしまつたのかもしれない。

けれどまだ彼女は、一度も運命の相手であるカインサーに会つていない。会えばお互いに引き寄せられるのではないか。そつなつて欲しい。

祈るよつた気持ちで、イドは瞳を閉じた。
もうすぐ朝が来る。

そうしたら、カインサーに報告に行つ。

運命の女性とフォスターを保護したこと。そしてゾコーニティー公爵が娘であるシアを監禁し、フォスターを襲わせたこと。
今日もきっと悪い一日になるだらつ。

遠く離れた王宮にも、ゆっくりと朝は訪ねようとしていた。まだ人気も少ない。しんと静まりかえった冷たい空氣の中を、国王カインサーは足早に歩いていた。

彼を先導しているのは、近衛騎士のドリカだ。離れすぎないよう、また王の背後にも気を遣いながら歩いて行く。王宮の一番隅の、誰も足を踏み入れないような古びた部屋の前で彼らは立ち止まつた。ドリカはすぐにその扉を開けようとはせず、用心深く中の気配を探っている。

(……王宮で、ここまで警戒が必要とはな)

弱音が溜息と共にこぼれ落ちそうになり、カインサーは苦笑でそれを押さえつける。まだ道は遠い。けれど、確実に一步ずつ進んでいるのだ。常に理想を掲げ、それに近付けるように努力を続ける。出来ないかもしれないと考えるのは、自分自身を鎖に繋ぐようなものだ。

「大丈夫。俺だけだ」

こちらの気配を感じたのだろう。中から声が聞こえる。この声が聞き慣れた腹心の魔導師イドのものだと確信したカインサーは、扉の前でドリカを待たせ、ひとりでその中へ入る。

「イド。随分と早い時間に呼び出したものだな」

朝が訪れていたとはい、窓のない部屋は薄暗い。普段嗅ぐことのない埃と黴の匂いが、狭い部屋の中にゆっくりと漂っている。調度品はほとんどない。埃を被つた大きな寝台がひとつと、布を被せられた家具が何個かあるだけだ。

「この時間に、しかもこの場所ならば誰も来ないだろうと思つてな王宮の入り口から一番遠いこの部屋を、訪れる者はいない。存在すら知られていないかもしれない、忘れた場所。ここは何代か前の王妃の部屋だったと聞く。けれどこんなに狭い、しかも窓のな

い部屋に自分の妃を住まわせた王がいたのだろうか。

部屋の中央に立っていたイドは、薄暗い部屋の中でも青白い顔をしている。まだ調子が戻らないのだろうか。けれどこんな埃だらけの部屋では座る場所もない。周囲を見渡した仕種でそれを察したのだろう。イドは大丈夫だ、と笑う。

「いくつか報告がある。良いものだけならよかつたんだが」

「シアのことか？ 昨日から定時連絡が途絶えている」

カインサーは冷静だった。イドは頷く。

「どうやらひとりでフォスターに接触したらしい。それを見張つていたドリーティー公爵の手の者に見られていたようだ。恐らく自宅に軟禁されているだろう」

「……そうか」

彼女はいわば切り札だ。フォスターの証言だけではドリーティー公爵を告発することは出来ない。娘であるシアが証言するからこそ、それは成立するのだ。彼女が敵の手中にある今の状況は、カインサーにとってはかなり不利な状況だった。それにこちらの動きを彼が察したのであれば、もう手段を選ばない可能性もある。

だが彼はそれを、ほんの少し瞳を細めただけで受け止める。慎重に事を運ばなければならないのは彼女もわかつていたはずだ。だがシアにもそれなりの想いがあつて、父と敵対してこちら側に協力しているのだ。フォスターと接触したことを早急だと責めることは出来ないだろう。

「娘にも見張りをつけるとはな。それでも娘であるが故に、監禁されるだけで済んでいるのだろう。だがあの男のこと、娘の存在が本当に身の破滅に繋がるとわかればどう出るかわからない。早急に安全な場所に移す必要があるな。彼女が生きている限り、勝算はある」
だがドリーティー公爵の邸ともなれば、王宮に匹敵するほど警備だろう。そこにどうやって侵入するか。さすがのイドでも難しい。それに失敗したときにカインサーの指示だとわかれば、彼は必ず厳しい追及をしてくるだろう。

「だが悪い知らせばかりじゃない。……例の女性もやつと見つかった」

イドはドレーティーの手の者がフォスターの隠れ住む村を襲つたこと、そしてそこで異世界から召還した女性を見つけたことだけを話した。

もうこれしか方法がないと、彼に無理をさせてまで異世界から呼び戻した女性。確かに召還には成功したはずなのに、その姿が見えないのは安易に力を欲した自分への戒めなのかと思い始めた時だつた。シアからの忠告、他国の反応も気になっていた。

「そうか。見つかったのか」

それでも見つかったと聞くと心が騒ぐ。

だが見つかった女性はイドにとっても余うことのなかつた妹だというのに、その表情は晴れやかではない。思い詰めたような顔をして、視線を反らした。

「イド？」

「……いや、彼女は今日中に王都に連れてこようと思つていて。シアが接触したフォスターも一緒に。彼女が話した内容はすべて、向こうに伝わつていると考えてもいいだろう。どんな話をしたのか詳しく聞いたほうがいい。王宮に連れて来るのはさすがに危険だろうから、父が好んで使つていた別宅へ連れて行くつもりだ」

「そうだな。今日の夕方、いや深夜には俺もそこへ向かう。これらのことも決めなければならないだろう」

一番の問題は、シアをどう救出するかだ。彼女がフォスターにどんな話をしたのかも気に掛かる。

「……陛下、そろそろお時間が」

ちょうどその時、見張りをしていた扉の向こうのドリカが遠慮がちに声を掛けてくる。

「わかつた。イド、すまないが話はまた後だ。お前は少し休め。また今夜にでも話をしよう」

頷く彼をその場に残し、カインサーは部屋を出る。暗い室内から

出ると、明るい陽光に一瞬視界を奪われた。

また一日が始まる。

カインサーは小さく溜息を付くと、ドリカに守られてその場を後にした。

決して事態は好転しておらず、むしろ悪化している。これから地道のりは困難を極めるだろう。それにも関わらず僅かながらも高揚を感じるのは、ようやく運命の相手だと予言された女性に会えるからなのか。いったいどんな女性なのだろう。

カインサーと対面した後、イドはすぐに里香子たちがいる邸へ戻つた。自分の部屋として使つてゐる場所へ、魔法で移動する。すると邸の中には焼きたてのパンのような匂いが漂つていた。一応倉庫には貯蓄された食糧はあるが、まだ侍女の手配はない筈だ。不思議に思つて厨房に移動する。

「あ、おはようございます」

そこには、里香子の姿があつた。

すつきりとした身なり、腰まであつた美しい銀色の髪はきつちりと結つて纏められている。パンを切り分ける様子も手慣れていて、この世界に来てから覚えた訳ではなさそうだ。

「勝手にお借りしました。子どもたちがお腹がすいていたから」彼女の傍にはひとり、フォスターがいる。ひとりだけ年上の、それでもまだまだ幼さを残す少女だ。彼女もイドを見るといこりと微笑み、挨拶をした。

「朝食の手配が遅れてしまつたな。昼からは侍女を呼んで準備させよ」

だが里香子は首を振つた。

「いえ、ここを使わせて貰つてもよいのなら、私たちで出来ますから。それに知らない人がいると子どもたちが怖がるので」慣れた手つきを見る限り、それを苦痛に思つてゐる様子は微塵もない。むしろ楽しげだ。だからそれ以上言つことが出来ず、ただ話があるから朝食後に来て欲しいとだけ告げてイドはその場を離れた。彼女は私たち、と言つた。

姿は変わつても、意識はやはりフォスターを仲間と思つてゐるまなのだろう。妹とはいえ、まったく違う環境どころか違う世界で育つたのだ。まして向こうは兄妹であることも知らない。仕方がない、とはいえる距離感に寂しさのようなものを感じてしまう。

頭を振つてその思いを吹き飛ばし、もうひとり目的の人物を捜し出す。二人を王都へ連れて行かなければならぬ。

里香子は瞳を閉じていた。緊張しているのかもしれない。隣にいるシユカを見上げる。彼は励ますよに優しく微笑んでくれた。

(うん。……大丈夫)

イドに連れられて、里香子とシユカは王都に来ていた。

そのあまりの人多さに、そして建物の美しさに里香子は驚いた。同じ国でもこんなにも違うのだ。美しく整備された街道。商店街の活気。綺麗な服を着た女性たち。白く美しい建物。

その立ち並ぶ建物のひとつに、イドは一人を案内した。

「すまないが、ここで待つてくれ。部屋は好きに使ってくれてかまわない。夜にならないとカインサーは来られないから」

そして彼も忙しいのだろう。危険だから外には出ないよう、また夜に来ると言い残してその場を去った。

(……カインサー)

きっとそれが、この国の王の名前なのだろう。

小さくその名前を呟いてみると、不意に切ないような、悲しいような気持ちになつて首を振つた。会うのが怖い。

シユカの姿を探すと、彼は窓から外を眺めていた。この国を中心。里香子も寄り添うようにその隣に並び、同じ光景を見つめた。

煉瓦造りのような家が建ち並び、石畳を敷き詰めた道がその間を走つている。上から眺めると、その整然とした様子がはつきりとわかつた。けれど縁が少ないのでなく、ところどころにまだ花を咲かせているのが見える。

「綺麗な町ね」

「……ああ、そうだな」

田の前の景色を瞳に映している彼は、何を思つているのだろう。

思考の海に沈んでいるかのような様子に、里香子はそつと傍を離れた。邸の中を見て回る。どうやらここは魔導師の家のことだ。

(あの人のかな?)

そうだとしても、今は使っていない場所なのだろう。汚れてはないが、どの部屋も人の気配は残っていない。その為に少し寂しげな印象を受ける。長い間留守だったようだ。

「この部屋は図書室、かな?」

その中にひとつだけ、人の気配が残っている部屋があった。本棚が部屋の壁に沿ってびっしりと並び、その高さは天まで届いている。中には古そうな本がきちんと並べられていた。どうやら魔法に関する本ばかりのようだ。灯りはないが、天上的高い位置に窓があり、太陽の光が注がれていてとても明るい。

興味を引かれて、里香子はその部屋の中に入った。本棚に手を伸ばし、その中の一冊を手に取る。ぱらぱらと捲ると、本の間に挟まっていたらしい紙がひらりと舞い落ちた。

「あ……」

慌てて拾い上げようとして、その紙に触れる。すると、すつと部屋の温度が下がったような気がした。すると誰もいなかつた筈の背後から、人の気配。けれど不思議に恐ろしさは感じない。里香子はゆっくりと振り向いた。

椅子に座っている女性が見える。

高貴な身分なのだろう。白のレースをあしらつた豪奢なドレスを身に纏い、金色の髪を結い上げずにそのまま垂らしている。ふわりとしたドレスでもわかる腹部の膨らみ。妊娠しているのだろう。とても美しい女性だった。嬉しさを隠しきれないように、そつと自らの腹部を抱く。

(名前はもう決めているの)

濃い青色の瞳が、背後を振り返る。そこには銀色の髪をした魔導師がいた。どことなくイドに似ているが、その表情は彼よりも鋭利さを感じる。けれど傍らにいる女性を見る瞳は、優しさと労りに満

ちていた。

(エリセールというの。どうかしらへ。イドとエリセール。そしてあなた。私の宝物だわ)

幸せそうな顔をして微笑んだその姿が、ゆっくりと消えていく。
誰もいない部屋は元の静寂を取り戻した。里香子は呆然と、その場に立ち尽くす。

「今は……」

拾い上げた紙。古い紙なのだろう。やつくりと開くと、そこには美しい筆跡で、ひとつの名前が綴られていた。
エリセール・リリナティ・ロドワール、と。

女性の深みのある青の瞳と、男性の銀髪は今の自分の姿によく似ていた。

古い紙にもう一度目を通す。

「もしかして、私の……」

だとしたらあの一人は、この世界での自分の両親なのだろうか。気が付くと涙が頬を伝っていた。とても幸せそうだった。とても嬉しそうだった。産まれることを、あんなにも楽しみに待ち望んでくれていたのだ。

ありがとう。

里香「子はその古い紙を抱き締める。

「……イド、ヒリヤール……？」

ふと思い出した言葉。

確かに母であろう女性はそう言っていた。あの愛しさに満ち溢れた言葉は、まだ耳に残っているかのようだ。

イド。それは自分をこの世界に呼んだといつ、銀色の髪をした魔導師の名前。

父と思われる男性は、彼にとてもよく似ていたと思つ。

「まさか……」

もしかしたらこの国に、まだ生きている家族がいるのかもしれない。けれど、そうだとしたら何故彼は名乗らないのだろう。きっと何か理由があるのかもしれない。だから彼から言つてくれるまで、静かに待つ方がいいだろう。

向こうの世界でも早くに両親と死に別れ、兄妹もなく育った里香子は肉親というものには縁が薄かつた。もう一度、その紙を見つめる。

愛してくれていた。会えるのを楽しみにしてくれていた。そしてこの世界には、兄がいるかもしれない。

それはまるで、暗闇にひとつ明かりが灯つたような。

ここはただ単に、生まれる筈だった国。そう思つていた里香子の心を、その明かりは照らしてくれた。

愛しい、とその時里香子は思った。
この国が、とても愛しい。

綺麗な町並みを、赤い夕陽が自分の色に染めている。

まるで別世界のように整つた町にも、山での生活と同じように一日は廻つてくるのだ。

ショカはぼんやりと、窓から見える景色を見つめていた。

田舎の村でさえ恵まれた暮らしが見えた。けれどこの窓から見える町の光景は、その村でさえ小さな存在だったと思い知るには充分だった。

整備された綺麗な道。

歩きやすいように石畳が敷き詰められ、雑草ひとつ生えていない。

綺麗な服を着た女性や、子どもたち。

その顔には何の不安もないように見えた。笑顔が溢れている。

遠くに見える市場にはたくさんの野菜や果物が並び、手に入らない物はないように見える。

町の入り口や城門には、警備兵や騎士の姿。

これが貴族の暮らしだというのならば、それも仕方ないと思えただろう。彼らは違う種類の人間だ。今フォスターの仲間がいる場所も、元々は貴族の住んでいた場所。豪奢なのは当然だと思っていたけれどこの町に暮らしているのは、村よりは裕福かもしれないが普通の人間だ。

食べ物もなく寒さで震えている子どもたちの姿が浮かぶ。

薬がないために、高熱で喘ぐ苦しげな顔。人の気配に怯えて、それでも決して声は出さないように唇を噛み締める白い顔。

同じ国の、同じ種類の人間。それがどうしてここまで違うのか。

ただフォスターとして生まれたというだけで。ただひとりの貴族が裁かれるだけで、本当にこの差は縮むのだろうか。

この町に生きている人に、罪はない。それはわかっている。彼らはただこの地に生まれただけだ。自分たちがフォスターに生まれたのと同じように。人は自ら生まれる場所を、選ぶことは出来ないのだから。ならばやはり、罪があるのはこの国か。

この町に、来なければよかつた。

見なければ、知らなければ。憎む心を持たずにいたられたのに。

シユカは瞳を閉じた。

この国に対する憎しみを消し去りたいとするよつて。

「シユカさん」

柔らかな声が聞こえた。里香子の声だ。

振り返ると姿は変わつても愛しいただひとりの女性が、そつと寄り添つてきた。

煌めく深い青色の瞳はまるで夢を見ているかのよつ。銀色の髪も今は緋色に染まつていた。彼女を愛しいと思う心だけが、憎悪を消し去つてくれるような気がして。その華奢な肩に腕を回し、抱き締める。

「この国が、愛しい。
この国が、憎い。

相反する感情を胸に抱きながら、それでも互いに対する思いにはただひとつ変化も、偽りもなく。抱き合つ一人を、夕陽は少し悲しげに照らしていた。

もうすぐ、夜が来る。

運命がゆつくりと足音を響かせて、一人の元を訪れようとしている

た。

長い一日だった。

執務室で書類に目を通していったカインサーは、窓の外がようやく暗くなつてきたのを目にして、小さく溜息を付く。意識はもう随分と前から、手にしていた書類にはなかつた。

薄暗くなつてきた室内に、明かりを灯す。

今夜、自分のこれから運命が決まる。そんな予感がカインサーにはあつた。

ここは執務室ではなく、カインサーの私室だった。広い室内には誰もいない。

今日は体調が優れないので私室で仕事をすると偽り、部屋に籠もつてゐる。だから今、この部屋の周辺にいるのは護衛のドリカだけだ。イドによつて透視魔法を無効化する結界が張られている為、密偵の目も届かない。

常に誰かの視線が向けられ、密偵もどこに潜んでいるかわからない生活にも慣れていたが、たまにイドに頼んでこういう田を設けてもらつこともあつた。常に張り詰めていてはかえつて隙を作つてしまつからだ。

やがて闇はゆつくりと世界を覆い尽くす。

窓から見える町の明かりも疎らになつてきた頃、カインサーは広がつていた書類を片付けた。そろそろイドがやつてくるだろう。この胸に宿つているのが不安か、それとも期待なのか。もう区別が付かなかつた。ただ自分の運命が決まるつとしている。それだけが頭の中から消えなかつた。

「カインサー」

それからしばらくして、イドは姿を現した。

だがその表情は暗い。顔色もあまり良くないよう見える。

「どうした？ 何があつたのか？」

召還以来彼の体調はいつもに良くならないが、今日はいつもよりも更に調子が悪そうに見える。気遣う言葉を口にするカインサーに、イドは大丈夫だと笑みを作つてみせる。

「それよりも話しておかなければならぬことがある。最初に言えばよかつたんだが……」

言いにくいのか、何度も戸惑いながらイドが告げたのは、これから会う一人、イドの妹の里香子といつ女性と、そしてフォスターのシユカという男との関係だった。

それは少なからず、カインサーに衝撃を与えた。イドが今まで言えずにいたのだろう。

呪術によつて力と真の姿を封じられていた時に、彼女はそのシユカという男と出逢つた。自分の運命を何も知らず、何故この世界にいるかもわからずに、不安だつただろう。

それを救つたのが彼だとしたら。

すぐに彼女を保護出来なかつた。それは今更どんなに悔やんでも、変えようのない現実。その事実がある以上、彼らに何を言えるとうのだろう。

それでも亡き母の遺言は、懸命に戦い続けるカインサーの支えともなつっていた。まだこちらには切り札がある。そう思つことが氣力にも繋がつていたのだ。

それも今、完全に絶たれたのだろうか。

押し込められていた不安は、あまりにも突然にカインサーの元へ押し寄せてきた。

このまま終わるのではないか。

自分は足搔くだけで、結局、何者にもなることが出来ず。

この国は何ひとつ、変わらないのではないか。

「……すまない、俺が、俺がちゃんと召還を成功させていれば、けれど俯こうとした彼を思い留まらせたのは、苦渋に満ちたイドの声。

「そうすれば、きっとこんなことにはならなかつた。俺がお前の運命を、変えてしまつたのかもしれない……」

憔悴した様子。今にも倒れそうな顔色でイードは俯く。

その姿を目にして、落ち込んだ様子など微塵も見せる訳にはいかなかつた。

「彼らはこの事実を知つてゐるのか？」

「ああ。……隠しては置けないと想い、すべてを話した」

「どうか、と頷いてみせる。何でもない報告を聞くよう。」

「それでも彼らが協力してくれるのならば、何の問題もない。シアの言つよう外の問題もあるからな。何よりも今は、あの男をどうするかだ」

幼馴染であり腹心の友。臣下といつよりは同じ志を持つ仲間。そんな仲間であるイードの前で、感情を偽つたのは初めてだつた。今、自分が失つたもの。

それは感情を一切偽ることなく、本音で話すことが出来た場所。そこでは何の遠慮も配慮もなく、思うがままを口にすることが許されていた。

自分が置かれていた環境を考えれば、それはとても貴重な場所だつたに違ひない。

「もちろん、彼らもその点に関しては協力的だ。心配ない」

けれどその言葉を聞いた時のイードの顔に、隠しきれない安堵の色が見えたとき、カインサーは決して後悔はするまいと誓う。

彼が腹心の友であるからこそ、言葉。それを後悔するような男には、決してならないと。

「ならば彼らとも早々に話し合ひをしなければならないな。シアの身も心配だ。すぐに向かおつ」

もし勝算がなかつたとしても、これからも全力で戦い抜く。ただそれだけだ。きっとこれが、新たに定められた自分の運命なのだろう。

何かを為すことが出来なくても、志半ばで力尽きよつと。それが

たつたひとりでの戦いだとしても、自分は全力で戦い抜いた。後悔はひとつもない。

そんな風に生きることが出来るならば、それで構わない。

(……里香子、か)

心の中だけでそつと呴いてみたのは、断ち切つた運命の女性の名前。先程までの期待とは異なり、今は彼女と対面することが怖かつた。

運命とは、どのくらいの強さで引き寄せられるのだろう。

あがらひとの出来ない強い思いにて、翻弄されることを恐れた。

けれど例え世界を手にすることはなくとも、愛した人と一緒に居られるのならば、彼女はきっと幸せになるだろう。王族とフォスターという身分の差も、彼女が異世界から召還されたイドの妹だと公開しなければ問題にならない。

彼女が自分で選んだ男性と幸せに生きることが出来るようになる。そうする」とが、何もわからずこの地に放り出されてしまった彼女の償い。

「移動する」

イドの言葉に、カインサーはゆっくりと頷いた。

景色が変わった。

長い間人が住んでいなかつた建物特有の、冷たい空気が身体を包む。薄暗い室内。明かりは、机の上に置かれているランプだけだ。イドの魔法が部屋全体を明るく照らした。まるで昼間のように。部屋の中央に視線を向けると、その明かりに照らされた人影がふたつ、寄り添い合うようにして立つている。

ひとりは長い銀髪の美しい女性。

もうひとりは、黒髪の男性。

支え合つかのように寄り添ふたりは、静かな視線をこちらへと向けていた。

まず目に入ったのは、暗い部屋を皓々と照らし出す光に煌めく、美しい銀色の髪。

それはイドと同じ輝き。彼の血筋である証明。深い青色の瞳が静かにこちらを見つめている。細い肢体に身に付けているのは、シンプルな平服。それでも隠しきれないその美貌は、着飾つたら目も眩む程だろう。白く細い手は、隣にいる黒髪の男性の腕にしがみついていた。

(彼女が……)

魔導師の力を受け継がなかつたカインサーにはわからないが、人目を惹き付ける美貌に加えて、彼女にはこの国で最高の魔導師であるイドすら超える魔力を秘めているのだという。

まさにふたつとない秘宝のような存在。

それを普通の男が守れるのだろうか。カインサーは黒髪の男性へと意識を向ける。

この国の平均的な男性と比べるとそんなに大柄ではない。けれどその身を包む雰囲気は、まさに百戦錬磨の傭兵のようだつた。どれだけ死地をくぐり抜けてきたのだろう。だが鋭さだけでは

なく、覚悟のよだなものを内に秘めているのを感じる。守るべき女性、守るべき仲間がいる。その為に決して屈しない。そんな覚悟だ。彼のような男が味方ならば、どんなに心強いだろう。

寄り添い合う二人は、まるで完成された絵画のように見える。一緒にいるのが当然であるかのように。

イドがあれほど躊躇いながら、それでも話さずにはいられなかつたのがわかるようだ。何も知らずにこの光景を見たら、さすがに平靜でいる自信はなかつたかもしれない。たつた一目見ただけなのに、彼女の姿は心の奥底に刻み込まれてしまつたかのようだ。カインサーは王という立場からあまり深い信仰心は持たなかつたが、女神がいるとしたらきっとあのよだな姿をしているのだろう。

小柄な彼女はほんの少し背伸びをして黒髪の男性に何事かを囁き、そして微笑んだ。

その微笑み。

美しい花が咲く瞬間を目撃したのなら、きっとこんな気持ちになつたに違いない。あがらう術もなく、心が惹き付けられる。

けれどイドの視線を感じ、カインサーは意識して視線を反らした。もし何も知らずに出逢つていたら、あの微笑みに魅せられるまま彼女を愛していたのかもしねない。

だが添い遂げることが出来るのなら安らぎになる愛も、片恋ならば負の感情しか生み出さないだろう。

いや、例え相愛になつたとしても国王である限り、この戦いは終わらない。安息のない戦いの日々を、彼女にも強要することになつてしまふ。そして国王として即位した以上、国よりも大切な存在を作ることにはいかないのだ。

それならば。それよりならば彼女だけを愛し、大切に出来る男が傍に置いた方が良い。

イドが召還に成功したとしても、きっとそう思つていた。彼に落ち度は何もない。これが最初から自分の運命だつたのだ。

けれど。

視界の隅で揺れる銀の影。

ほんの一時でいいからあの微笑みを自分にも向けて欲しいと、そういう願う心はじつたら完全に消え去ってくれるのだろうか。

シュカは、イドと共にこの場に現れた男を見つめた。

想像していたよりずっと若い。恐らく自分とそう変わらないに違いない。

背は高く、ルーパリーと同じくらいだろう。

彼とは違つて瘦身だが、鋭い双眸のせいで貧弱な印象はまったくなかつた。その蒼い瞳に宿る色は、見た目の年齢よりも遙かに深く、そして鋭い。

短い金色の髪に、国王としての威儀を損なわない程度に装飾を控えた衣装。華美を好む貴族たちの中では浮いて見えるかもしない。けれどそこに、流されることのない彼の強固な意志を感じさせる。森で出逢つたシアとこの女性もそうだつた。彼もまた、固い信念を持つて戦い続けているのだろう。

彼らのような者が、まだこの国にはいるのだ。それがとても小さな光としても、この国はまだ暗闇に包まれてはいない。

(そうか。この男が……)

里香子の、運命の相手なのか。

元から彼女を譲る気などまったくなかつたが、それがつまらない男ではなく、彼のような者でよかつたと、シュカは思う。

だが彼は意識して、里香子から視線を反らした。

興味がないのならば、わざわざ召還魔法を実行させることはないだろうに。

彼はただ静かにイドの話に静かに耳を傾けている。そしてイドにシアとの会話の詳しい内容を聞かれ、シュカもそれに答えた。

けれどイドが、ほんの少し視線を反らした時。彼は憂いを帯びた

眼差しを、里香子の居る方向に向ける。直接彼女を見よつとしない
その視線に、彼の苦悩が見えた気がした。

瞳を反らした。

憎しみを持ち続けていられるような相手だったなら、罪悪感を持
たずにはいられたのかも知れない。

里香子はシユカの腕に縋り付きながら、じつと彼らの話を聞いていた。話し合いは真剣で、そして長時間に渡っていた。

段々と夜が薄れてきたのを感じる。外は夜明けに近いのかかもしれない。

（このひどが、王様なんだ……）

最初は緊張と恐怖で見ることが出来なかつた存在も、長時間同じ部屋にいると少し馴染んでくるのだから不思議だ。里香子は視線を金色の髪をした王に向ける。

イドと同じくらいの年だろうか。若いが、王に相応しい威風堂々とした立派な人物のようだ。短い金色の髪に、蒼い双眸。まるでおとぎ話に出てくる王子様のような整つた顔。けれどこの人こそ運命の人だと思うようなときめきは感じない。

彼も真剣な表情でイドやシユカと話し合いをしているが、あまりこちらには視線を向けない。政治的な話ばかりで、あの予言や運命を持ち出す様子もまったくなく、里香子は少し安堵する。

話し合いは敵の手の中にいる仲間の女性を、どうやって助け出しかということのようだ。

シユカの隣にいるイドを見上げた。彼の表情も真剣そのものだ。イドを見つめていると、ぼんやりと女性の姿が浮かぶような気がした。

茶色の髪をしたとても綺麗な女性。窓のない暗い部屋に押し込められているようだ。明かりひとつない暗闇で、彼女は両手で顔を覆つて泣いている。そのあまりにも悲しげな姿。手を差し伸べたくなった。

「……大丈夫だから」

彼女を慰めてあげたい。あの暗い牢獄のような部屋から出してあげたい。

いつのまにか里香子の意識は、その部屋にいる女性に向かっていた。

間近で聞こえたその声にシユカが振り返る。

どうした？と問おうとした言葉は、掛けられることはなかつた。ほんの一瞬前まで触れ合っていた筈の彼女の姿が消えている。

「里香子？」

シユカの緊迫した声にイードとカインサーも振り返る。彼の隣にいた筈の里香子の姿がない。

「……魔法を使ったのか？」

その波動を感じ取つたイードの表情が険しくなる。

「魔法？」

「転移の魔法。けれど誰かに連れ去られたのではない。彼女自身が使つた魔法なのだろう。けれど……」

彼女自身の意志がきちんと伴つて発動したのではない。まだ目覚めたばかりの彼女の魔力は誰よりも強いが、不安定だ。

瞳をしっかりと閉じて、魔力の波動を辿る。彼女が無意識に考えたのは誰のことだろう。

暗い部屋。

閉ざされた牢獄に、一筋の光が射した。

闇に慣れた瞳にはあまりにも眩しくて、直視することが出来ない。シアは瞳を閉ざした。それでも感じる銀色の煌めき。

光に焦がれた自分が見ている夢なのだろうか。それとも、自分の魂はこの牢獄から解き放たれようとしているのだろうか。

確かめようとそつと瞳を開けてみると、そこには銀の女神がいた。流れるような銀色の髪はこんな闇の中でも煌めきを失っていない。肌はこの闇に反するかのように白く、深い色の瞳は慈愛を感じさせ

る。

(女神さまだわ……)

光に焦がれるかのよつて手を差し伸べる。銀の女神は穏やかに微笑んでその手を握る。

そして。

「…………あれ、ここは何処?」

慌てたように周囲を見渡した。焦りを含んだ瞳が、シアを見つめる。

「あの…………私、何処に来ちゃったんでしょう?」

彼女は女神ではなく人間、しかも類い稀な強い魔力を持ちながらも制御することが出来ない様子だった。

「ここには確か、父が魔力を撥ね除ける結界を張つたはず。それをくぐり抜けてきたのね」

だとしたらそれは、あまりにも圧倒的な強い力だ。

けれど里香子と名乗った銀髪の恐ろしく綺麗な女性は、そんな様子は微塵も見せずにシアの隣にちょこんと腰を下ろすと、両手で膝を抱えた。

「うーん、これって魔法つてこと? 一度と使わないって思つたんだけどな。でも無意識じや仕方ないのかな。心配してるとね。どうやって帰ろう?……」

この牢獄から助け出してくれる救世主かと思つたが、どうやら違うようだ。

話をよくよく聞いてみると、自分を助け出す為の話し合ひが行われ、彼女はそれに同席していたらしい。そこで話に感化されてここまで跳んできたのだとすると、制御出来ない魔力というものは恐ろしいのだと思い知る。

思わず来客を、シアはじつくりと眺めた。美しい銀の髪。そしてこの魔力。

「もしかして、イド様の身内の方ですか?」

思い立つた可能性を口にすると、彼女は否定も肯定もせず、困つ

たように首を傾げる。

「そう、らしいけれど。私にはあまりよくわからなくて。この世界で育つた訳じゃないし」

「…」

その言葉が意味する事実を、シアは知っていた。

（この方が、異世界から呼び寄せた……）

イドはどうとうを見つけ出したのだ。カインサー王の、運命の女性を。

「この比類なき美しさと力は、まさに彼に相応しいだろ？」

シアは立ち上がった。

もう自らの迂闊さを嘆いてばかりではいられない。ここは父の邸。彼女にとつては危険な場所だ。力を欲してやまない父が、世界を支配出来る力を持つ女性が手の内にいると知れば黙っているはずがない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3555o/>

そして時は廻る

2011年10月7日18時34分発行